

Ⅱ. 評定尺度調査の分析結果

【評定尺度調査の分析にあたって】

今回用いた評定尺度は、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」による4段階評価である。

本報告書においては、データの理解や分析のしやすさを考慮し、便宜的に4段階のカテゴリーに4～1の点数を振り、その平均値を算出することによって、データの代表値とした。

ただし評定尺度の各カテゴリーに振られた「数字」を「数値」として加減乗除の演算をすることは、厳密に言えば統計処理として適切でない。

3が2よりもあてはまる程度が大きいことは言えても、4と3の間と3と2の間が等距離（つまり1の間隔）だという保証はどこにもないからである。

しかし4つのカテゴリーごとの相対度数（パーセント）から何らかの傾向を掴み取るとは容易ではないため、平均値を回答の傾向を推察する目安の1つとして用いたい。

また、ここでの平均値は何らかの単位を持つものではないので、データ同士の相対比較でのみ、その傾向を読み取ることになる。仮にある項目の平均値が、他の項目より低かったとしても、大部分の回答者がその項目に対して肯定的な評価をしていれば、その項目の評価は低いと簡単に断言できるものではないからである。つまり絶対的な評価が把握しにくいと言える。そこで、「あてはまる」もしくは「ややあてはまる」と回答した対象者の割合を合計して提示した。

これによって、その評価項目に対し肯定的評価をしている学生がいかほどの割合で存在するかを推測する目安とする。

さらに回答者の属性ごとの回答者数について、本来ならば、グラフ等のデータごとに回答者数を示すべきであるが、全てのデータに回答者数を掲載すると極めて煩雑になるため、ここに一括して掲載することにした（次頁表2-1）。

以下、本章においては、常に次頁の回答者数に基づいてデータを見る必要がある。特に回答者数の少ない層ほど誤差が大きくなる傾向で、注意が必要である。

たとえば、大学院では職業別の「看護師等」（3人）、「家事専業」（1人）、「パート・アルバイト」（17人）、「他大学等の学生」（3人）、「その他」（14人）、（農業等は0人）で、年齢階層別では、「20～29歳」（12人）が挙げられる。

いずれも参考値としてグラフに記載しているが、極端な値の時は、コメントを割愛する事にする。

表 2 - 1 回答者数一覧

【学部】

全体		7,320		(単位:人)	
メディア		年齢階層			
テレビ科目(TV)	3,928	19歳以下	26		
ラジオ科目(R)	3,392	20～29歳	474		
職業		30～39歳	850		
公務員等	720	40～49歳	1,754		
教員	1012	50～59歳	2319		
会社員	1524	60～69歳	1,341		
個人営業・自営業	555	70歳以上	556		
農業等	31	コース			
夏季集中科目(司書)	540	基盤科目(外国語)	240		
家事専業	412	生活と福祉	893		
パート・アルバイト	984	心理と教育	4443		
他大学等の学生	34	社会と産業	473		
無職	1,067	人間と文化	559		
その他	441	情報	416		
		自然と環境	60		
		看護師資格取得	134		
		夏季集中科目(司書)	102		

【大学院】

全体		223		(単位:人)	
メディア		年齢階層			
テレビ科目(TV)	-	20～29歳	12		
ラジオ科目(R)	223	30～39歳	25		
職業		40～49歳	49		
公務員等	35	50～59歳	65		
教員	53	60～69歳	53		
会社員	47	70歳以上	19		
個人営業・自営業	19	プログラム			
農業等	0	人間発達科学	54		
看護師等	3	臨床心理学	62		
家事専業	1	社会経営科学	45		
パート・アルバイト	17	人文学	24		
他大学等の学生	3	情報学	38		
無職	31				
その他	14				

Ⅱ－1. 学部の分析結果

Ⅱ－1－1. 項目平均から見た全体的傾向

ここからは、A-1～B-20 の評価項目（14 頁の提供資料サンプルを参照）ごとに、平均値と肯定的評価のグラフを基に、そのデータから目立つ点や、特徴的傾向を記述していくことにする。

平均値は、評価項目の選択肢である「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」に対して順に 4 点、3 点、2 点、1 点の得点を与え、その得点合計を回答者数で割った値である。全員が「あてはまる」とした場合、平均値は 4.00 で最も高くなり、全員が「あてはまらない」とすると最低の 1.00 となる。

また、肯定的評価は文字通り「あてはまる」と「ややあてはまる」の比率の合計である。

平均値より肯定的な評価の方が（例えば回答者の 80% と）イメージしやすく、平均値と肯定的評価に齟齬が出た場合、どちらを採るか合理的な判断ができないので、記述については肯定的評価を用いて、平均値は参考値として扱っていきたい。

また、過去 2 年間との年度間の比較（23 頁、25 頁等）の箇所は、比率の差の検定結果から、全体の回答者数（2020 年度：7320 人 2019 年度：4550 人 2018 年度：2136 人）が多いため、各比率の差が概ね 2 ポイントで有意となり、2 ポイント以上で差があることとした。

テレビ科目とラジオ科目のメディア間の比較では、同検定結果から概ね 2 ポイントで有意差が見られるため、年度間比較と同様 2 ポイント以上で差があることとした。

図 2－1 の肯定的評価では各項目とも 90% 以上で、特に『全体評価（B-16～B-20）』は 94% と最も高く評価されていた。

『授業評価に関わる項目平均（B-1～B-20）』と『全項目平均（A-1～B-20）』はそれぞれ 92% と同率の項目平均であった。

図 2－1 【学部】項目平均による全体的傾向

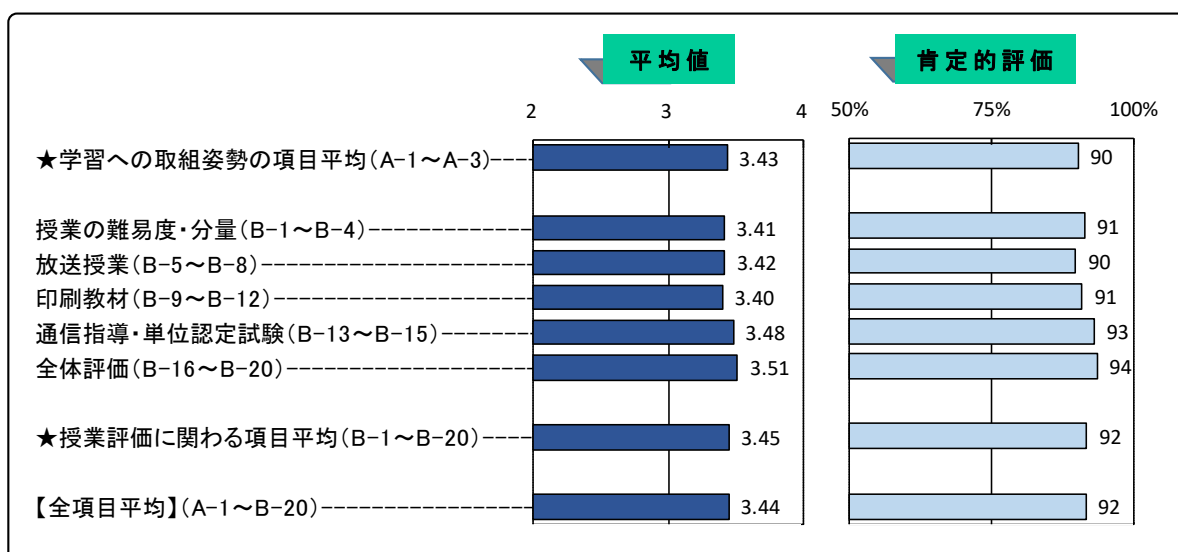
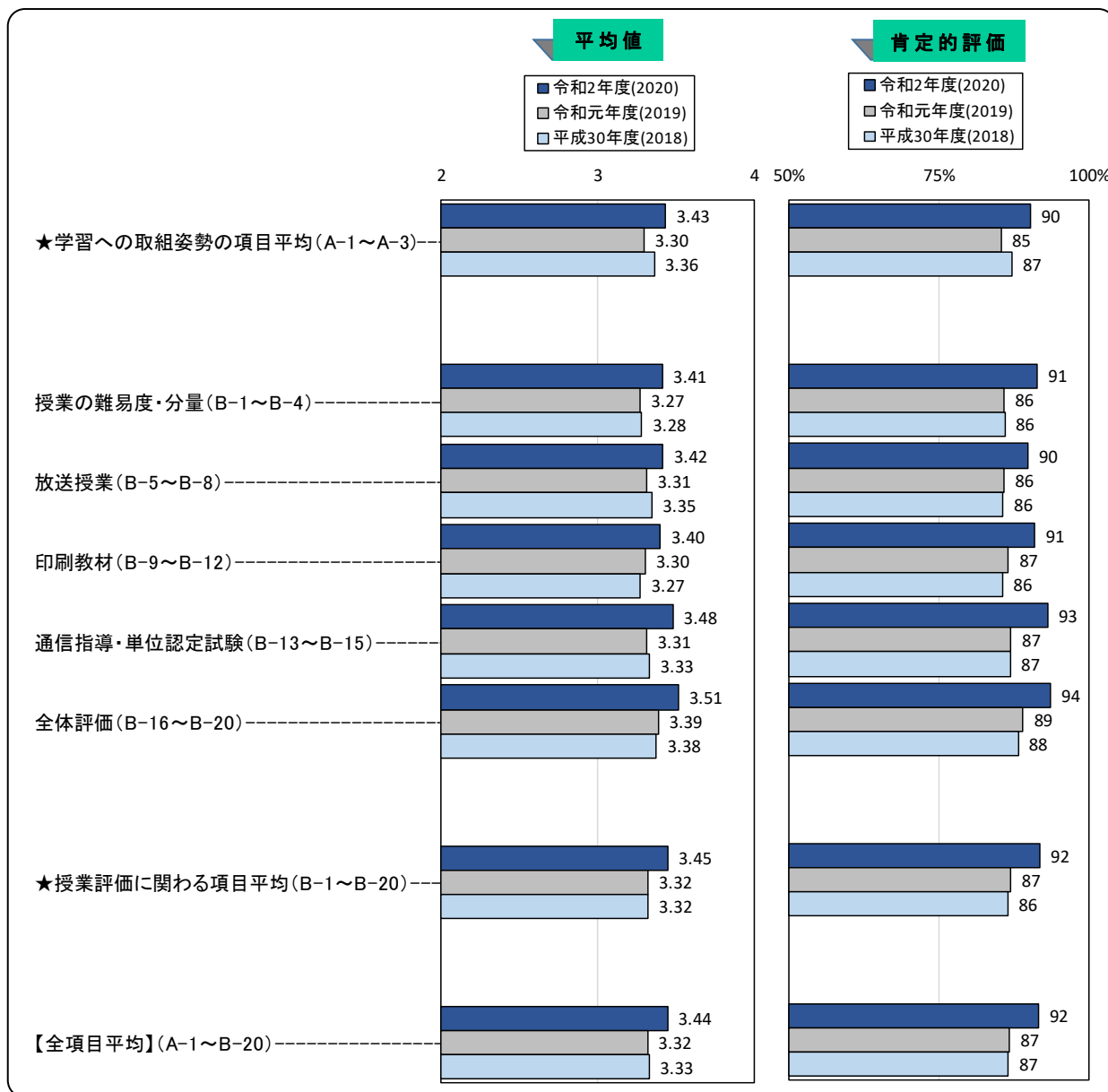


図2-2の項目平均による全体的傾向では、肯定的評価が本年度は、全ての項目で昨年度より4~6ポイント増の90%以上となり、過去2年度を上回っていた。

全項目の中で『全体評価』が最も高く、94%に達していた。

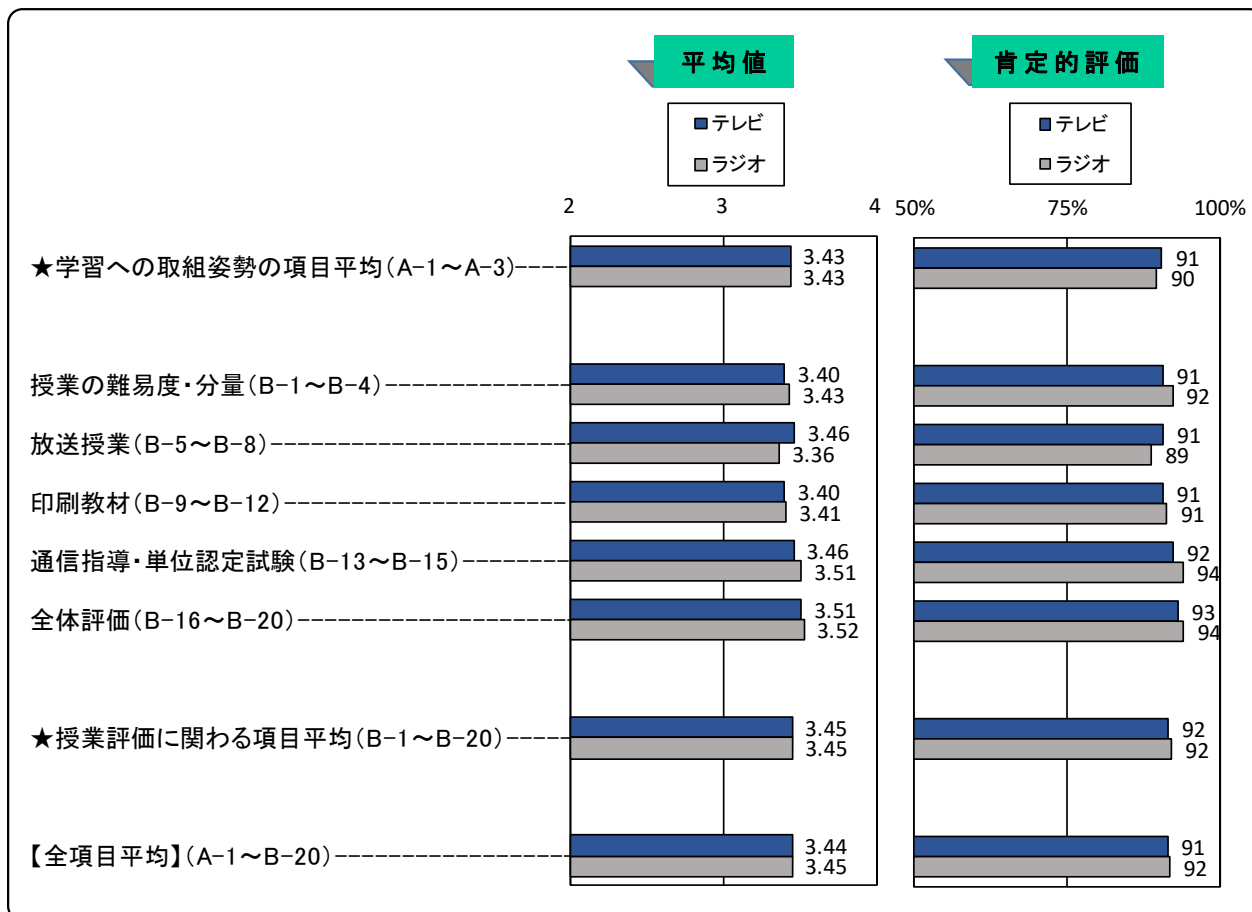
図2-2 【学部】項目平均による全体的傾向（開設年度比較）



メディア別では（図2-3）、テレビ科目（n=3928）とラジオ科目（n=3392）のメディア間で『放送授業』と『通信指導・単位認定試験』以外は各メディア受講生の評価はほとんど変わらなかった。

『放送授業』はテレビ科目が3ポイントアップの91%で高く、『通信指導・単位認定試験』はラジオ科目が94%で2ポイント高かった。

図2-3 【学部】項目平均によるメディア別全体的傾向



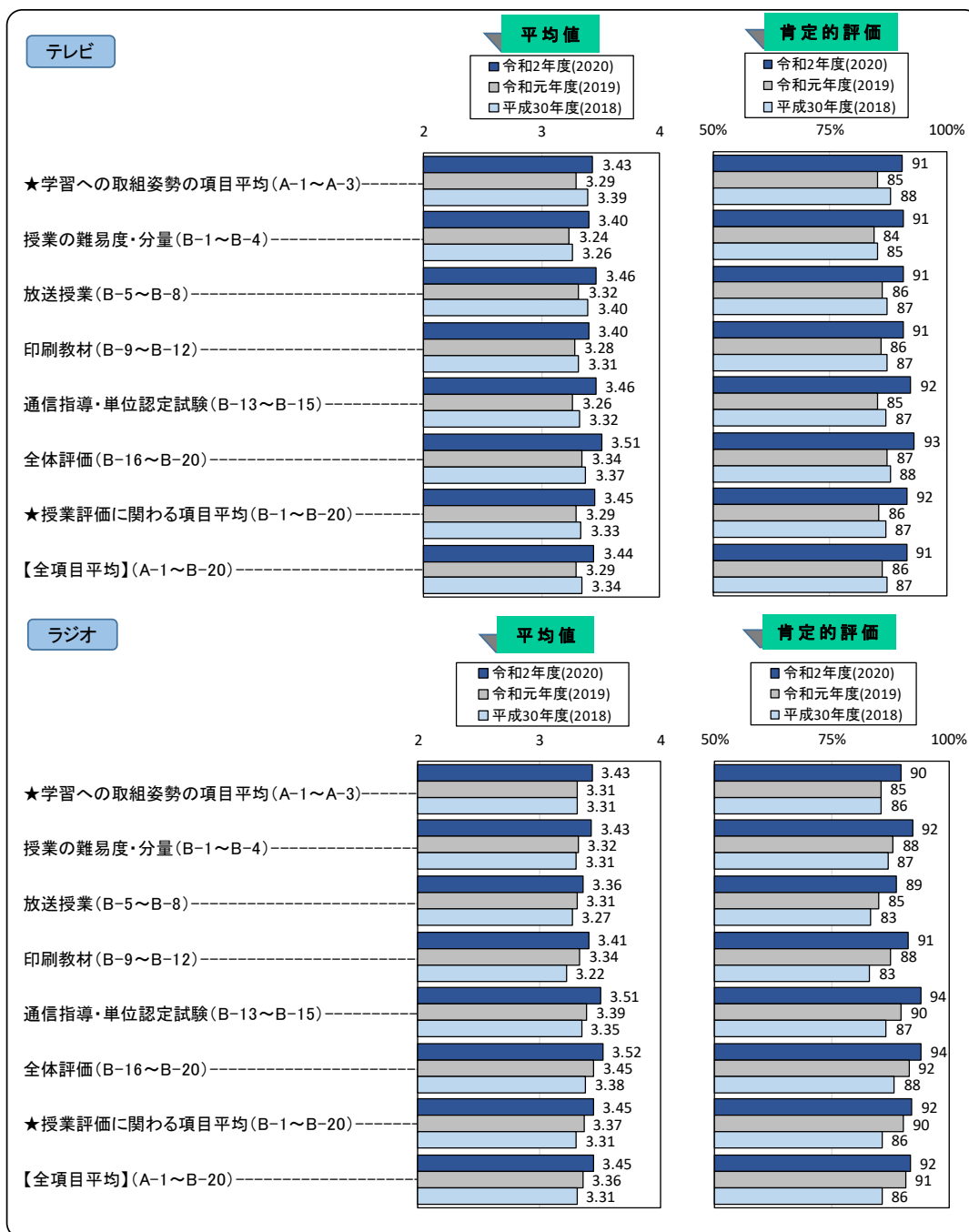
次にメディア別の項目平均を時系列で比較してみると（図2-4）、テレビ科目では、本年度は昨年度より全ての項目が上昇しており、特に『学習への取組み姿勢』『授業の難易度・分量』『通信指導・単位認定試験』『全体評価』が6～7ポイント増で、91～93%に達していた。

その結果、『授業評価に関わる項目平均』も6ポイント増の92%となっている。

ラジオ科目でも、『学習への取組み姿勢』から『全体評価』までは、昨年度を上回っており、中でも『学習への取組み姿勢』と『授業の難易度・分量』『放送授業』『通信指導・単位認定試験』は4～5ポイント増であった。

最も評価が高かったのは、『通信指導・単位認定試験』と『全体評価』で、共に94%に達していた。

図2-4 【学部】項目平均によるメディア別全体的傾向（開設年度比較）

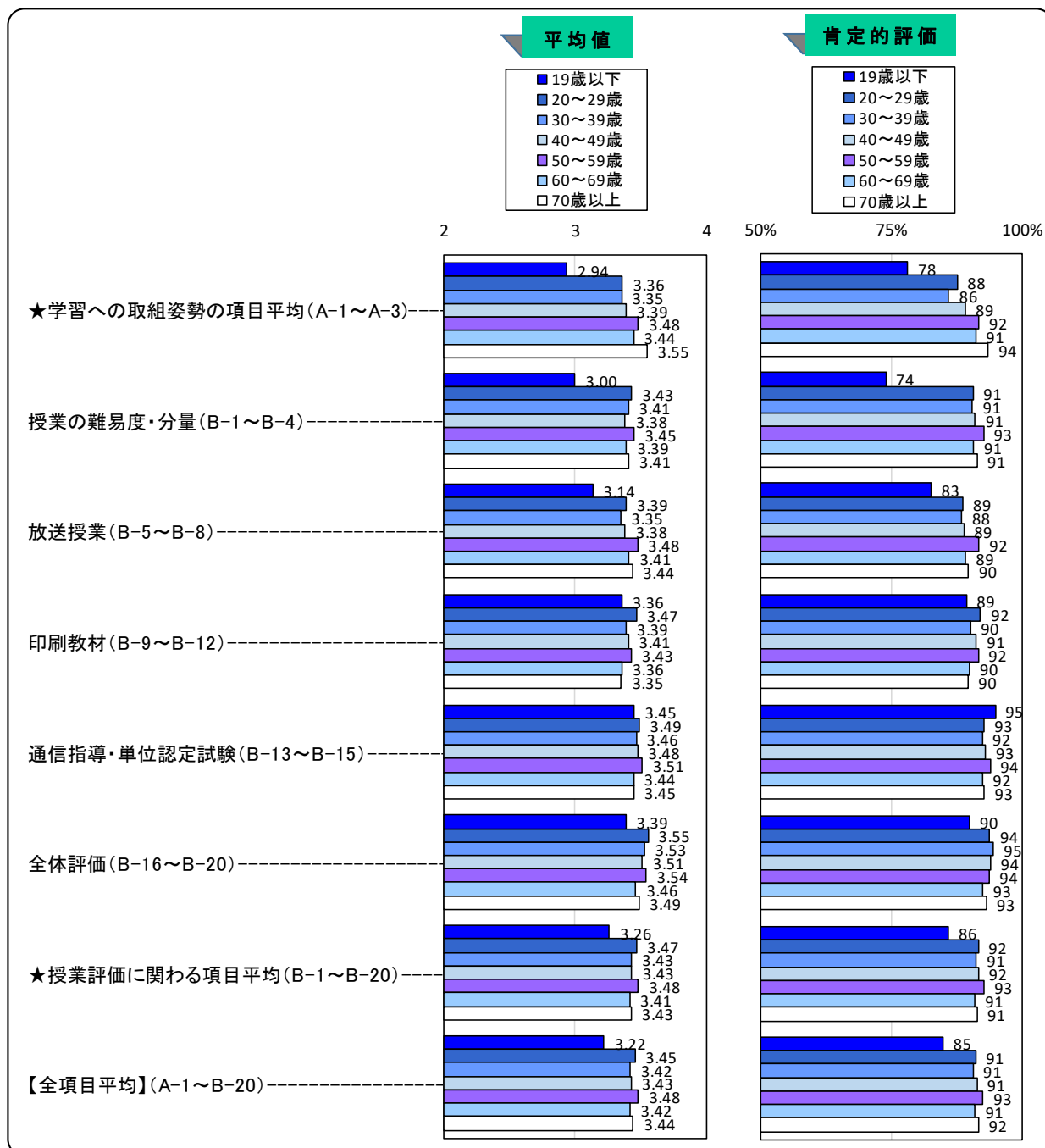


年齢階層別（図2-5）では、19歳以下は、『通信指導・単位認定試験』以外は他の年代より極端に肯定評価が低い項目が多く、特に『授業の難易度・分量』の評価が74%と他の年代を17ポイント以上下回っていた。

反対に『通信指導・単位認定試験』は唯一、他の年代を上回り、95%に達していた。

また、『学習への取組姿勢』では70歳以上が94%で最も高く、『放送授業』では50歳代が92%で最も高かった。

図2-5 【学部】項目平均による年齢階層別全体的傾向

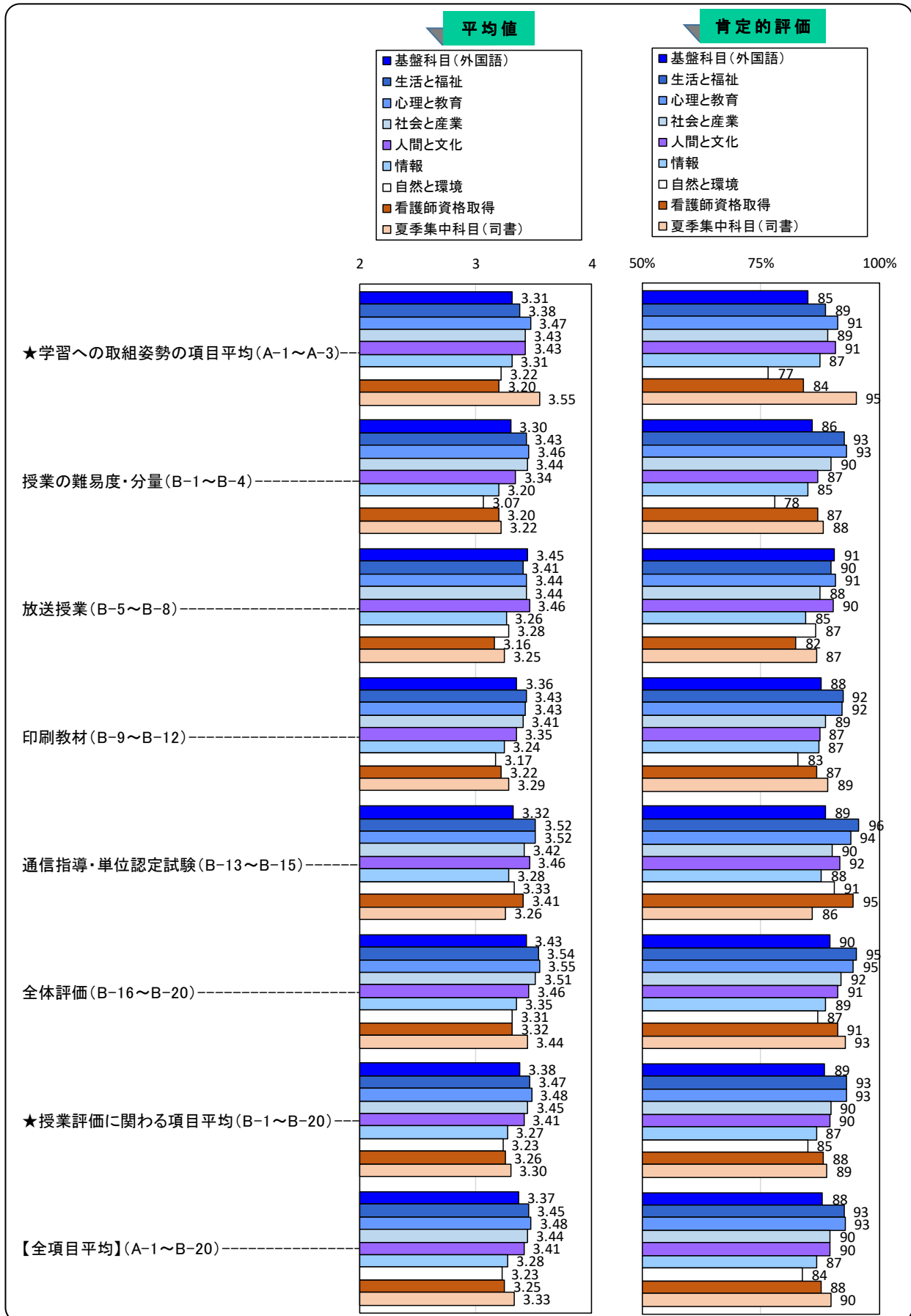


所属コース別に項目平均を見ると（次頁図 2-6）、「生活と福祉」と「心理と教育」は、『授業の難易度・分量』『印刷教材』『全体評価』において、肯定評価が最も高く 92%～95%であった。

反対に「自然と環境」は『放送授業』と『通信指導・単位認定試験』以外の項目で、他の所属コースより肯定的評価が極端に低く、最も評価の低い『学習への取組み姿勢』は 77%と他の所属コースに比べ大きな差が見られた。

その結果、『授業評価に関わる項目平均』と『全項目平均』において、「生活と福祉」と「心理と教育」の肯定的評価が最も高く、「自然と環境」が最も低かった。

図 2 - 6 【学部】項目平均による所属コース別全体的傾向

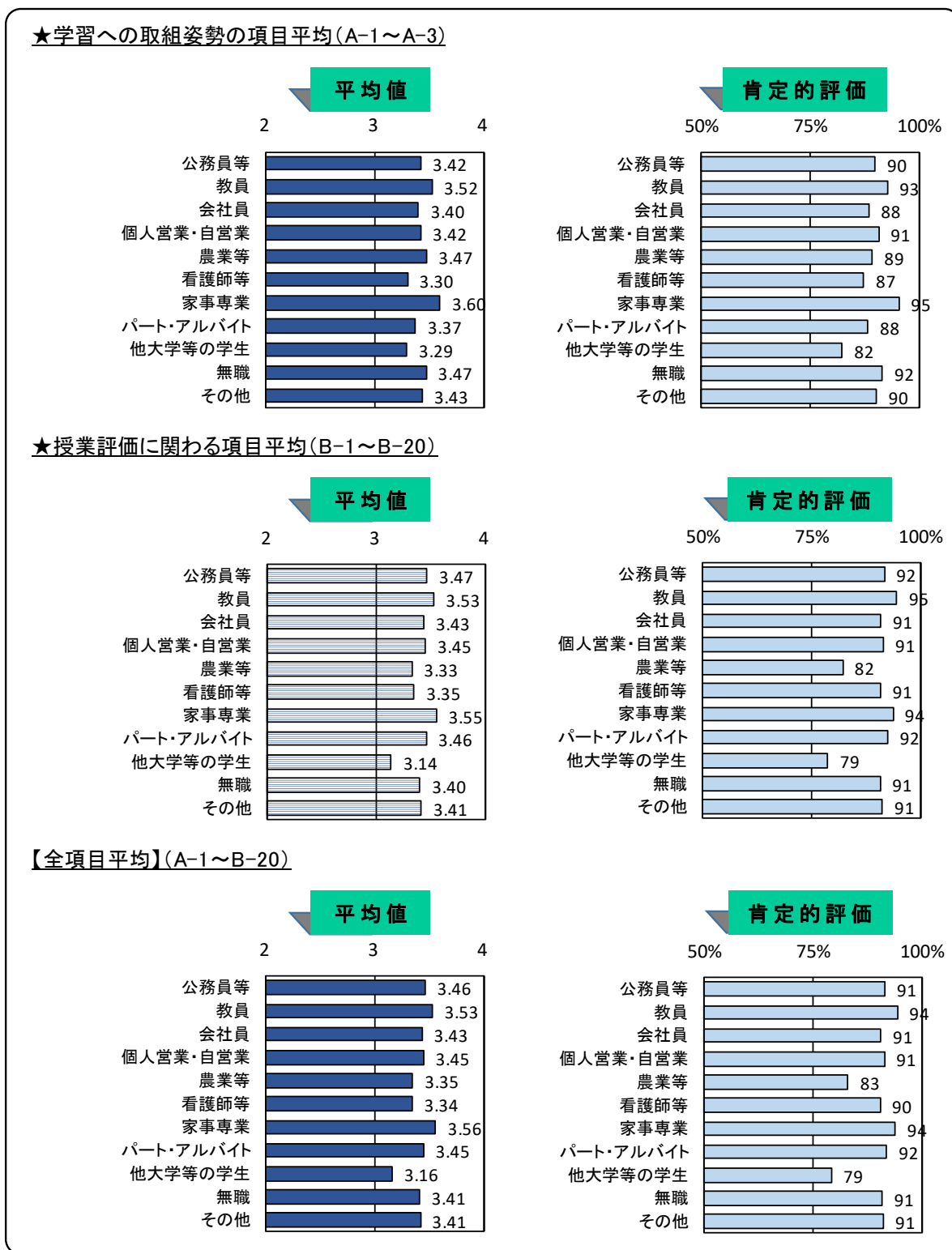


職業別の（図2-7）肯定的評価は「教員」と「家事専業」に特徴的な傾向が見られ、下記全ての項目で上位1,2位の高評価で、93～95%であった。

反対に「他大学等の学生」は全ての項目で8割前後と最も評価が低く、上位1,2位に比べ10ポイント以上の差が見られた。

他に「農業等」も評価が低く、『授業評価に関わる項目平均』と『全項目平均』では、82～83%に過ぎなかった。

図2-7 【学部】項目平均による職業別全体的傾向



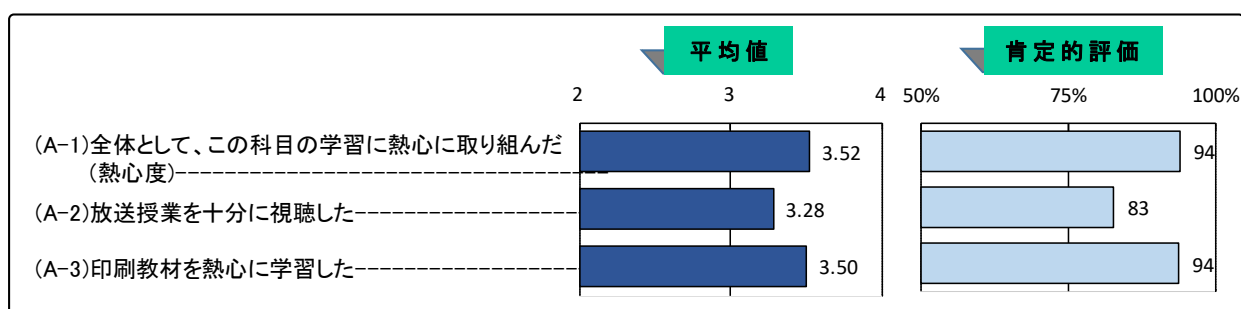
Ⅱ－1－2．学習への取組み姿勢

ここからはそれぞれの評価項目ごとに調査結果を見ていく。

全回答者の学習への取組み姿勢（図2－8）は、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と（A-3）「印刷教材を熱心に学習した」が共に94%と、その熱心度は高かった。

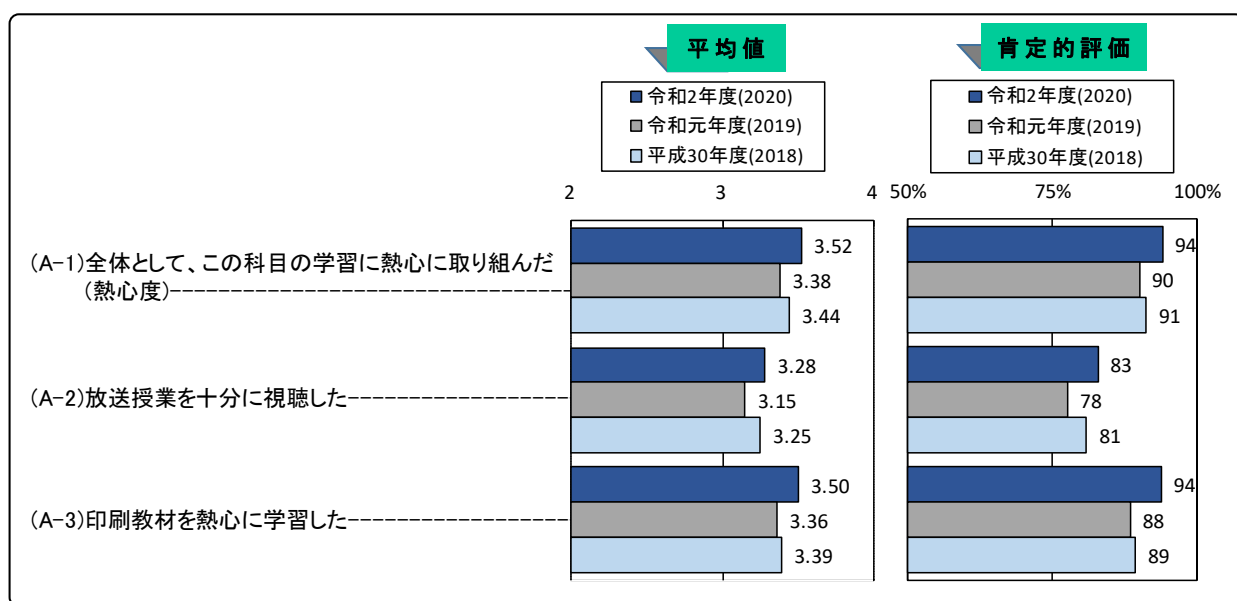
（A-2）「放送授業を十分に視聴した」は83%と、前述の2項目に比べ低く、印刷教材での学習のウェイトの方が高かった。

図2－8 【学部】回答者全体の取組姿勢



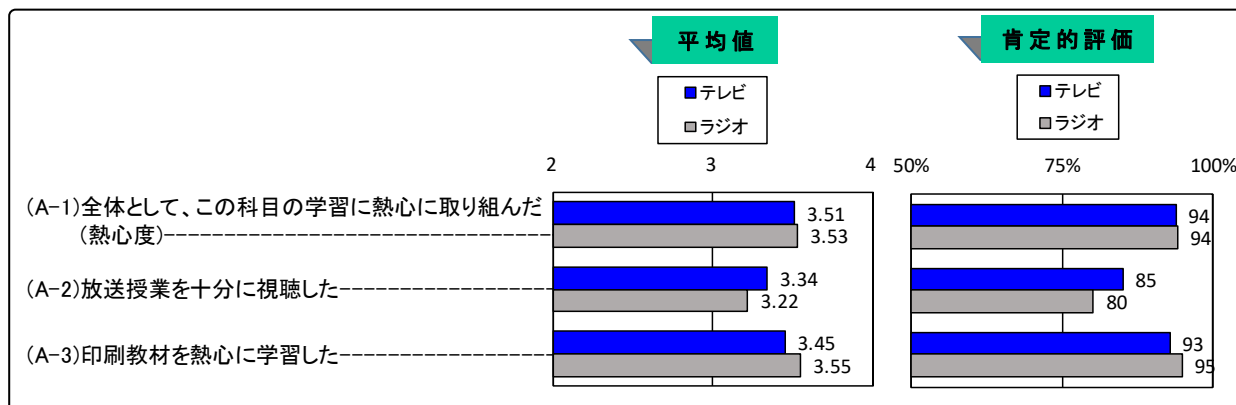
取組姿勢を時系列で見ると（図2－9）、全ての項目で本年度の結果が、昨年度、一昨年度を上回っており、昨年度との比較で特に（A-3）「印刷教材を熱心に学習した」の比率の上昇幅は大きく、6ポイント増の94%であった。

図2－9 【学部】回答者全体の取組姿勢（時系列）



次にメディア別の取組姿勢では（図2-10）、テレビ科目とラジオ科目を比べると（A-1）「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」は両メディア共、同率の94%であったが、（A-2）「放送授業を十分に視聴した」はテレビ科目が高く、（A-3）「印刷教材を熱心に学習した」は、ラジオ科目が高かった。

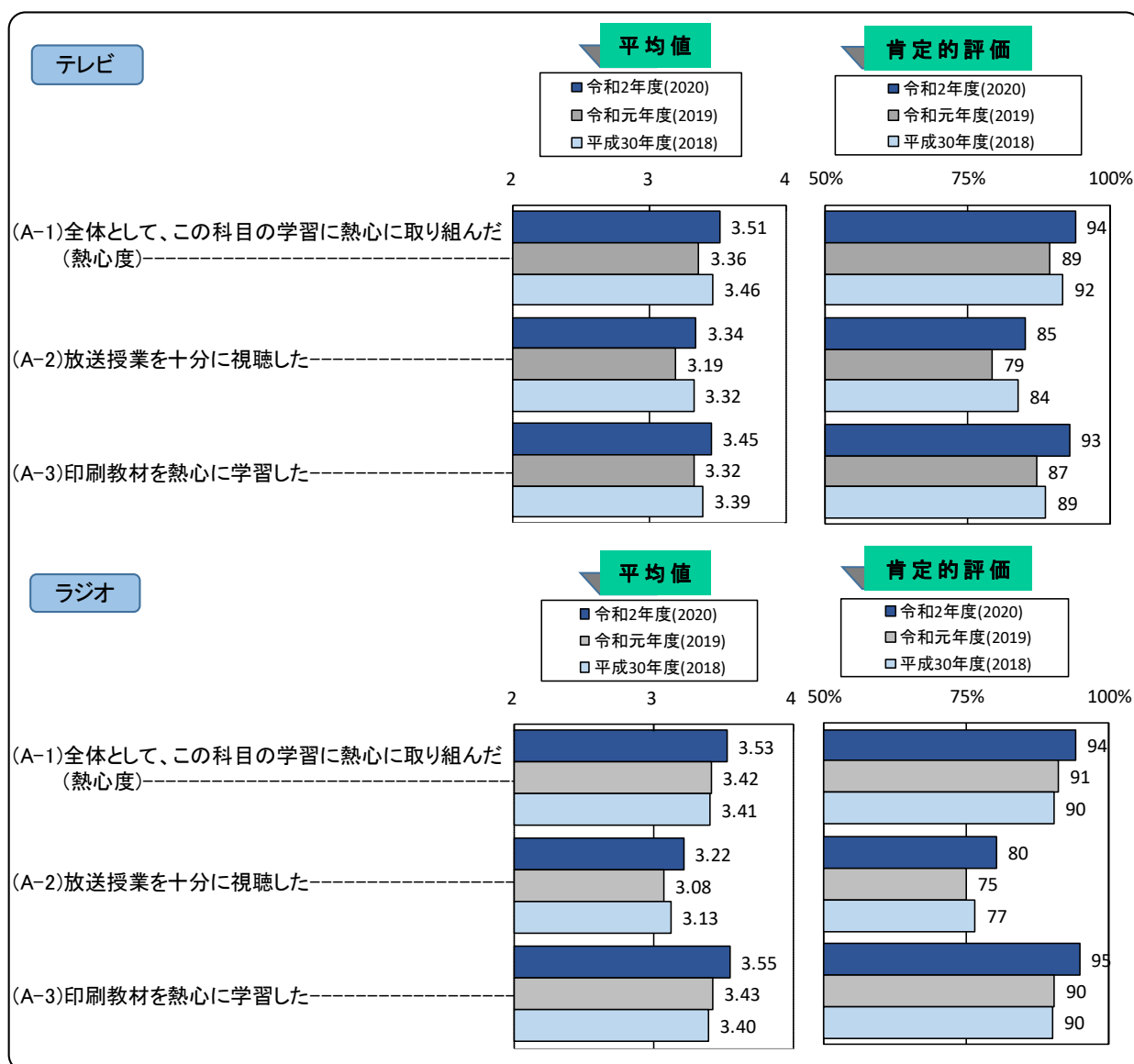
図2-10 【学部】メディア別の取組姿勢



メディア別の取組姿勢を時系列で見ると（図2-11）、テレビ科目は、過去2年度と比べ3項目とも評価が上がっており、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は、昨年度よりそれぞれ6ポイント増で、大きな上昇が見られた。

ラジオ科目でも、過去2年度と比べ3項目とも評価が上がっており、昨年度からは(A-2)「放送授業を十分に視聴した」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」で共に5ポイント増と上昇幅が大きかった。

図2-11 【学部】メディア別の取組姿勢（時系列）



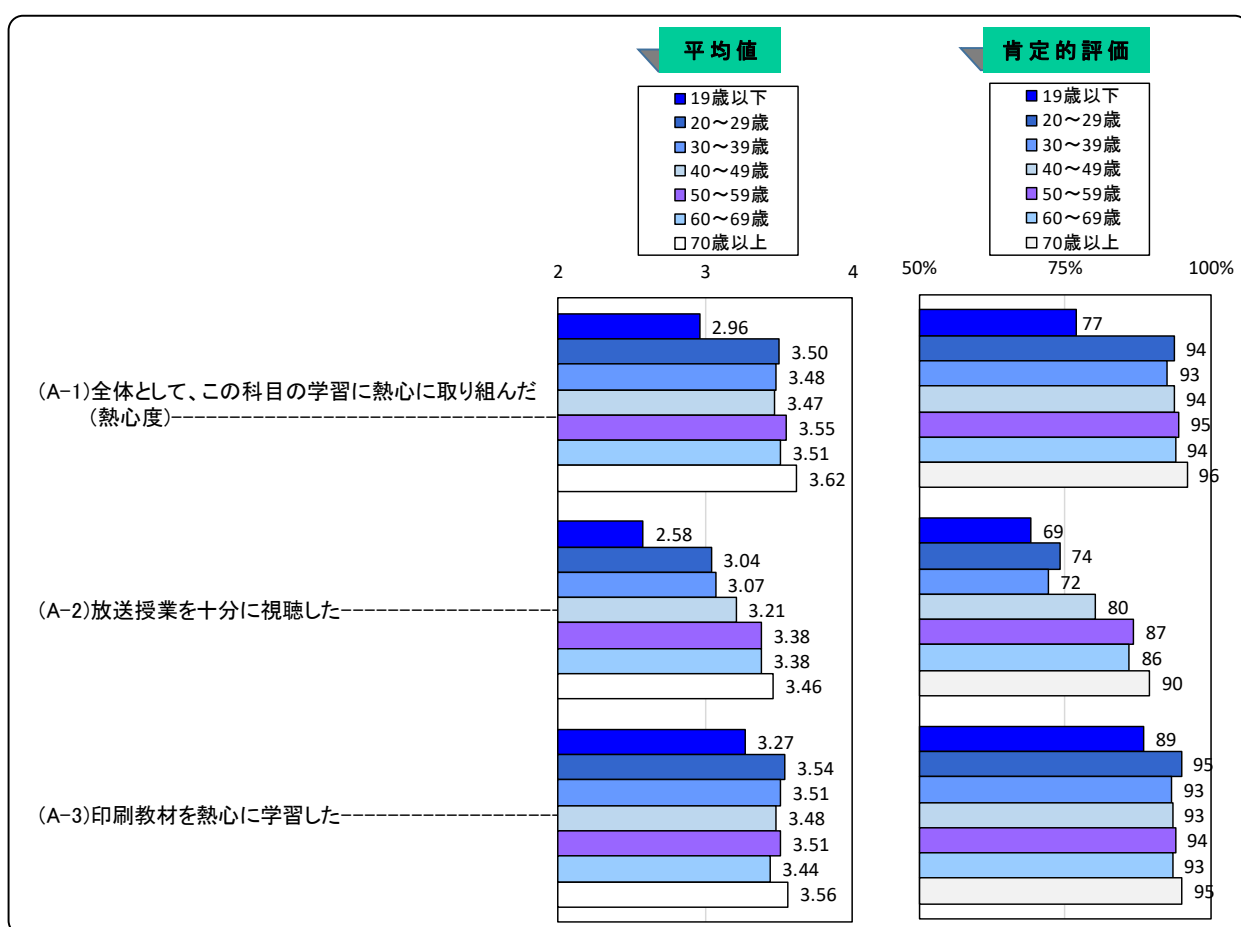
年齢階層別に取り組姿勢を見ると（図2-12）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は19歳以下が77%と、その度合いが最も低く、それ以上の年代は95%前後の熱心度で、大きな差が現れていた。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」も19歳以下が69%と、低く、他に20歳代、30歳代など若い年代でも8割を下回っていた。

反対に70歳代は90%と、「放送授業を十分に視聴した」受講生は、9割に達していた。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では、19歳以下が90%をわずかに下回っていたが、それ以上の年代は94%前後とその熱心度は高かった。

図2-12 【学部】年齢階層別に取り組姿勢

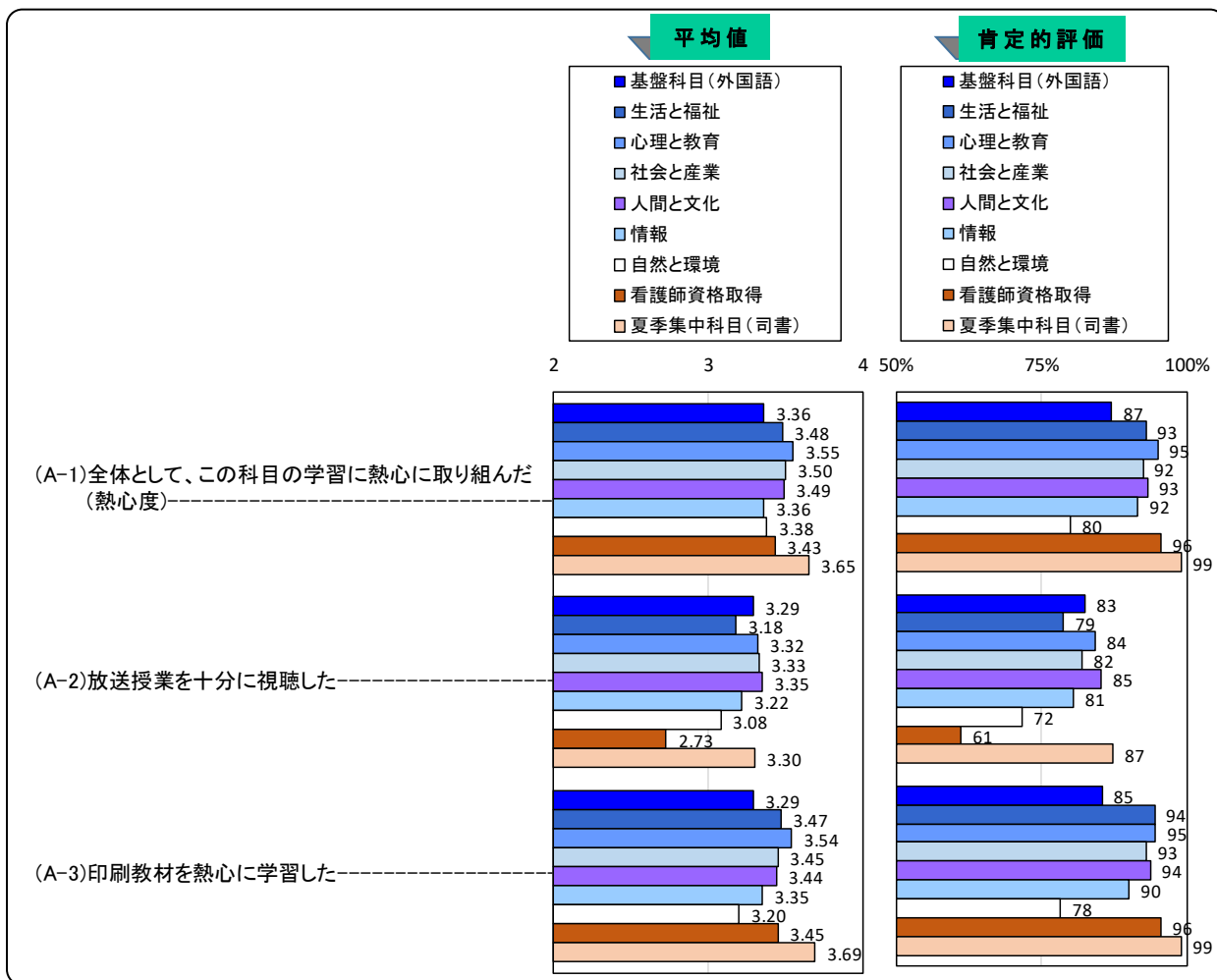


所属コース別に取り組姿勢を見ると(図2-13)、全ての項目で「夏季集中科目(司書)」の度合いが最も高く、特に(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は、その受講生の99%が積極的に取り組んでいた。

この2項目については「看護師資格取得」でも同様に、それぞれ96%と、高かったが、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」については61%と、最下位で極端な傾向が見られた。

反対に「自然と環境」はいずれの項目も、取り組む姿勢は低く、最も高い(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」でも80%に過ぎなかった。

図2-13 【学部】所属コース別の取り組姿勢



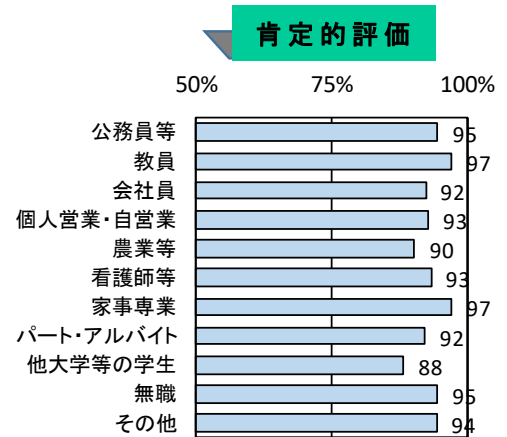
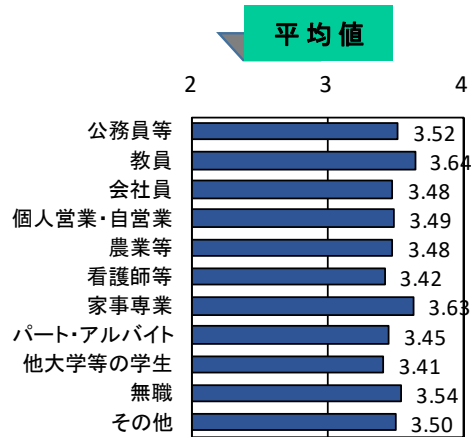
職業別に取り組姿勢を見ると（次頁図 2 - 1 4）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は「他大学等の学生」（88%）が他の職業と比べ、その割合が低かったが、他は 90～97%と、熱心度は高かった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」についても「他大学等の学生」は 71%と、最も低く、最も高い「家事専業」（93%）から -22 ポイントと大きな差が見られた。

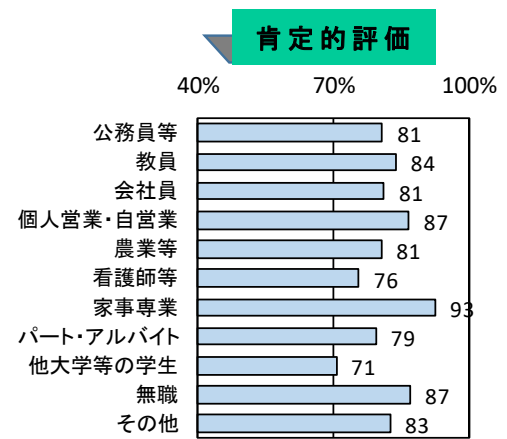
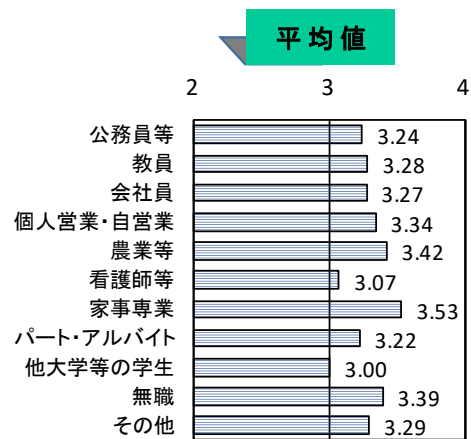
(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」でも「他大学等の学生」（88%）は最も低率だったが、他の職業の取り組み姿勢は 92～97%と、高かった。

図 2 - 1 4 【学部】職業別の取組姿勢

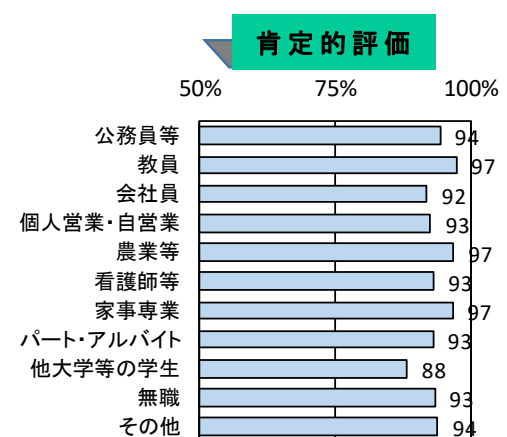
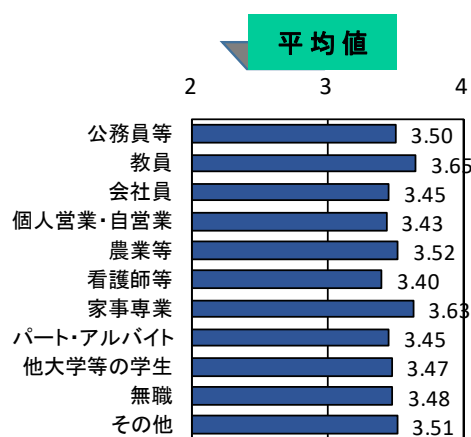
(A-1)全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ



(A-2)放送授業を十分に視聴した



(A-3)印刷教材を熱心に学習した



単位認定のための学習方法（次頁図 2 - 1 5）では、全体は『放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ』が 71%と、多くを占め、『ほとんど印刷教材の学習だけで臨んだ』が 22%、『ほとんど放送教材の学習だけで臨んだ』は僅か 6%で、「印刷教材の学習」で見ると、その利用は 93%であった。

メディア別では「テレビ科目」は『放送教材と印刷教材の両方』が「ラジオ科目」より多く、「ラジオ科目」は『ほとんど印刷教材の学習だけ』が「テレビ科目」より多かった。

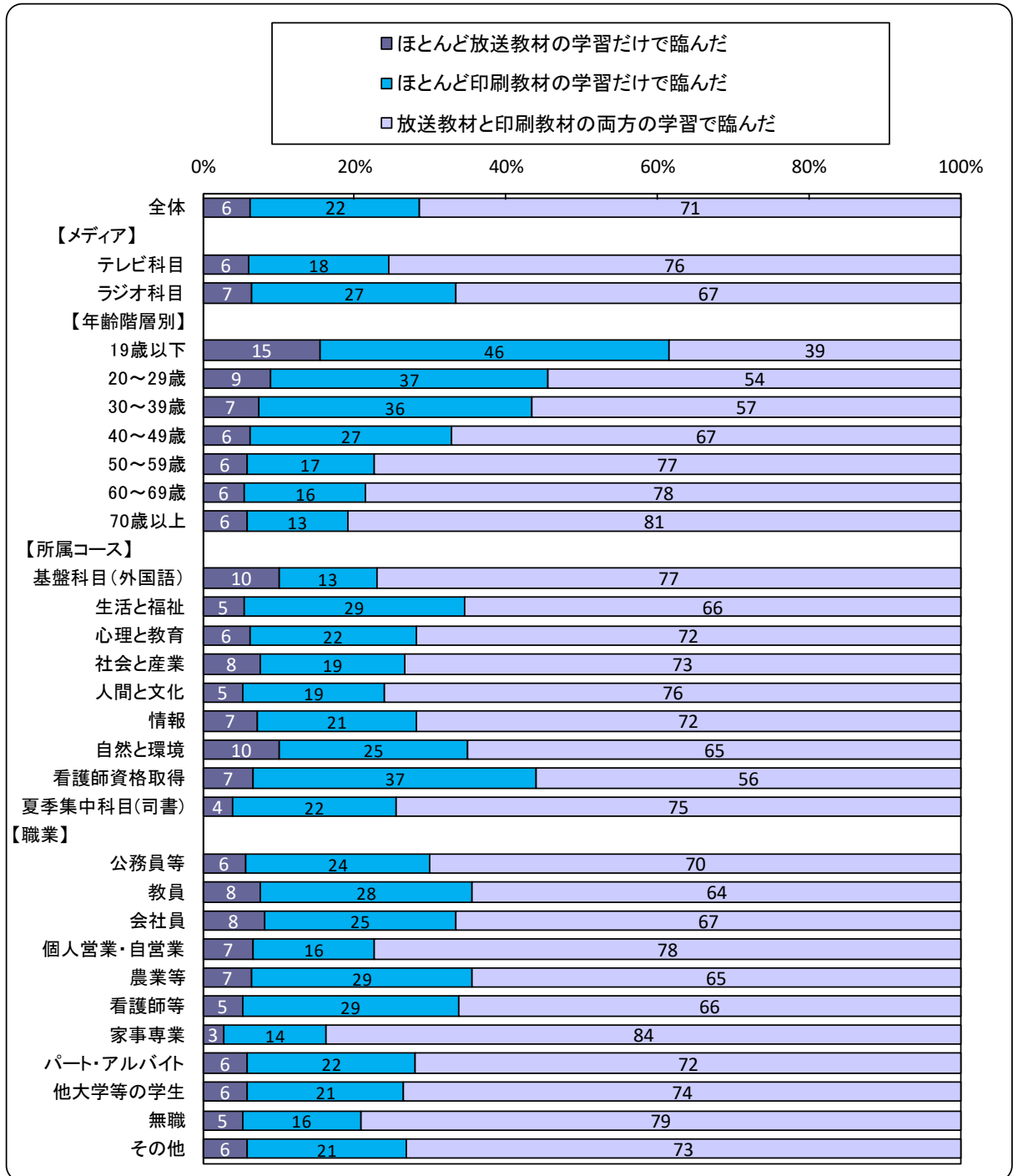
年齢階層別では、19 歳以下は唯一『ほとんど印刷教材の学習だけ』が『放送教材と印刷教材の両方』を上回り、特徴的であった。

それ以上の年代では、『放送教材と印刷教材の両方の学習』が年代の上昇につれ、増加傾向で、70 歳以上で 81%に達していた。

所属コース別では「生活と福祉」と「看護師資格取得」は、『印刷教材の学習だけ』が他の所属コースと比べ特に高く、その順に 29%、37%であった。

職業別では、概ね全体と同じ傾向であったが、「家事専業」だけは『放送教材と印刷教材の両方の学習』が 84%と、突出していた。

図 2 - 1 5 【学部】 単位認定のための学習方法



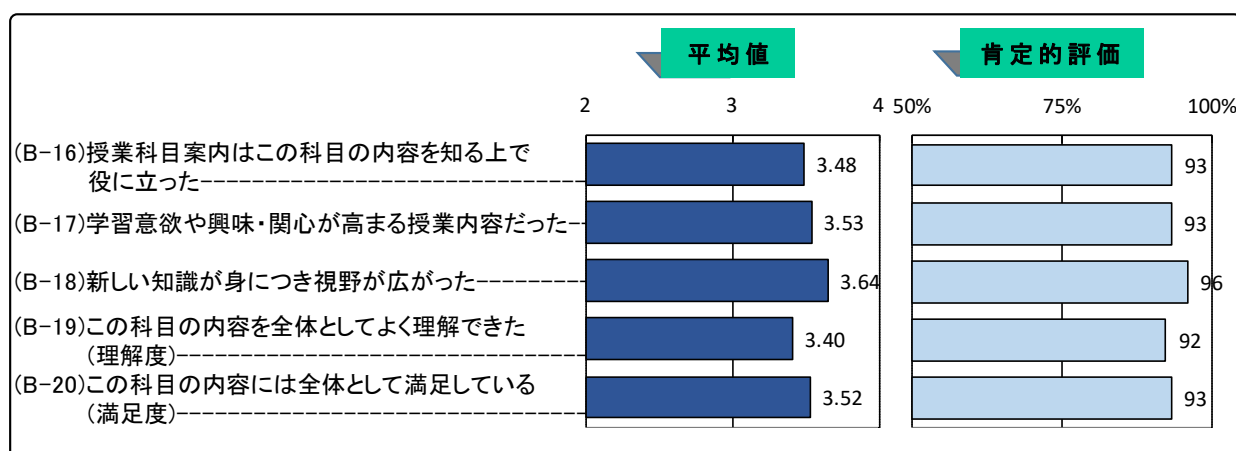
Ⅱ－1－3. 学部の授業評価

(1) 全体評価

次に学部の授業評価について、評価項目ごとに見ていく。

全体評価の各項目（図2－16）については、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」が96%と、最も高く、それ以外の項目も92～93%で、高く評価されていた。

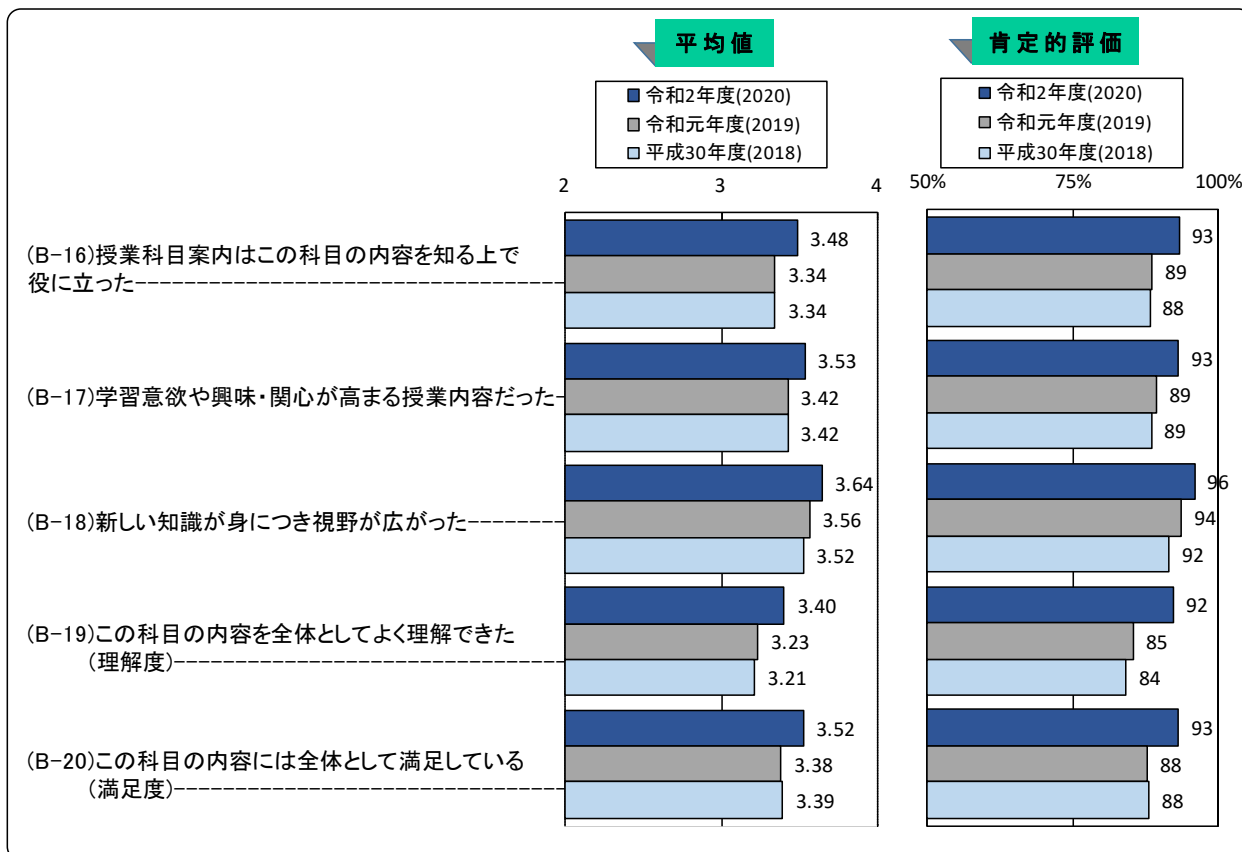
図2－16 【学部】回答者全体の全体評価



全体評価を時系列で見ると（図2-17）、本年度は下記全ての項目で、昨年度と一昨年度から評価が上昇しており、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」は最も高く96%に達していた。

上昇の幅については、(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」が昨年度より7ポイントアップで最も大きかった。

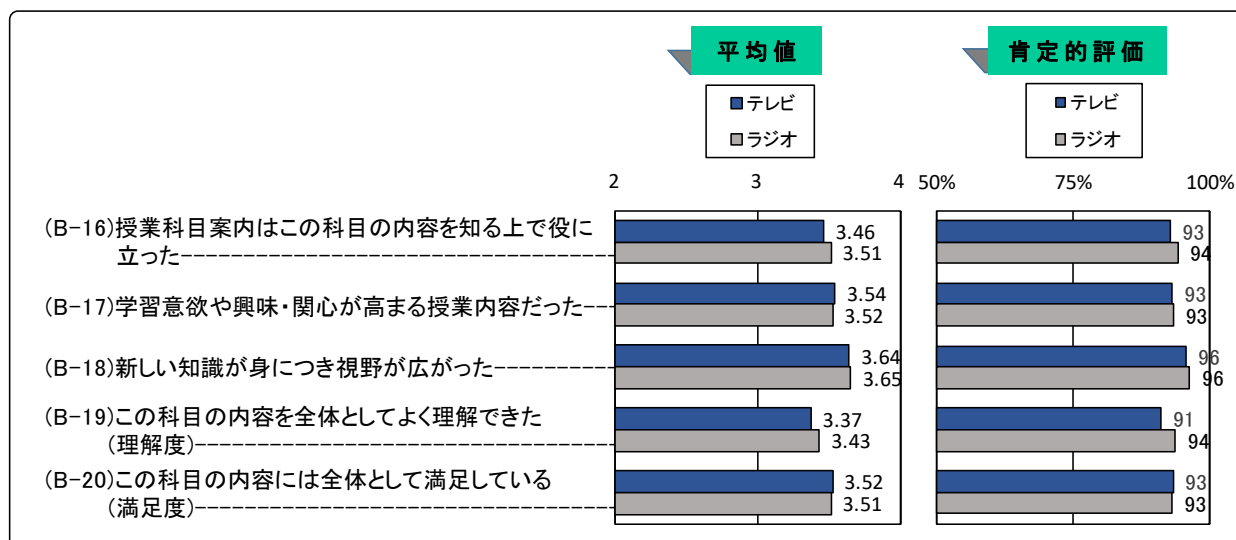
図2-17 【学部】 回答者全体の全体評価（時系列）



メディア別に全体評価を見ると（図2-18）、(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」はラジオ科目の評価の方が高かった。

それ以外の項目では、両メディアの評価は同じ水準であった。

図2-18 【学部】メディア別の全体評価



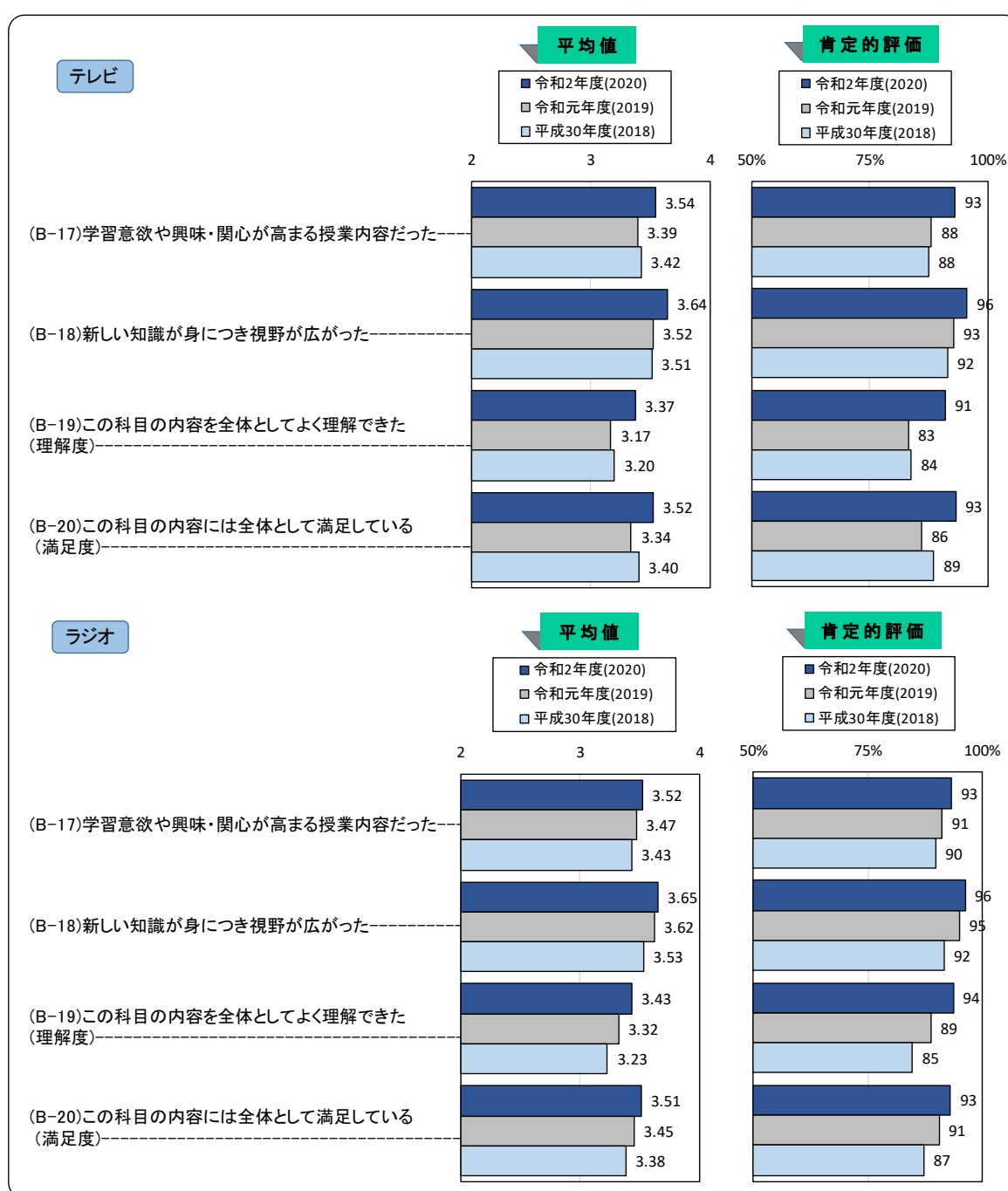
メディア別の全体評価を時系列で見ると（図2-19）、テレビ科目の評価は、下記全ての項目において、過去2年度から上昇傾向となり、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」が96%と、最も高かった。

テレビ科目の昨年度からの上昇幅は、(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」が最も大きく、8ポイントであった。

ラジオ科目の評価も概ね、下記全ての項目が、過去2年度から上昇しており、テレビ科目同様、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」が96%と、最も高かった。

昨年度からの上昇幅については、(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」が最も大きく、5ポイントであった。

図2-19 【学部】メディア別の全体評価



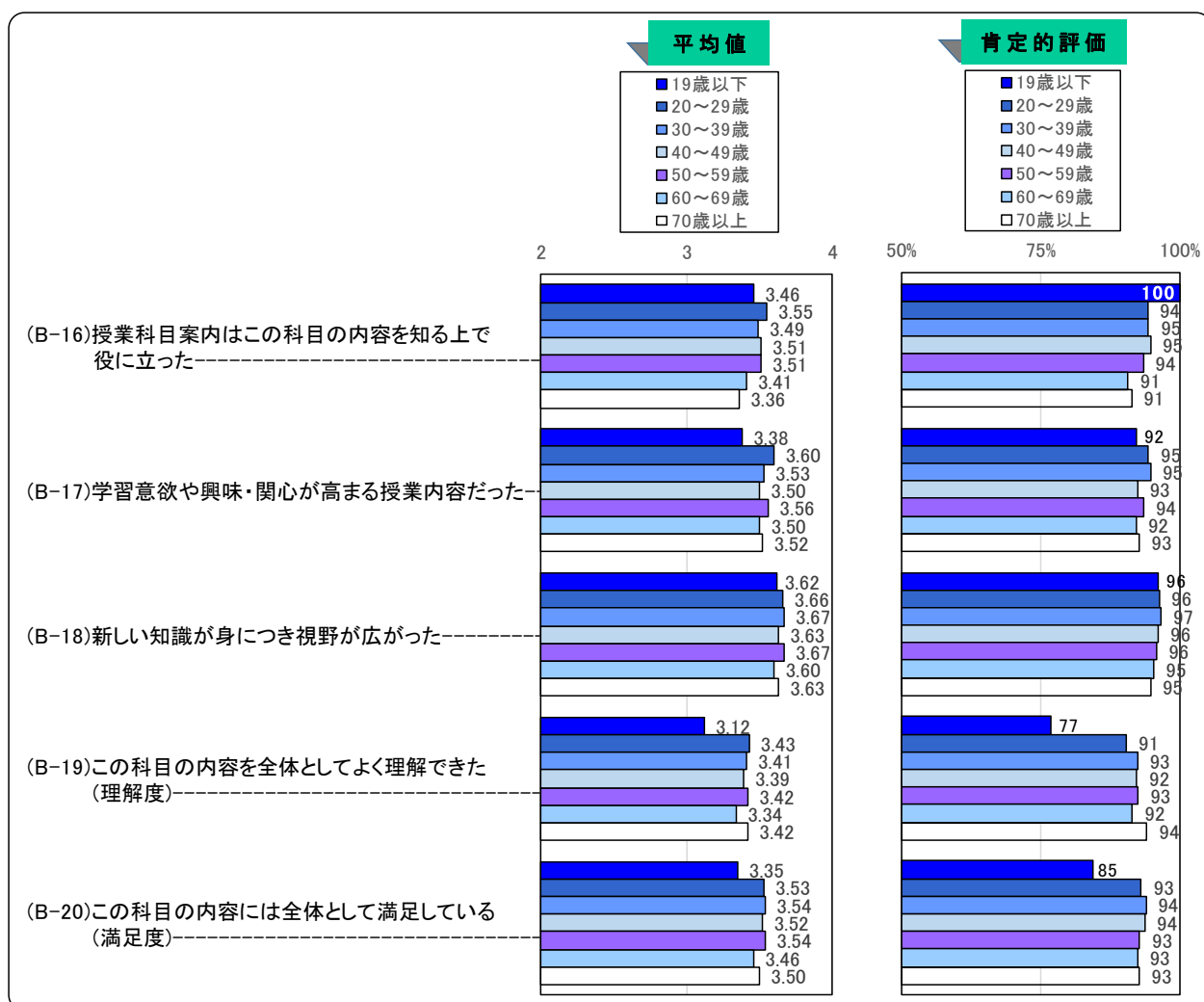
年齢階層別に全体評価（図 2 - 2 0）を見ると、(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」では 19 歳以下が最も高く、26 人全員が肯定的な評価をしていた。

反対に他の年代と比べ評価が低かったのは、60 歳代と 70 歳以上で、共に 91%であった。

(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」については、19 歳以下の評価が最も低く 77%と、それ以上の年代と比べ 14 ポイント以上、下回っていた。

(B-20)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」については、前述の傾向と同じで、19 歳以下の評価が最も低く 85%で、それ以上の年代と比べ 8 ポイント以上、下回っていた。

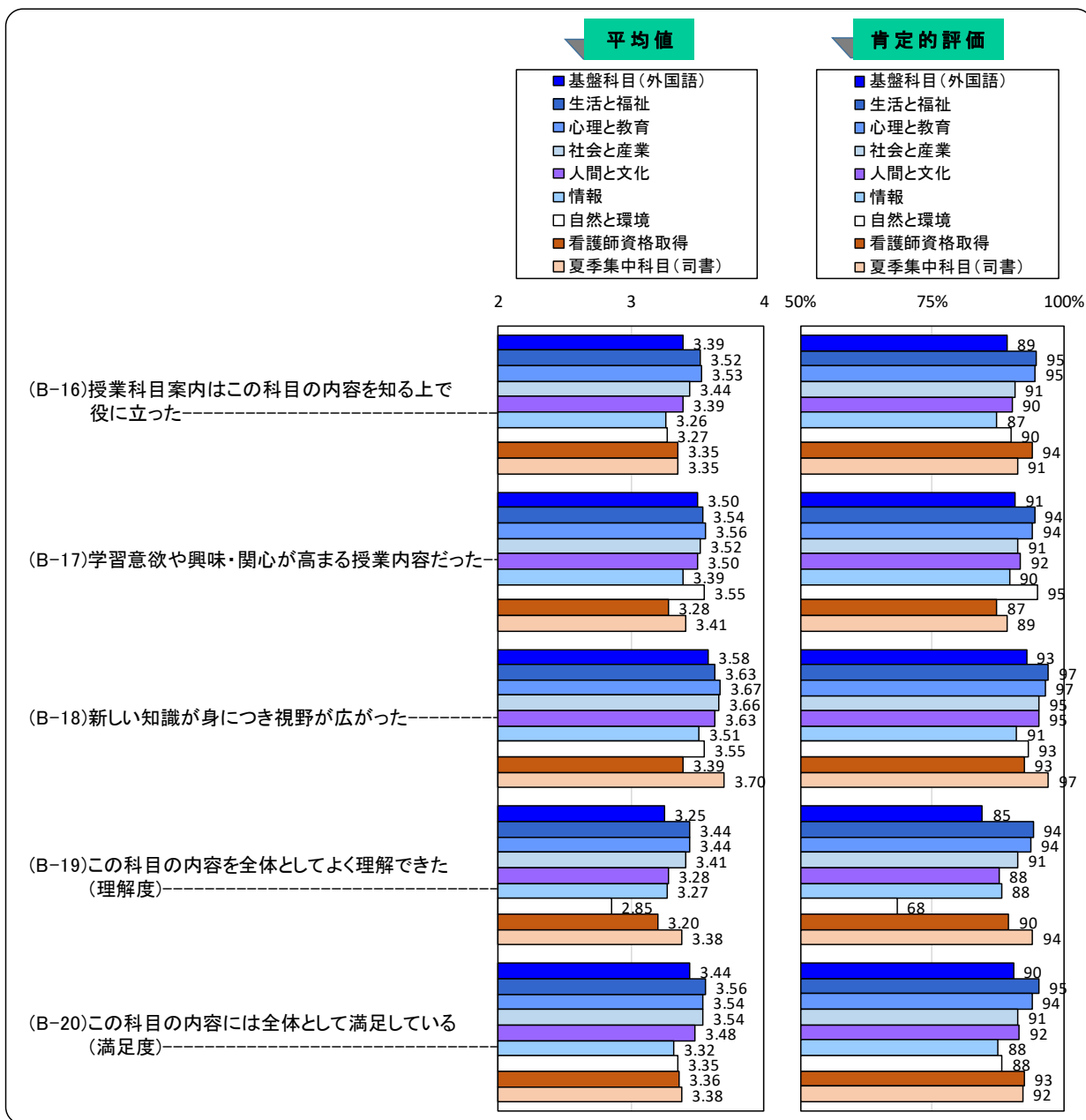
図 2 - 2 0 【学部】年齢階層別の全体評価



所属コース別の全体評価では（図 2 - 2 1）、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」に対する評価は、どの所属コースも 90%を上回り、特に「生活と福祉」「心理と教育」「社会と産業」「夏季集中科目（司書）」は、それぞれ 97%と、高かった。

その他の項目では、各所属コースは、概ねいずれも 90%前後の評価であったが、(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」については、「自然と環境」の理解度だけが 68%と、極端に低かった。

図 2 - 2 1 【学部】所属コース別の全体評価



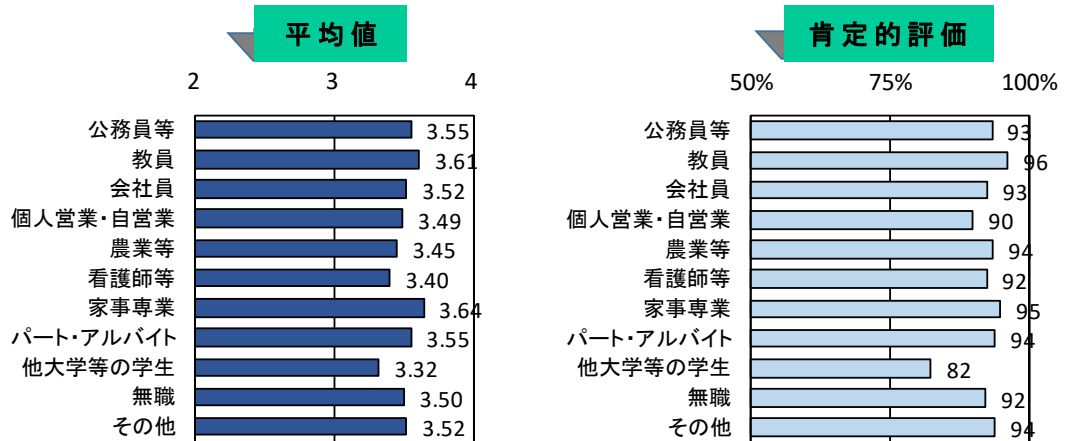
職業別の全体評価（次頁図 2-22）では、次頁全ての項目で評価が高かったのは「教員」で、3項目とも 96～97%であった。

項目別で反対に評価が低かったのは、(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」では「他大学等の学生」(82%)で、他の職業よりも 8 ポイント以上下回っていた。

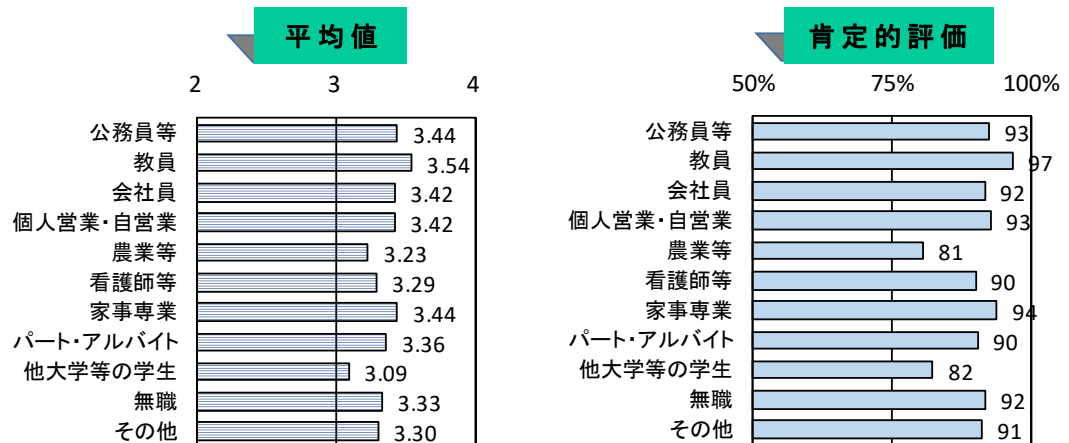
(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」と(B-20)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」については、「農業等」と「他大学等の学生」がいずれも 90%を下回っていた。

図 2 - 2 2 【学部】職業別の全体評価

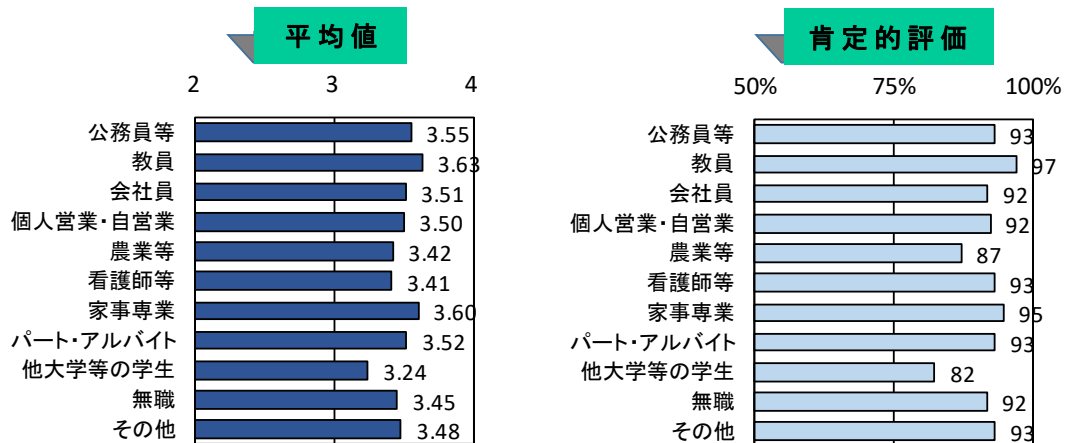
(B-17)学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった



(B-19)この科目の内容を全体としてよく理解できた



(B-20)この科目の内容には全体として満足している(満足度)

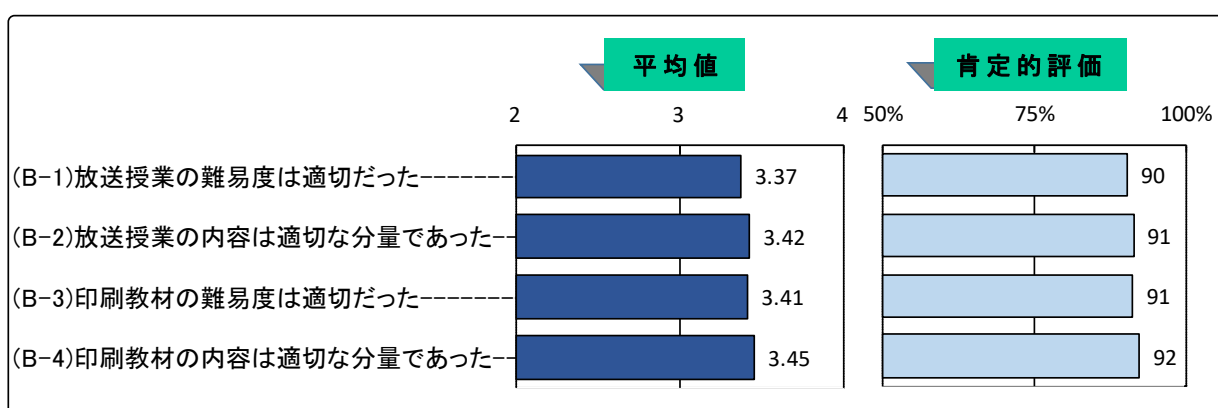


(2) 授業の難易度・分量

次に授業の難易度・分量（図2-23）について、評価項目ごとに見ていくことにする。

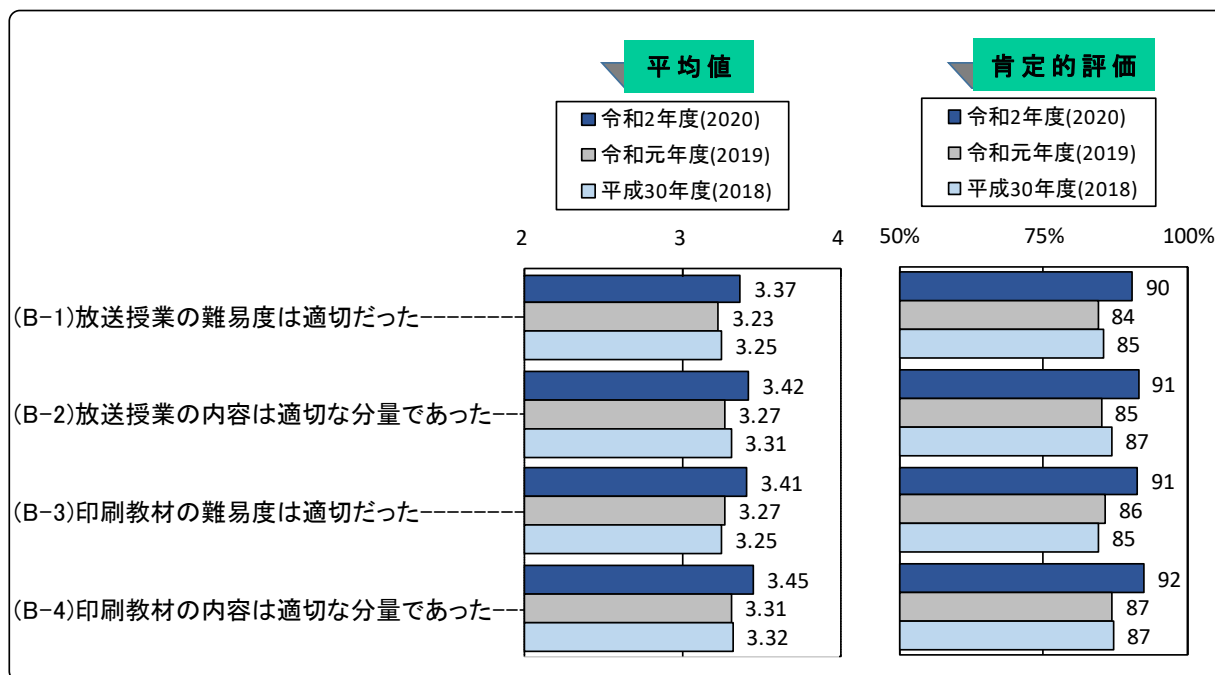
全項目で肯定的評価は、91%前後に達し、下記の項目間に大きな差は見られなかった。

図2-23 【学部】回答者全体の授業難易度・分量の評価



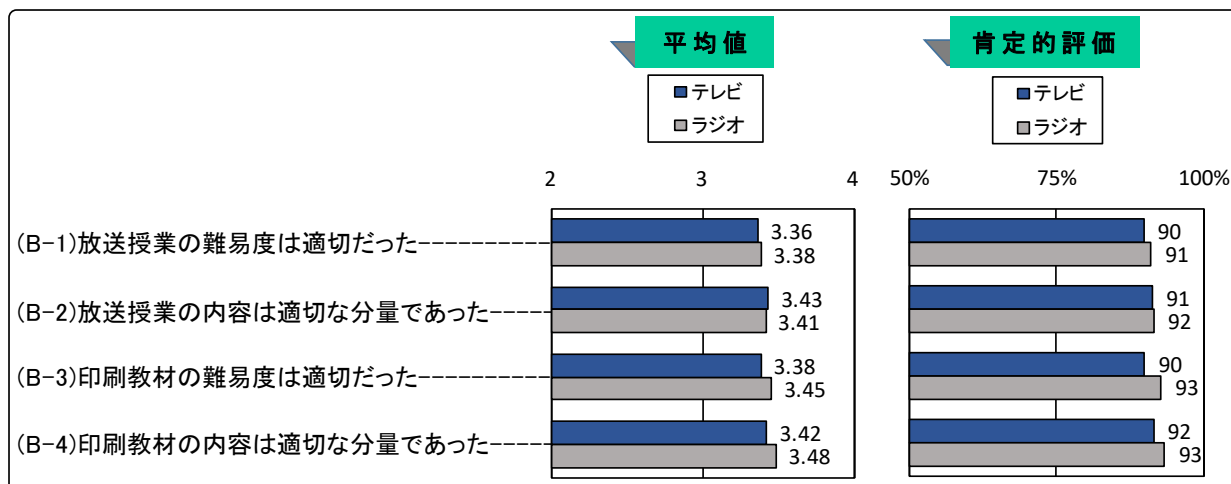
開設年度で比較すると（図2-24）、本年度は、下記4項目全てで、過去2年度から大きく評価を上げ、上昇の幅は4~6ポイントとなり、全ての項目は9割に達していた。

図2-24 【学部】回答者全体の授業難易度・分量の評価（開設年度比較）



メディア別に授業の難易度・分量を見ると（図2-25）、両メディアは、全ての項目で90%を越え、メディア間にほとんど差はないが、(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」だけは、ラジオ科目が93%で、テレビ科目を3ポイント上回っていた。

図2-25 【学部】メディア別の授業難易度・分量の評価

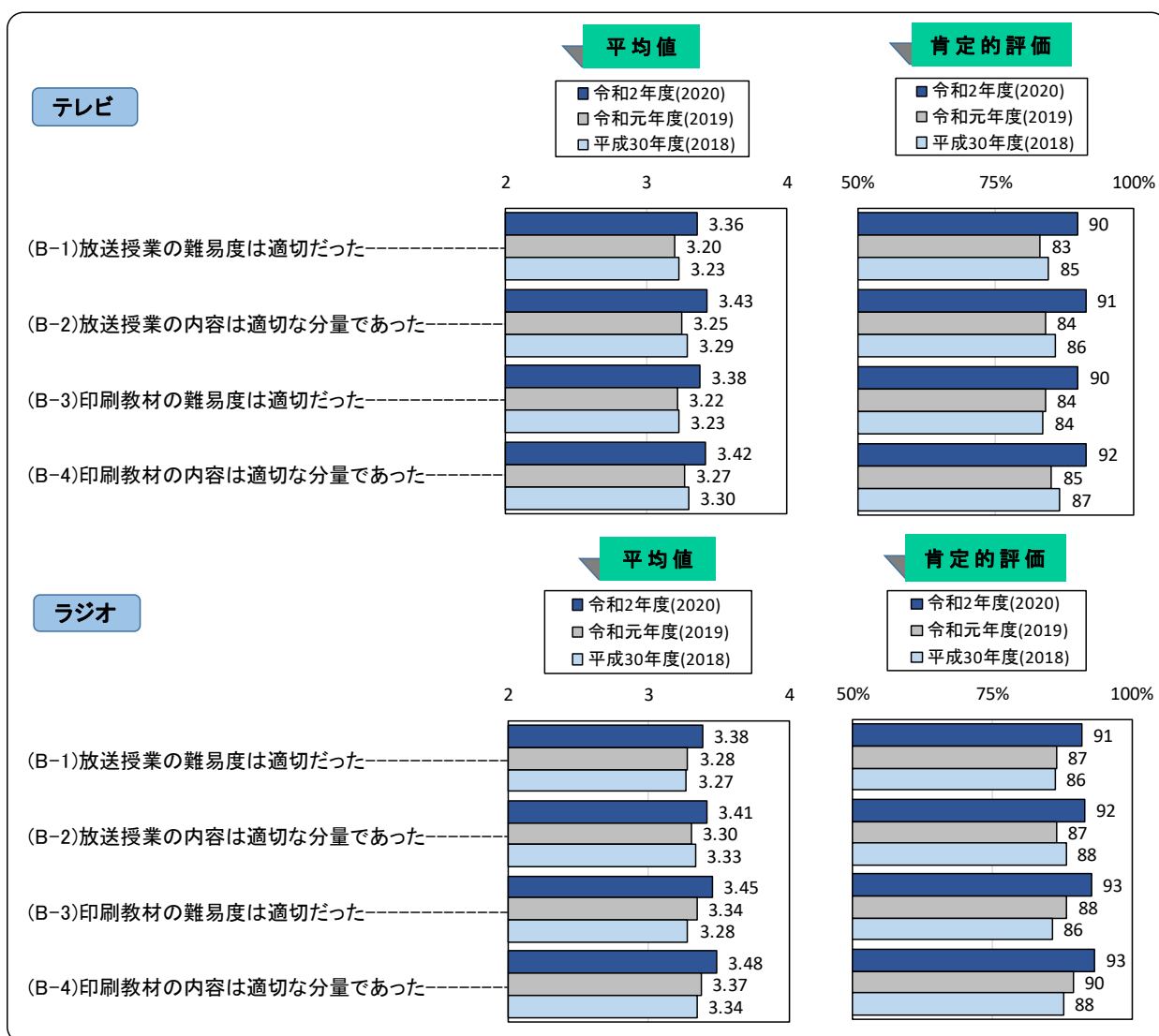


メディア別の授業の難易度・分量を開設年度で比較すると（図2-26）、テレビ科目の肯定的評価は、全ての項目で昨年度を6～7ポイント上回っており、大きな上昇が見られた。

ラジオ科目もテレビ科目同様、昨年度から上昇傾向が見られ、特に(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」と(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」は5ポイント増であった。

昨年度からの上昇幅は、ラジオ科目よりテレビ科目の方が大きかった。

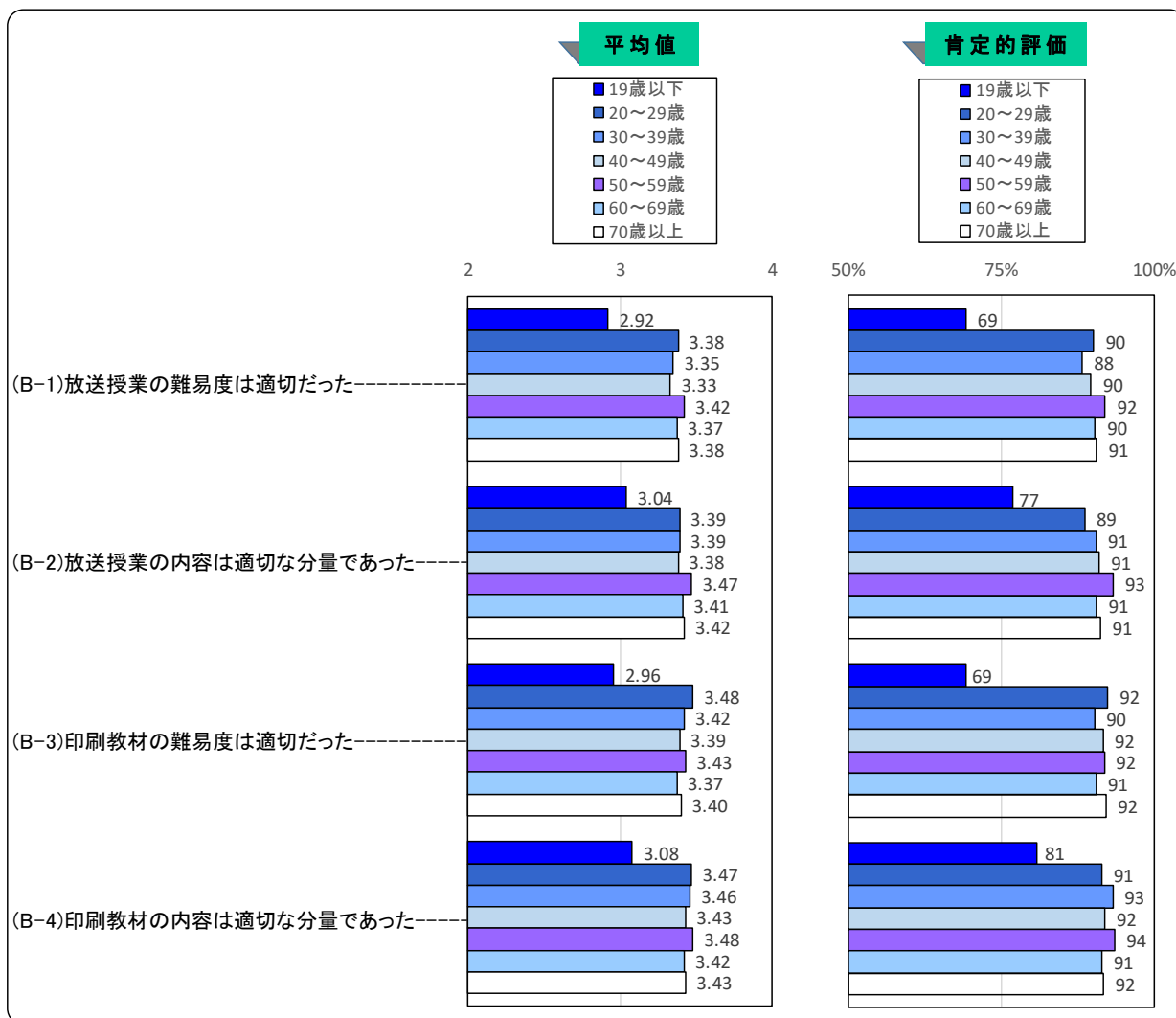
図2-26 【学部】メディア別の授業難易度・分量の評価（開設年度比較）



年齢階層別に授業の難易度・分量を見ると（図2-27）、特徴的であったのは、下記全ての項目において19歳以下の評価が、他の年代に比べ極端に低く、その幅は10～23ポイントと大きかった。

20歳代以上のそれ以外の年代では、どの項目も90%前後と一様であった。

図2-27【学部】年齢階層別の授業難易度・分量の評価

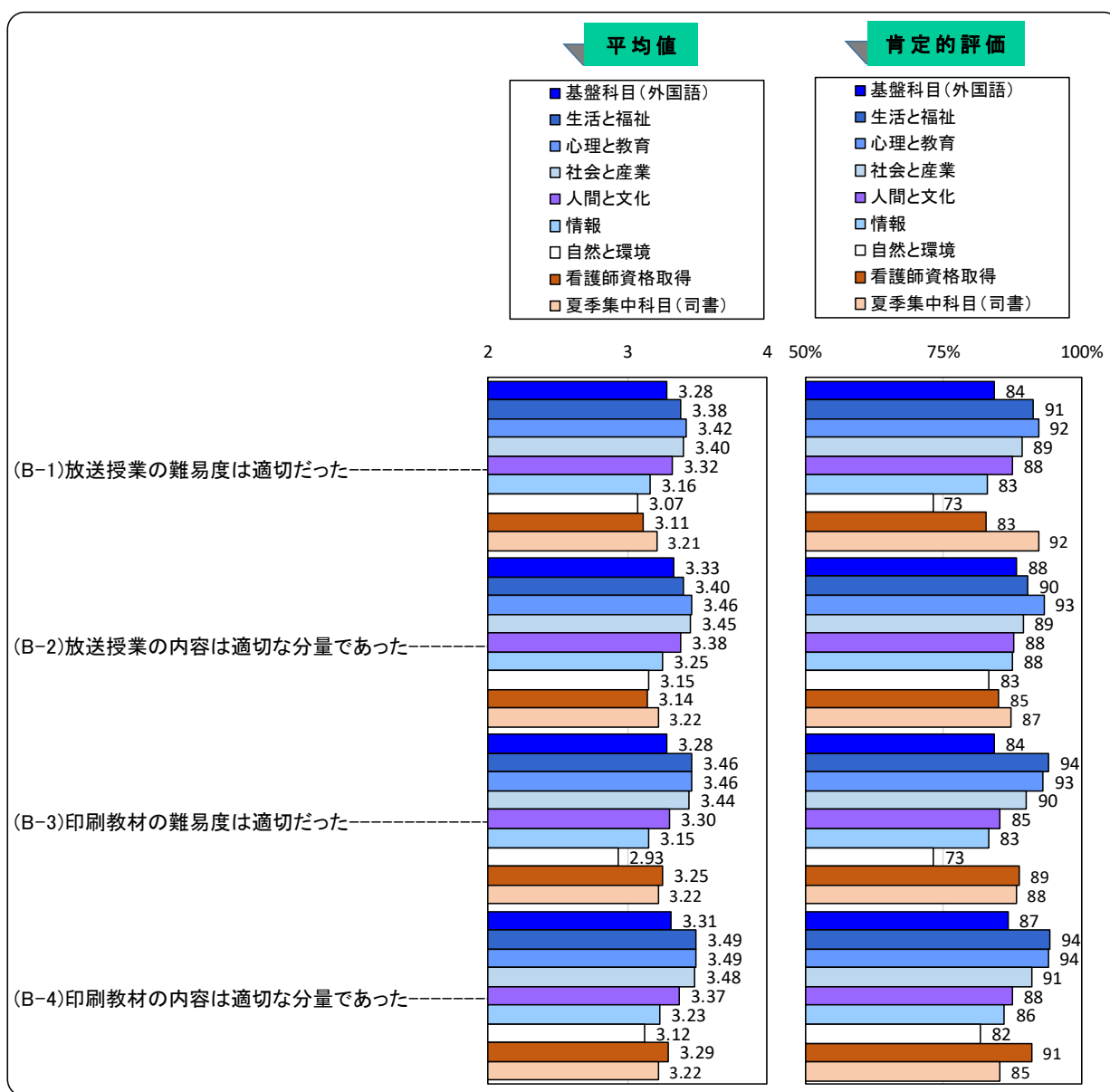


所属コース別に授業の難易度・分量を見ると（図2-28）、下記全ての項目で特徴的であったのは、「生活と福祉」と「心理と教育」が上位1、2位を占め、その評価は90～94%と、高かった。

また、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」では「夏季集中科目（司書）」の評価も高く、92%であった。

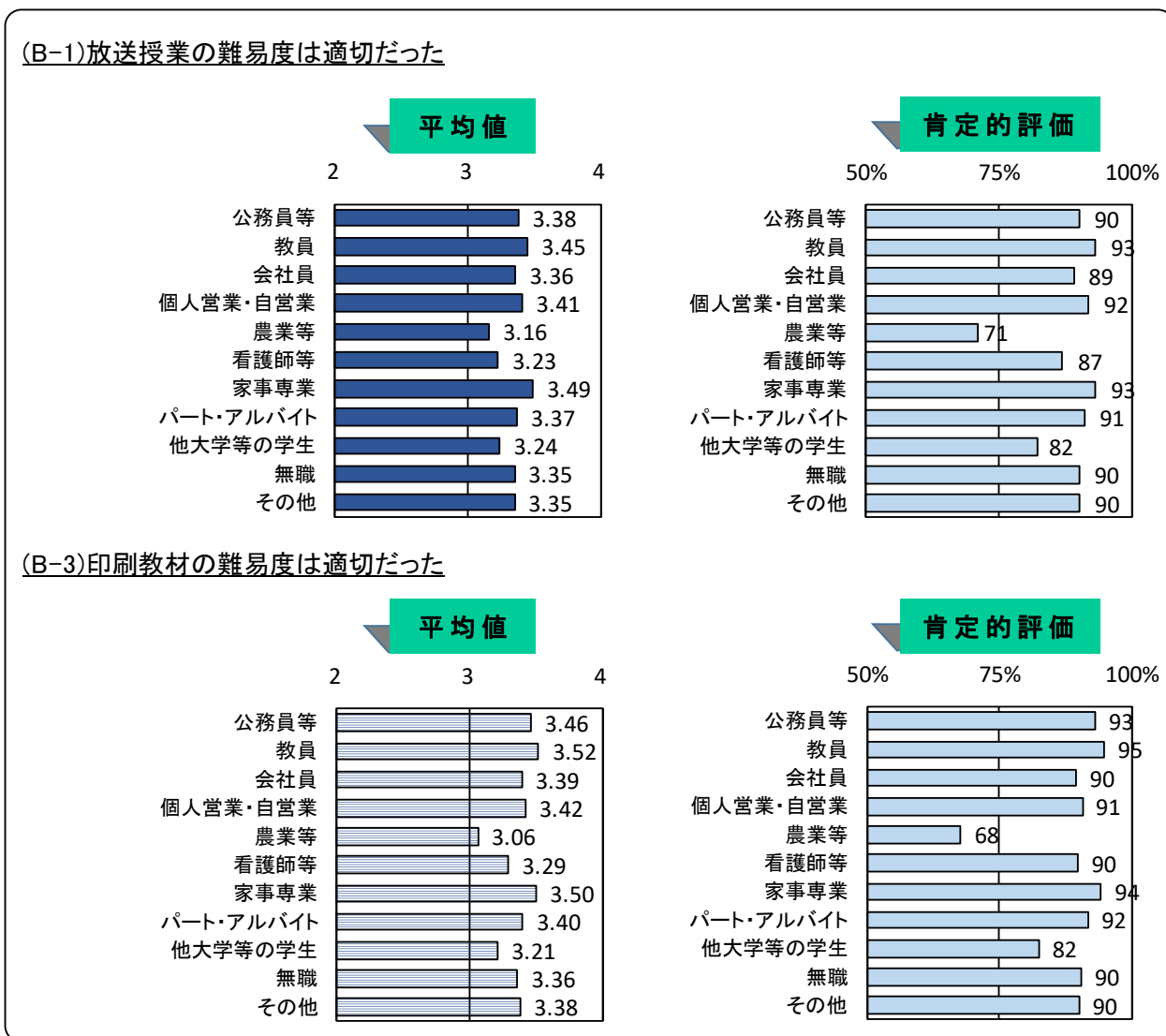
反対に全ての項目で最も評価が低かったのは「自然と環境」で、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」と(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」では、他の所属コースから10ポイント以上の開きがあり、それぞれの難易度に対する評価は低かった。

図2-28 【学部】所属コース別の授業難易度・分量の評価



職業別に授業の難易度を見ると（図2-29）、下記2項目で目立つ点は、「農業等」の評価が極端に低く、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」で71%、(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」で68%と、他の職業と比べ順に、-11ポイント、-14ポイントと差が大きく、それぞれの難易度に対する評価は低かった。

図2-29【学部】職業別の授業難易度の評価



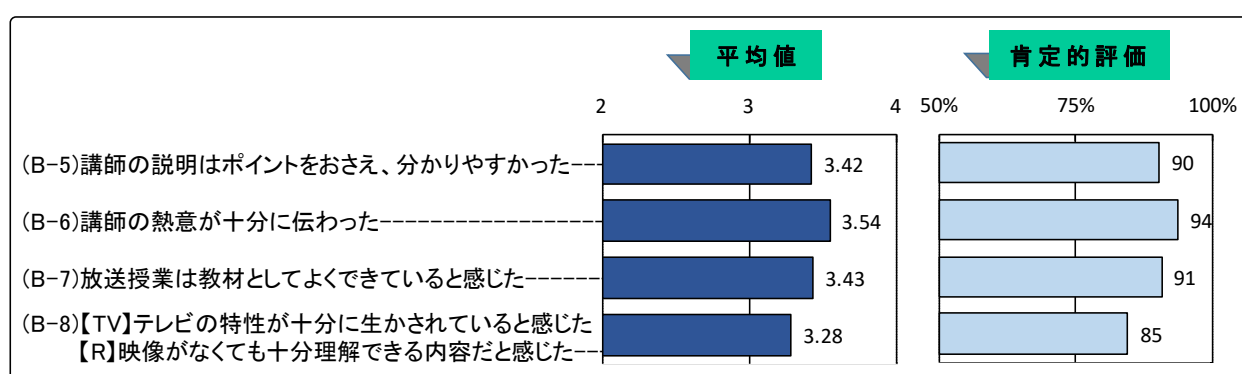
(3) 放送授業

ここからは放送授業について、評価項目ごとに見ていくことにする。

放送授業に関する4つの評価項目（図2-30）で最も評価が高かったのは、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」で94%に達していた。

最も低かったのは、(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に生かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」で85%と、他の項目に比べ非常に低かった。

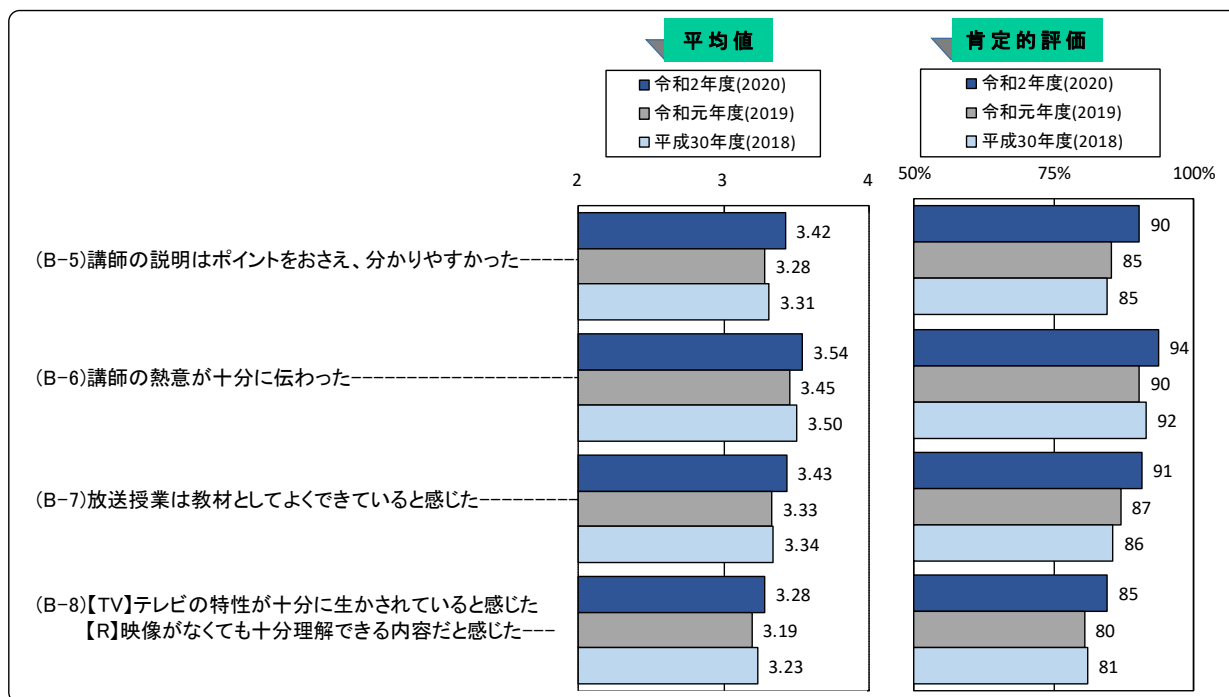
図2-30 【学部】回答者全体の放送授業の評価



放送授業の評価を時系列で見ると（図2-31）本年度は、4項目全てで過去2年度から大幅に評価を上げていた。

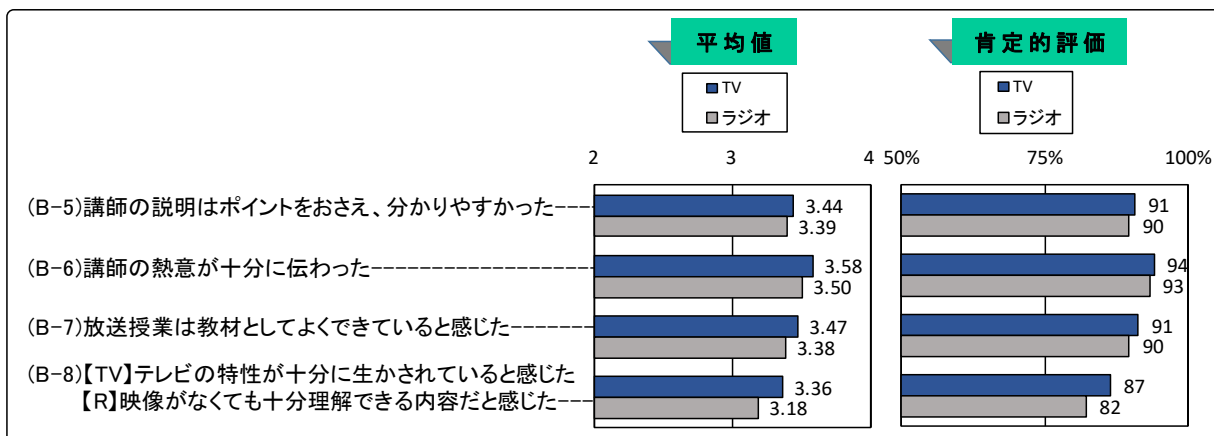
特に(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」の上昇幅は大きく、昨年度と比べ5ポイントの増加であった。

図2-31 【学部】回答者全体の放送授業の評価（時系列）



メディア別に放送授業の肯定的評価を見ると（図2-32）、「(B-8)【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」のメディア間に差があり、テレビ科目(87%)がラジオ科目(82%)を上回っていた。

図2-32 【学部】メディア別の放送授業の評価

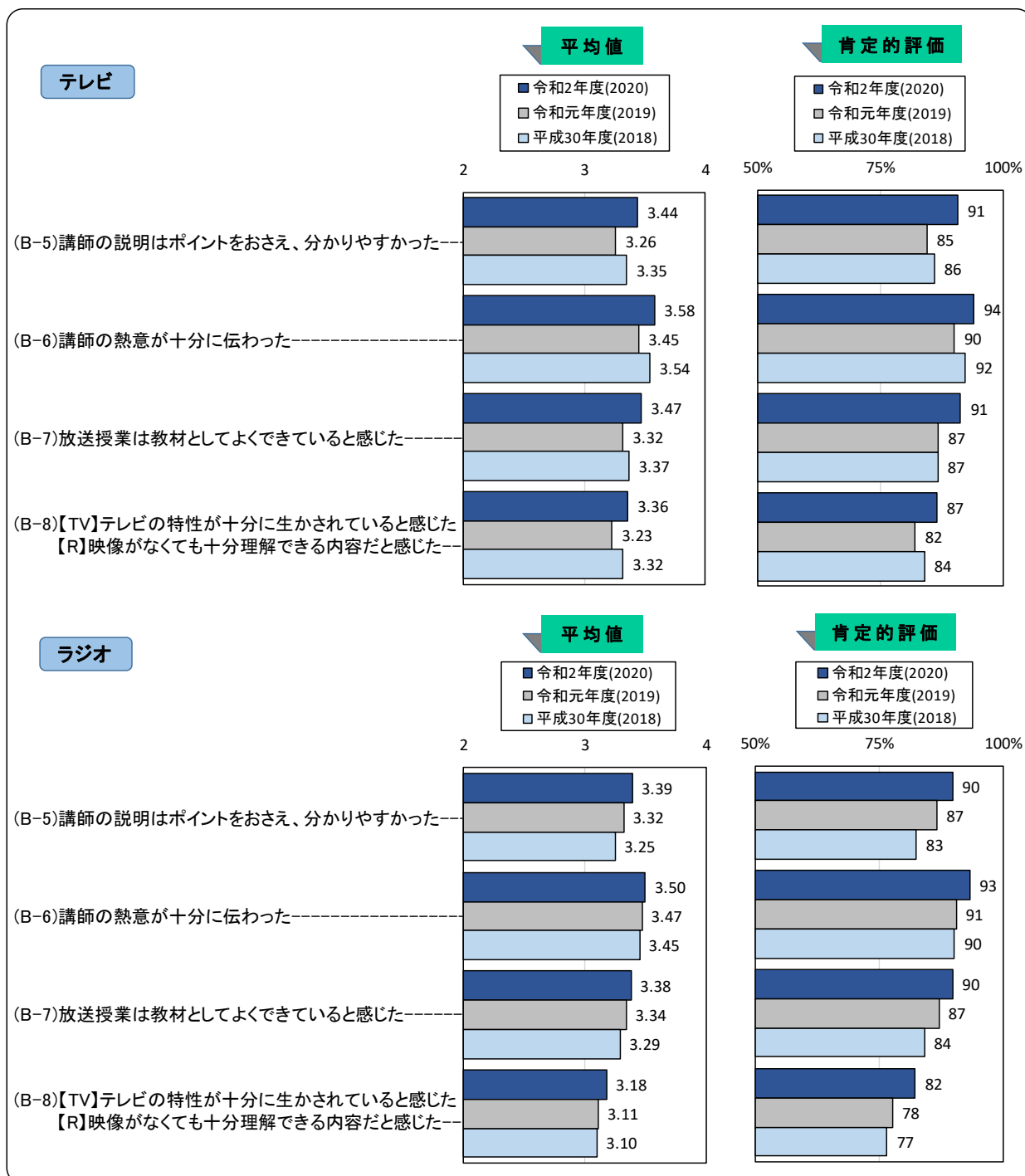


また、メディア別に放送授業の評価を時系列で見ると(図2-33)、テレビ科目では、4項目全てで過去2年度から有意な差が見られ、評価を上げていた。

昨年度との比較では、4~6ポイント増で、特に、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」の上昇幅は大きかった。

ラジオ科目でも、過去2年度から評価が上昇しており、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」の評価が最も高く93%であった。

図2-33 【学部】メディア別の放送授業の評価(時系列)

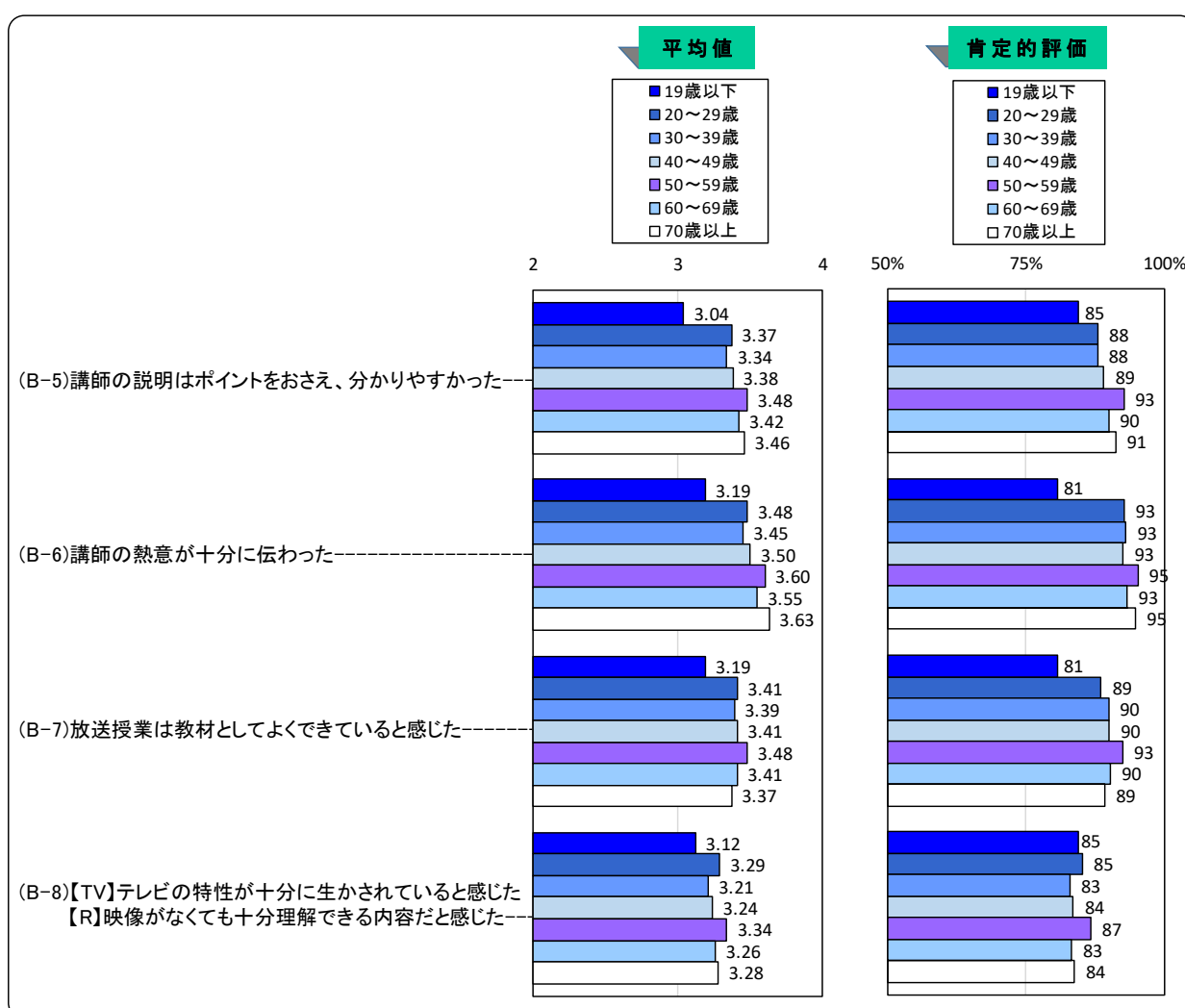


年齢階層別の放送授業の評価で（図 2 - 3 4）特徴的であったのは、下記の項目全てで 50 歳代の評価が最も高く、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」では 95%に達していた。

他に 70 歳以上も (B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と (B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」で順に 91%と 95%と、高い評価であった。

反対に B-5～B-7 の 3 項目で評価が低かったのは 19 歳以下で、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」と (B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は、他の年代から 10 ポイント前後下回り、その評価は共に 81%に過ぎなかった。

図 2 - 3 4 【学部】年齢階層別の放送授業の評価



所属コース別に放送授業の評価を見ると（図2-35）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」では、「基盤科目」と「心理と教育」の評価が高かった。

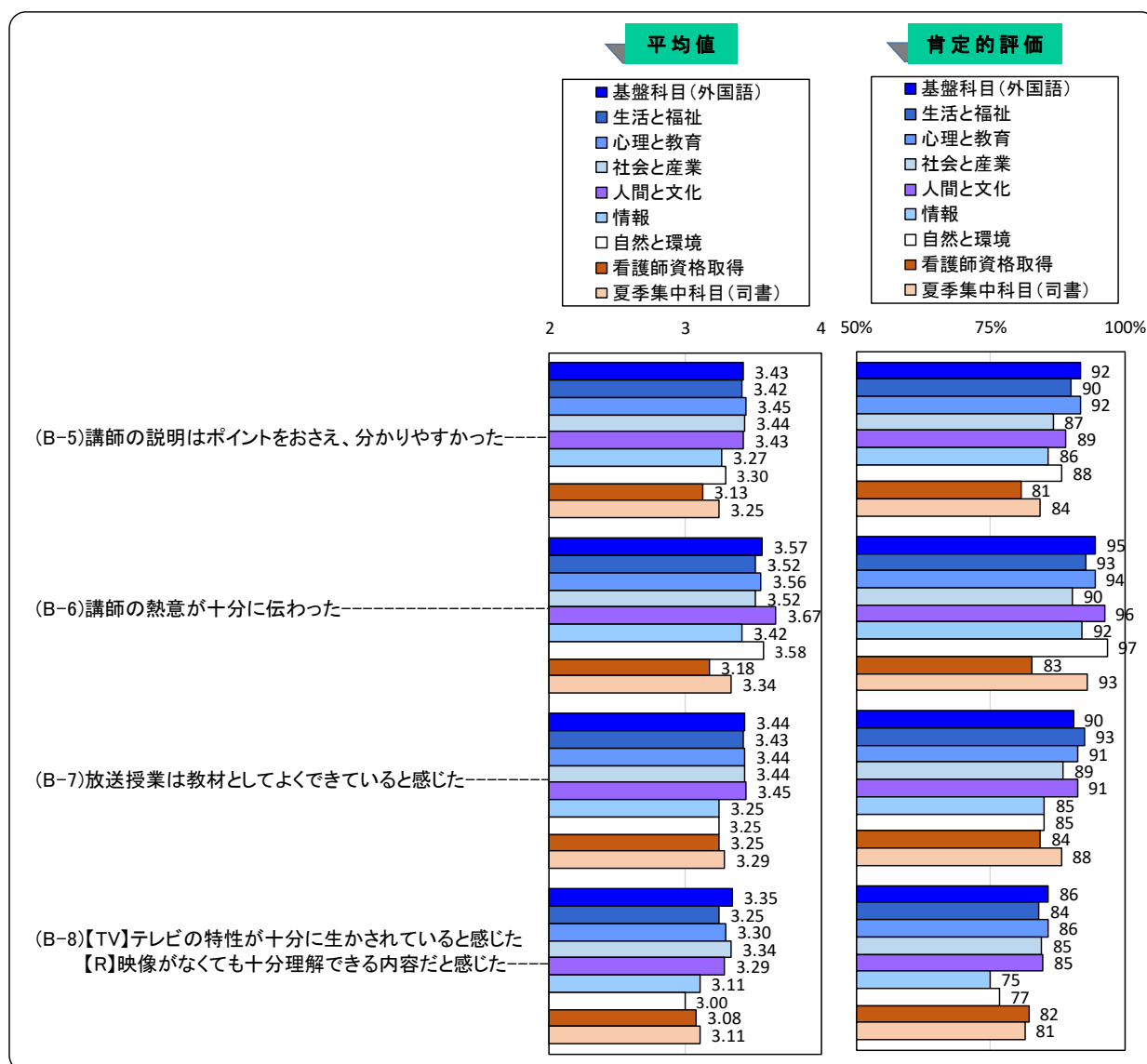
(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」は「自然と環境」が最も高く 97%に達していた。

(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」では「生活と福祉」の評価が最も高く、93%であった。

反対に評価が低かったのは、B-5～B-7の3項目では、「看護師資格取得」で、81～84%に過ぎなかった。

同様に B-8 では、「情報」と「自然と環境」の評価が7割台で、全4項目の中で最も低い評価であった。

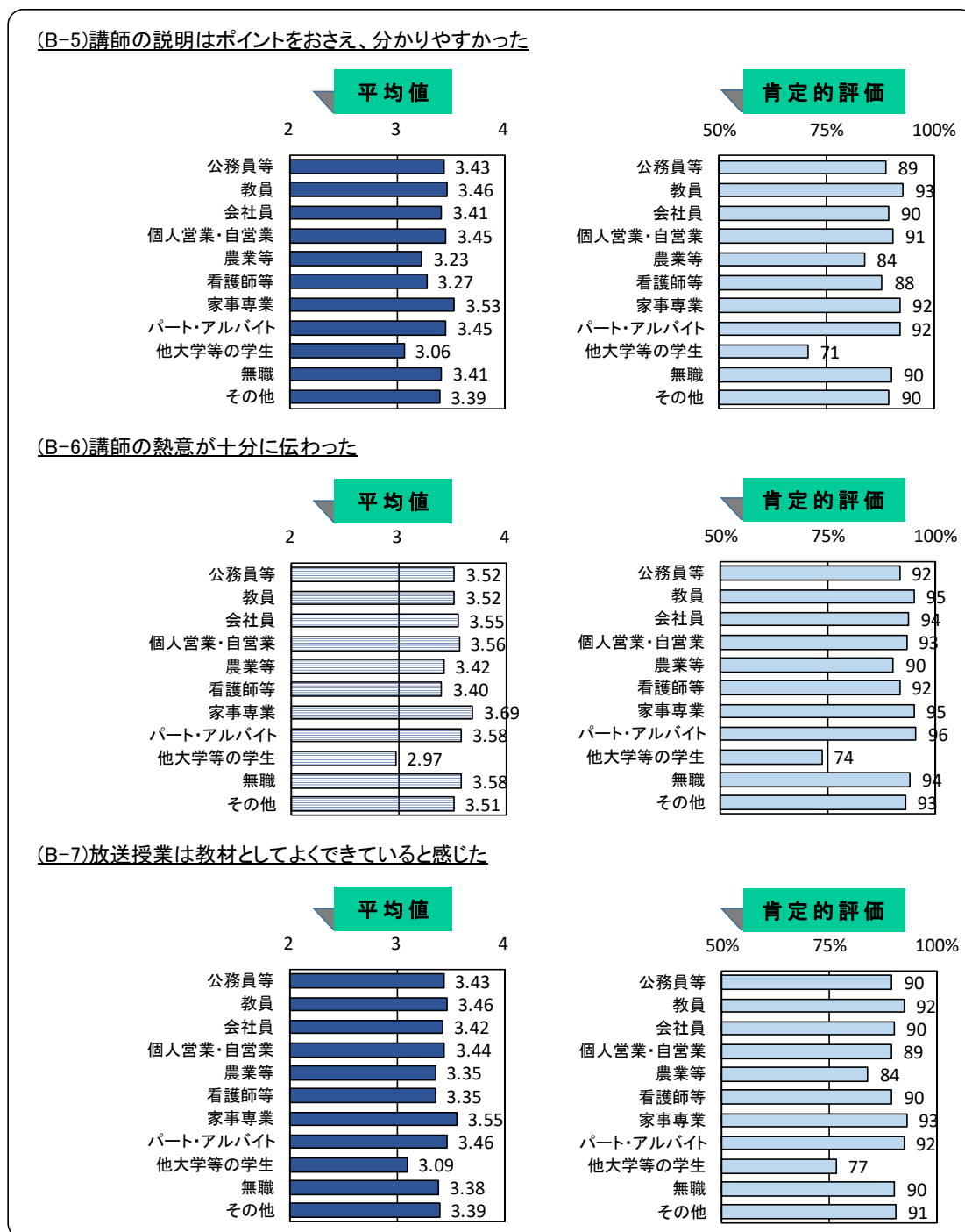
図2-35 【学部】所属コース別の放送授業の評価



職業別の放送授業の評価（図2-36）で特徴的な傾向が見られ、全ての項目で上位1、2位占めた職業は、「教員」「家事専業」「パート・アルバイト」で、特に(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」は95～96%と、高い評価であった。

反対に「他大学等の学生」の評価は全ての項目で最も低く、特に(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」で71%と、それ以外の職業から13ポイント以上、評価が低かった。

図2-36 【学部】職業別の放送授業の評価



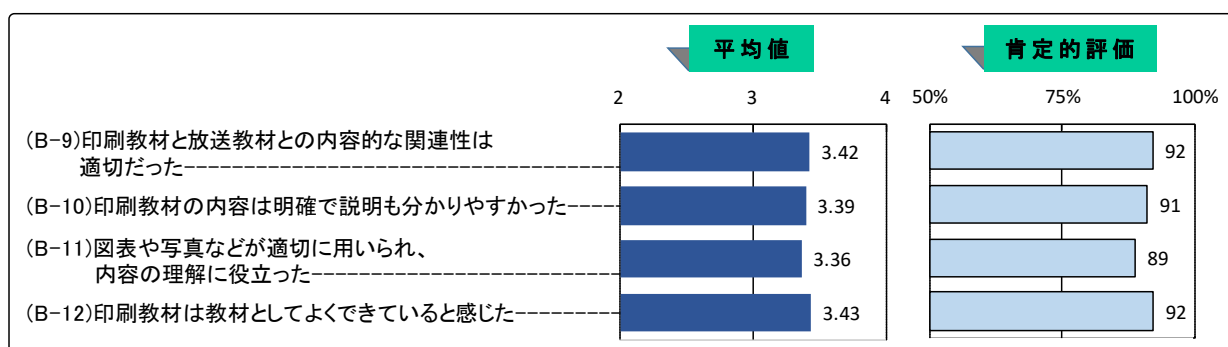
(4) 印刷教材

ここからは印刷教材について、評価項目ごとに見ていくことにする。

印刷教材の評価項目では（図2-37）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」と(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」及び(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」はいずれも90%を超え、高い評価であった。

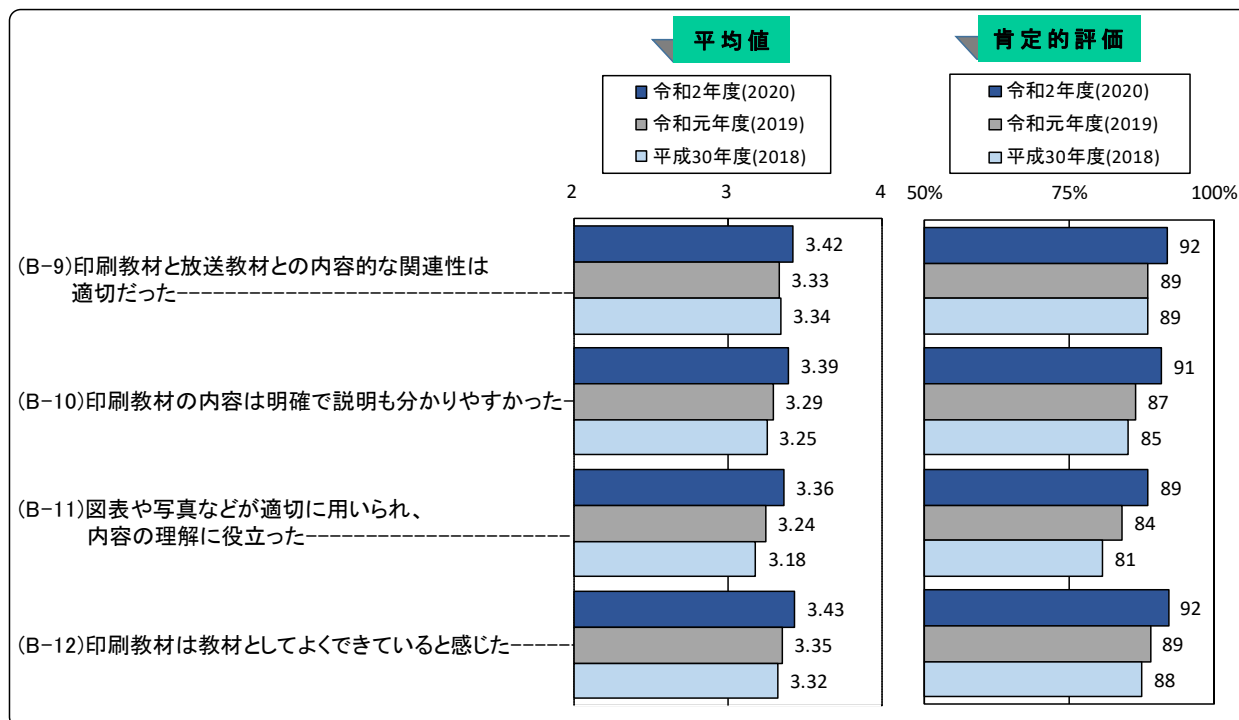
(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は他の項目と比べると89%と、評価がやや低かった。

図2-37【学部】回答者全体の印刷教材の評価



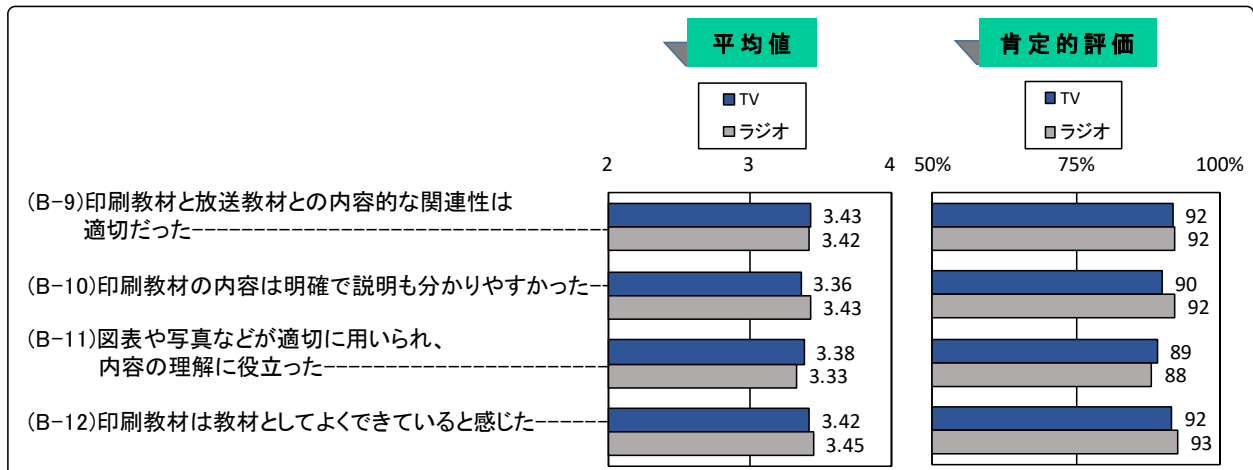
印刷教材の評価を時系列で見ると（図2-38）、本年度は全て項目で昨年度から更に評価を上げ、特に(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では昨年度より+5ポイントと、評価に大幅な上昇が見られた。

図2-38【学部】回答者全体の印刷教材の評価（時系列）



メディア別に印刷教材の評価を見ると（図2-39）、(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」を除く3項目では、両メディアは同水準であったが、(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」では、ラジオ科目の評価の方が高かった。

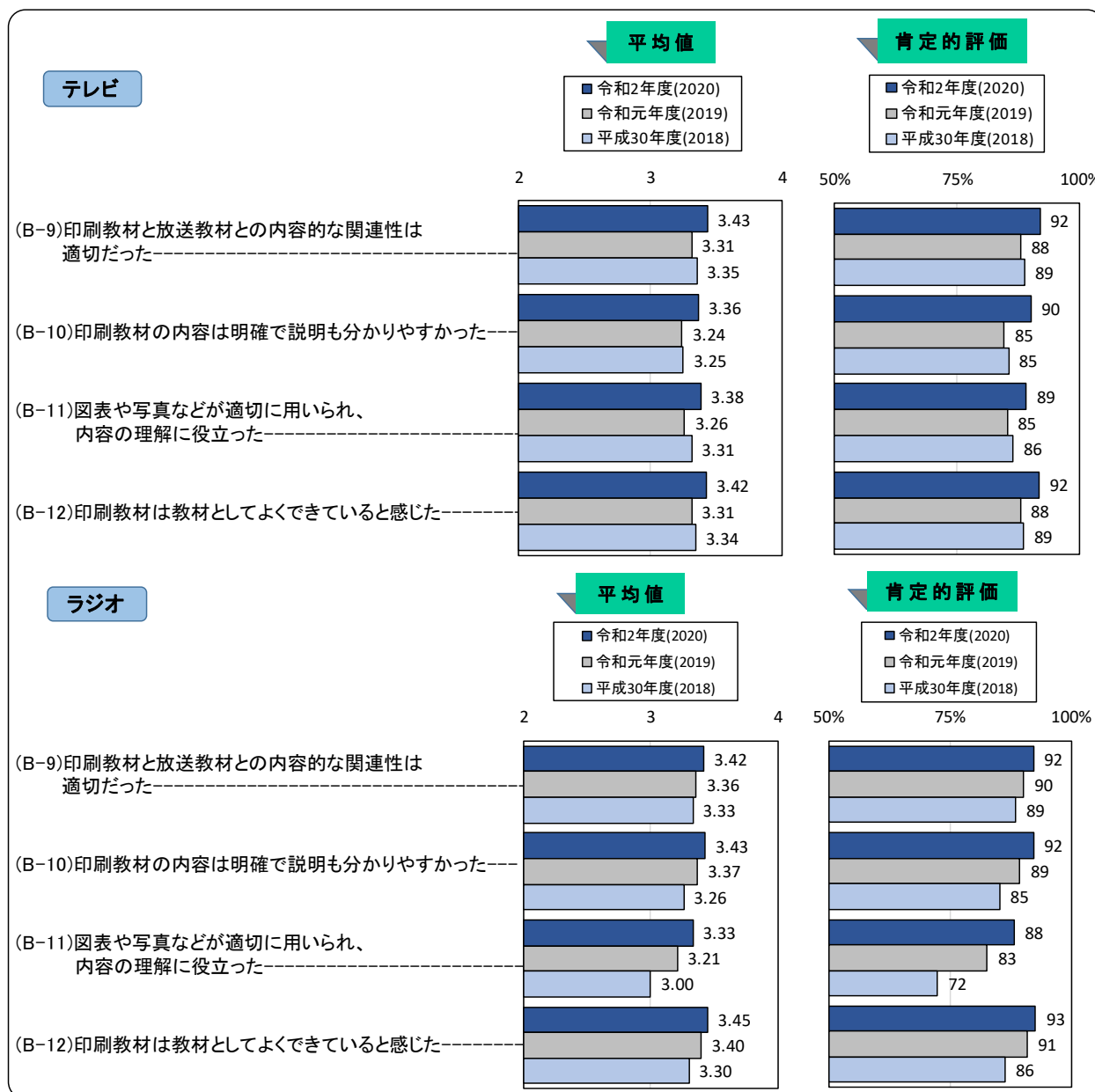
図2-39 【学部】メディア別の印刷教材の評価



メディア別の印刷教材の結果を時系列で見ると（図2-40）、テレビ科目では、本年度は、4項目全てで過去2年度と比べ評価に大きな上昇が見られた。特に(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」では、過去2年度から+5ポイントとその上昇幅は最も大きかった。

ラジオ科目についても、過去2年度から4項目全てで評価を上げており、(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」においては、昨年度より+5ポイントで、一昨年度からは16ポイントの大幅増であった。

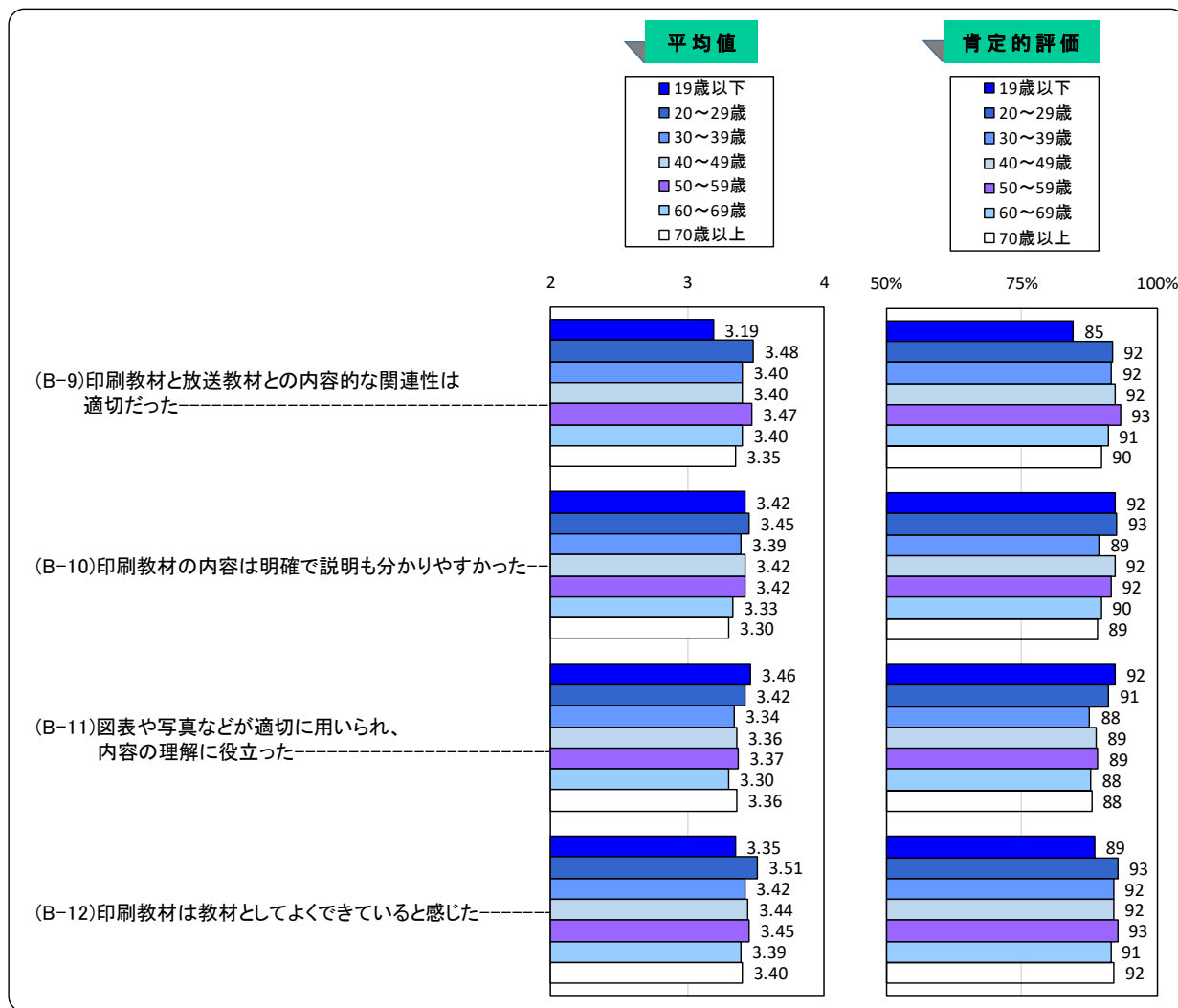
図2-40 【学部】メディア別の印刷教材の評価（時系列）



年齢階層別に印刷教材の評価を見ると（図2-4-1）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」は、19歳以下では85%と、他の年代よりかなり評価が低かった。

一方、(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では、19歳以下(92%)と20歳代(91%)は、他の年代と比べると評価が高かった。

図2-4-1 【学部】年齢階層別の印刷教材の評価



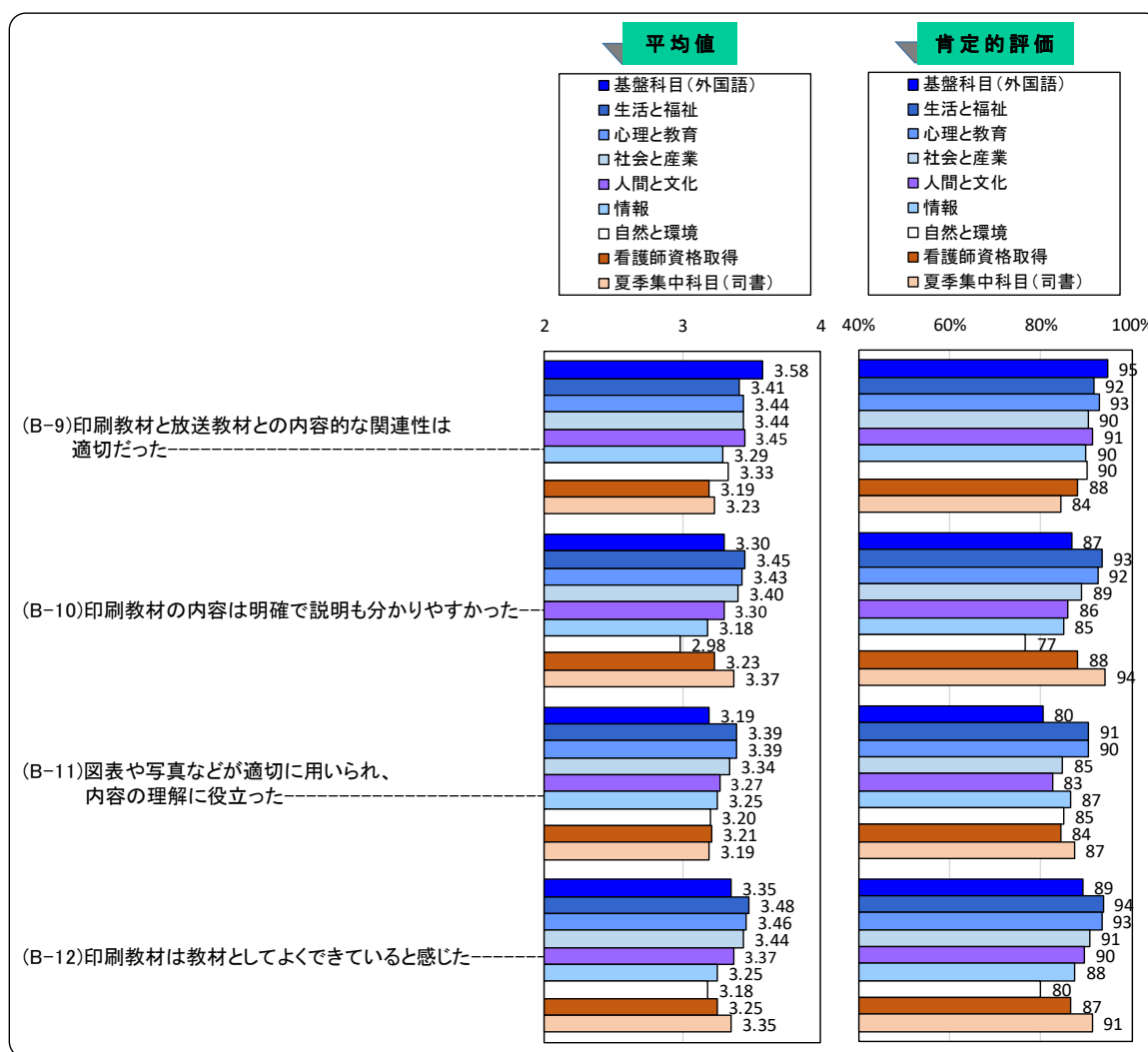
所属コース別に印刷教材の評価を見ると（図2-42）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」では、「基盤科目（外国語）」が95%と、評価が高く、反対に「夏季集中科目（司書）」が84%と、低い評価であった。

(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」については、「自然と環境」が極端に低評価で、特徴的な傾向が見られた。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は、「生活と福祉」と「心理と教育」が90%を超え高い評価で、反対に「基盤科目（外国語）」が80%の低評価で、上位との差は大きかった。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」でも、大きな差が見られ、「生活と福祉」と「心理と教育」が93~94%の高い評価であったのに対し、「自然と環境」が80%と、極端に低い評価であった。

図2-42 【学部】所属コース別の印刷教材の評価

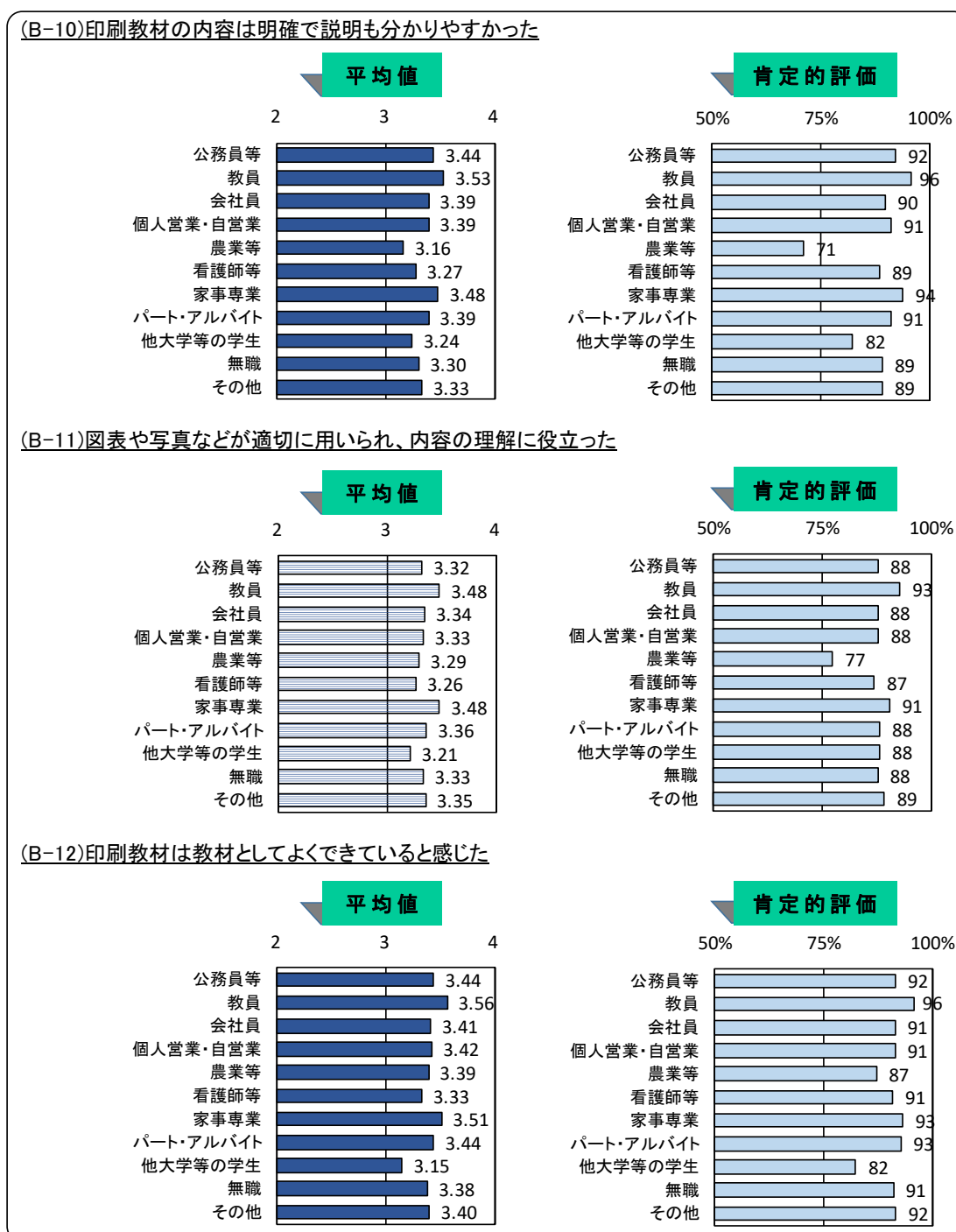


職業別の印刷教材の評価で（図 2 - 4 3）特徴的であったのは、下記の 3 項目全てで「教員」の評価が最も高く、93～96%と、高率であった。

反対に(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」と(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」で最も低い評価であったのは、「農業等」で、他の職業より 10～11 ポイント下回り、評価は 70%代であった。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」では、「他大学等の学生」の評価が特に低く、82%に過ぎなかった。

図 2 - 4 3 【学部】職業別の印刷教材の評価

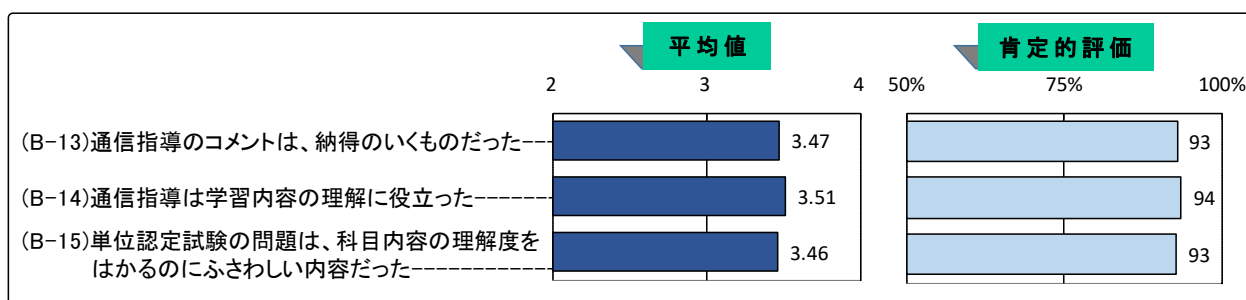


(5) 通信指導・単位認定試験

最後に通信指導・単位認定試験の評価について項目ごとに見ていくことにする。

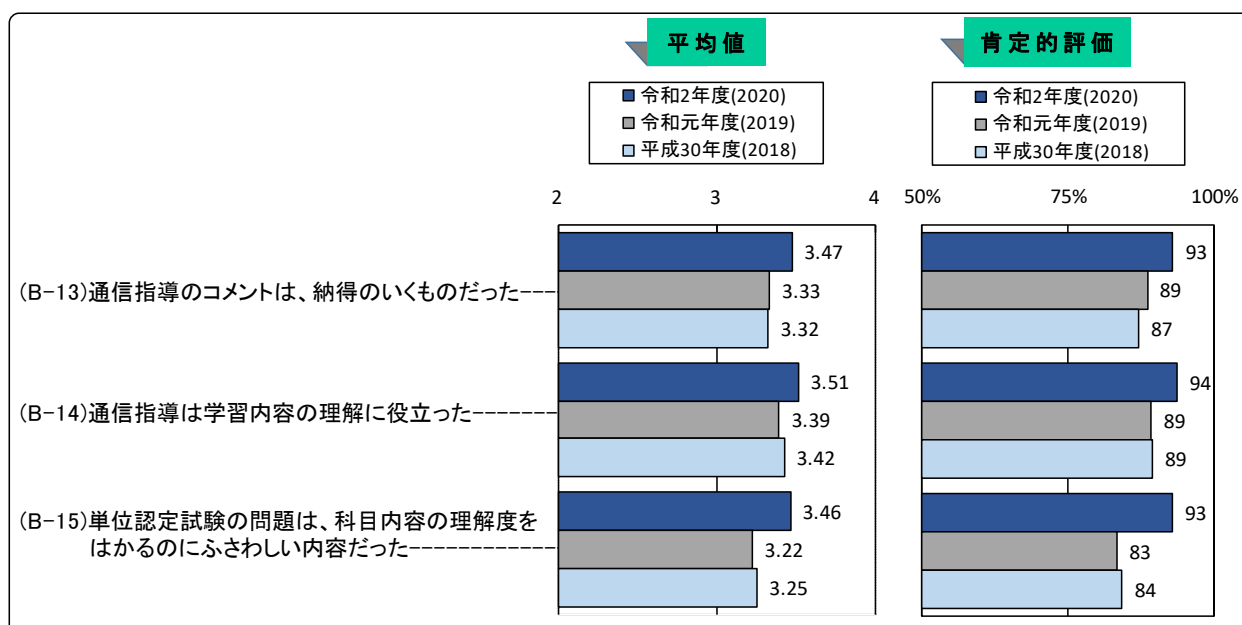
通信指導・単位認定試験については（図2-4-4）、全ての項目で90%を超え、高い評価であった。

図2-4-4 【学部】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価



通信指導・単位認定試験の評価を時系列で見ると（図2-4-5）、本年度は、下記の3項目全てで、過去2年度を大きく上回り、特に（B-15）「単位認定試験の問題は科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」では、昨年度から+10ポイントと、大きく上昇していた。

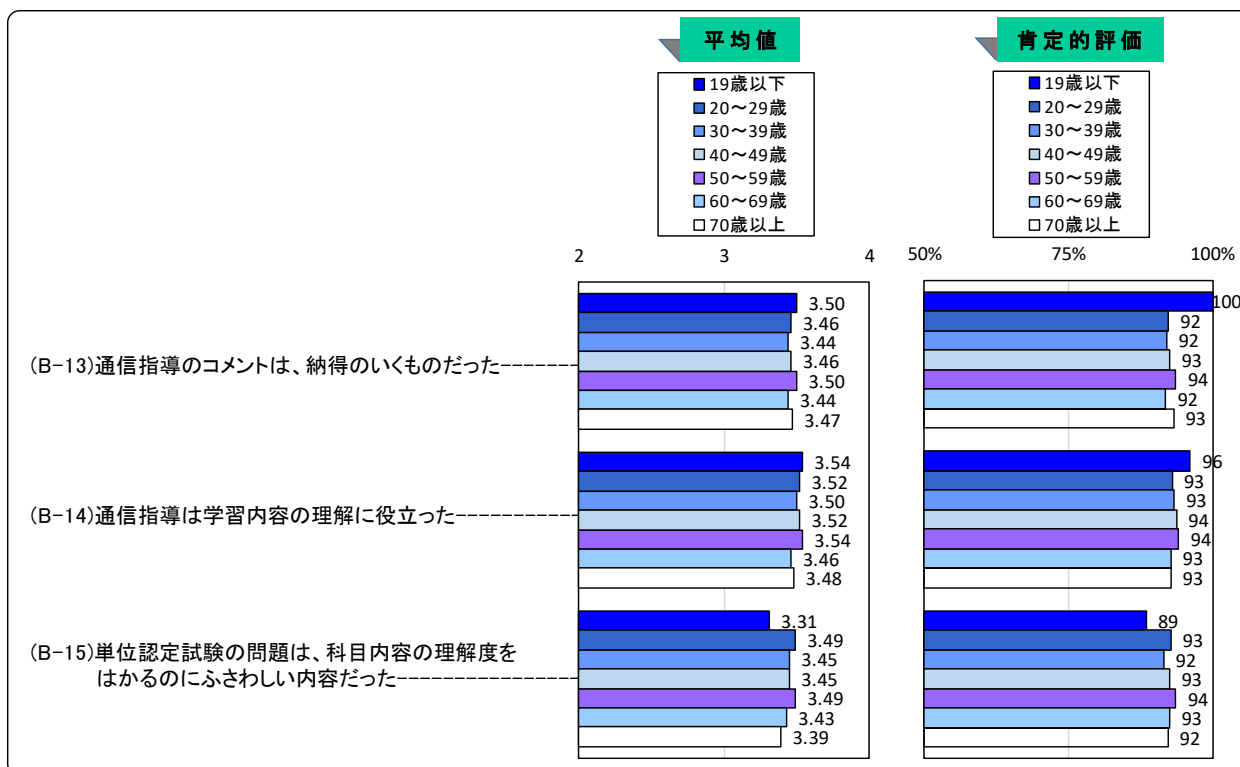
図2-4-5 【学部】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価（時系列）



年齢階層別に通信指導・単位認定試験の評価を見ると（図2-46）、特徴的であったのは（B-13）「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と（B-14）「通信指導は学習内容の理解に役立った」では、特に評価が高かったのは19歳以下で、順に100%と96%と、他の年代の評価を上回っていた。

反対に（B-15）「単位認定試験の問題は科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」では、19歳以下が89%で最も評価が低く、唯一90%代に達していなかった。

図2-46 【学部】年齢階層別の通信指導・単位認定試験の評価

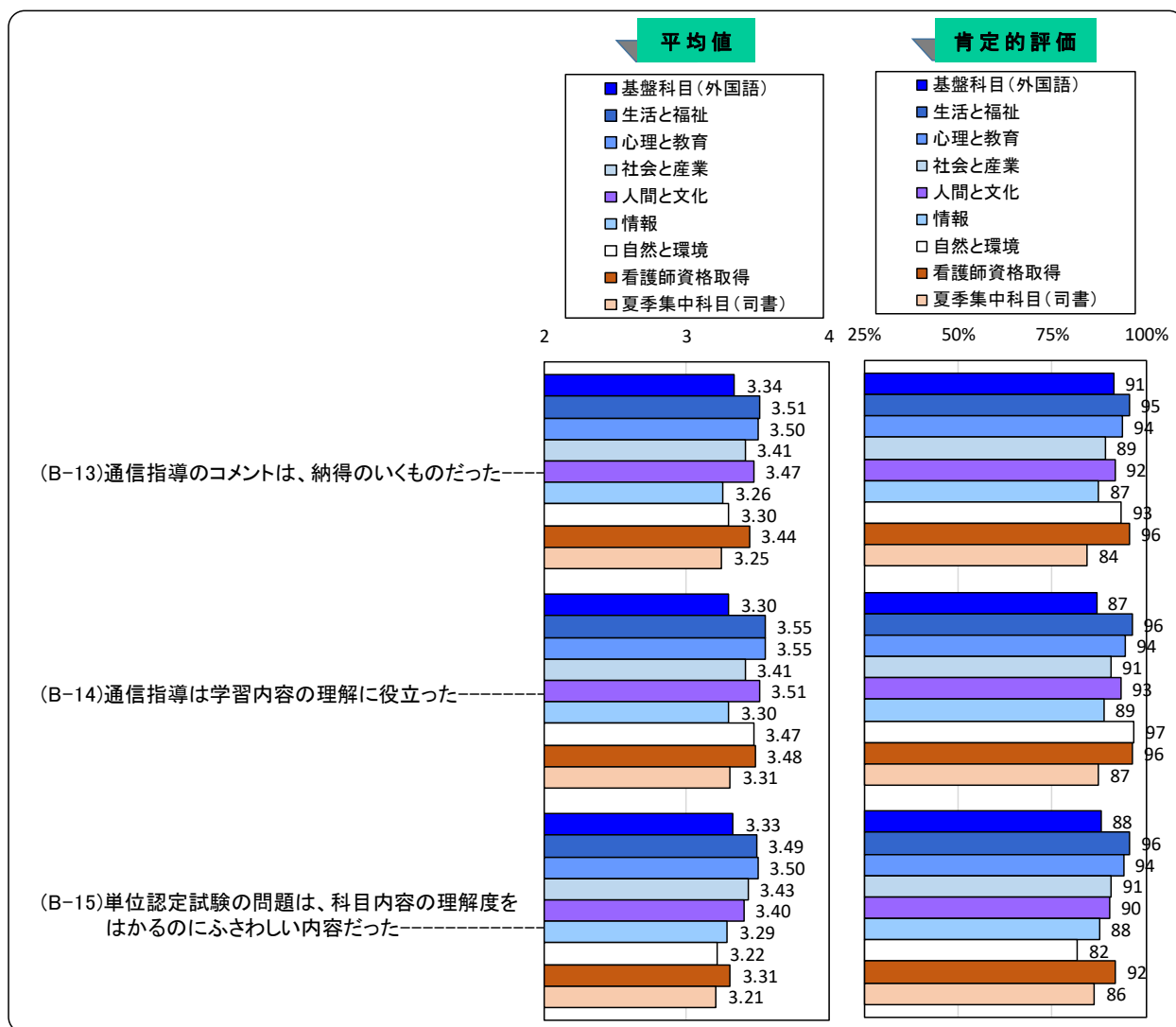


所属コース別に通信指導・単位認定試験の評価を見ると（図2-47）、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」で目立っていたのは、「夏季集中科目（司書）」（84%）の評価が他の所属コースに比べ特に低かった。

(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」では、「基盤科目（外国語）」と「夏季集中科目（司書）」が共に87%と、低い評価であった。

(B-15)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」では、「自然と環境」が82%と、目立って低かった。

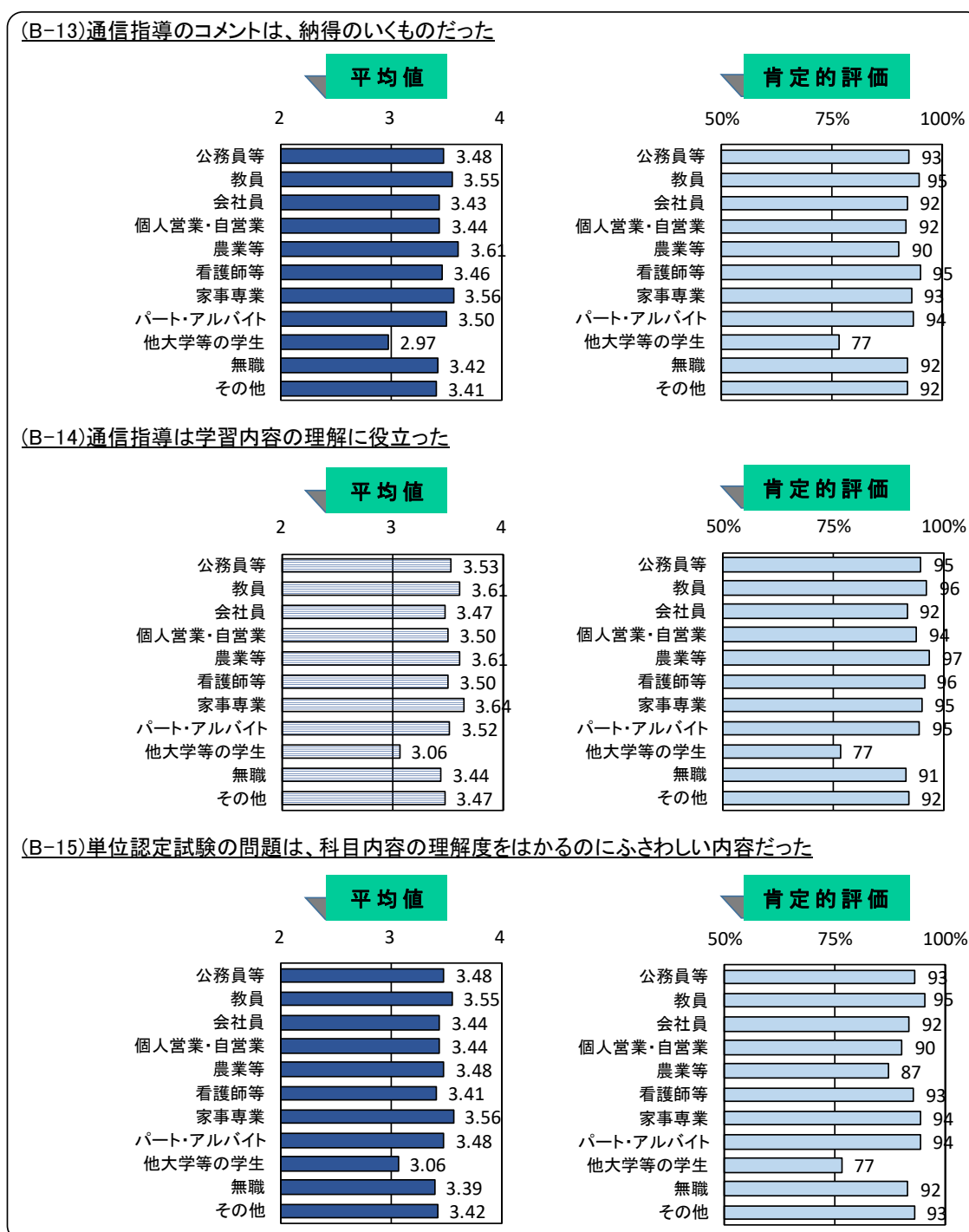
図2-47 【学部】所属コース別の通信指導・単位認定試験の評価



職業別に通信指導・単位認定試験の評価を見ると（図2-48）、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」で目立つのは、「他大学等の学生」は、他の所属コースの評価が90%代であったのに対し、両項目とも77%と、通信指導に対する評価が非常に低かった。

(B-15)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」でも、「他大学等の学生」の評価が77%と、非常に低く、他の職業から10ポイント以上の差をつけられていた。

図2-48【学部】職業別の通信指導・単位認定試験の評価



Ⅱ-1-4. 学部の重回帰分析

重回帰分析とは、数量データである目的変数と説明変数の関係を調べ、重回帰式（モデル式）を導き出す解析手法である。

今回も、全体の満足度（B-20「この科目の内容には全体として満足している」）を目的変数とし、調査票 I.A「授業への取り組み姿勢」を除く B-1～B-19 の各項目を説明変数として分析を試みる。

本調査の選択肢はカテゴリーデータであるが、平均値の算出と同様『あてはまる→4』のように数値をポイント化する事で数量として扱い、重回帰分析を適用する。

最終的には「全体の満足度」に寄与する項目を明らかにすると共に、その影響力の強さを知る事を目的としている。

項目名	変数	対象
目的変数	y	全体の満足度 B-20
説明変数	x_1, x_2, \dots	各項目 B-1～B-19: 全 19 問(項目)
係数	a_1, a_2, \dots	重回帰分析によって得られる偏回帰係数

重回帰式 $y = a_0 + a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + a_{19}x_{19}$ (説明変数が 19 個の場合)

サンプルサイズが十分でない場合や説明変数が多すぎると、全体の満足度を表すのに適した重回帰式を得られない事が経験的に分かっているため、重回帰分析の中で、説明変数間で強い相関関係がある場合、その一方の項目を自動的に削除する「変数減少法」を用いて解析を行った。

使用したデータは質問項目 I.B の全設問を全て回答した 7320 人のローデータを使用した。(一昨年度からオンライン利用によるアンケート形式に替わり、今回も全員が全設問を回答していた。)

その結果は以下の通りとなった。

■分析精度

自由度修正済み決定係数とは、得られた重回帰式が目的変数に対してどれだけ説明力(寄与度)があるかを示す指標で、「1」に近いほど良い結果で、この分析では 0.711 となった。

ダーヴィンワトソン比とは、残差同士の系列相関(自己相関)を示す指標で 0～4 までの値を示し、1 以下や 3 以上だと残差(誤差)に規則性があり、解析自体あるいはデータ自体に問題があり、「2」近辺の値ならよいとされるもので、その値は 2.007 となり。

以上の結果から、問題のない結果が得られた事が示されている。

◆分析精度

決定係数	0.711
自由度修正済み決定係数	0.710
ダーヴィンワトソン比	2.007
残差の標準偏差	0.358

今回の重回帰分析は、分散分析表が示すとおり、有意水準 0.01 の判定で、かなりの精度で式の当てはまりの良さが確認できた。

(有意水準とは危険率と同義で 0.01 の場合、判定を誤る確率が 1% である事を現している。)

◆分散分析表

変動	偏差平方和	自由度	不偏分散	分散比	p値	判定
全体変動	3233.865	7319				
回帰による変動	2299.011	12	191.584	1497.459	0.000	[**]
回帰からの残差変動	934.854	7307	0.128			

凡例	有意水準	凡例	有意水準
[**]	0.01	[*]	0.05

下表にある標準偏回帰係数とは説明変数の相互比較を可能にするためのもので、各説明変数の目的変数に対する影響力の度合いがこれで分かる。

その結果から「全体の満足度(B-20)」に寄与する項目で、その寄与度が最も高かったのは B-17(0.274)、次いで B-19(0.241)、他に B-18 (0.148)、B-7 (0.091) と続いた。

説明変数の影響力の度合いを比較するために、表中の標準偏回帰係数の中で最も小さい B-16 (0.037) を基準に、他の項目がその何倍になるか算出してみた。(表中の右端の数値) その結果、高い順に B-17:7.3 倍、B-19:6.5 倍、B-18:4.0 倍、B-7:2.4 倍となった。

今後の「全体の満足度」(肯定的評価 93%) を上げるためには、上位 2 項目(「B-17 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」・「B-19 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」)の肯定的評価を上げる事が、効果的であると考えられる。

この 2 項目の肯定的評価について見てみると、B-17:93%、B-19:92% で、それぞれの肯定的評価を上げる余地は残っていると思われる。

目的変数	標準偏回帰係数	説明変数	判定	B-16との対比
B-20.全体の満足度	0.274	B-17 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった	[**]	7.3
	0.241	B-19 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)	[**]	6.5
	0.148	B-18 新しい知識が身につく視野が広がった	[**]	4.0
	0.091	B-7 放送授業は教材としてよくできていると感じた	[**]	2.4
	0.072	B-12 印刷教材は教材としてよくできていると感じた	[**]	1.9
	0.058	B-15 単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった	[**]	1.5
	0.057	B-5 講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった	[**]	1.5
	0.057	B-3 印刷教材の難易度は適切だった	[**]	1.5
	0.037	B-16 授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った	[**]	1.0
	定数項	[**]		

※説明変数の中で有意水準が0.05以下の項目だけを掲載した

Ⅱ－２．大学院の分析結果

Ⅱ－２－１．項目平均から見た全体的傾向

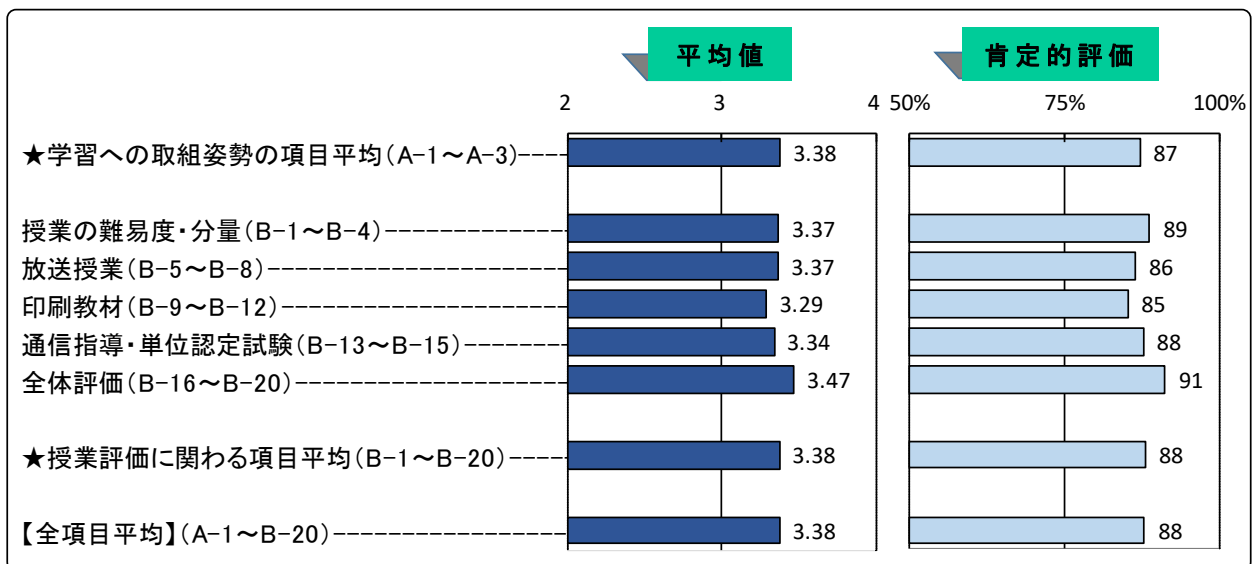
評価項目の内容ごとに回答者全体の平均値と肯定的評価を A-1～A-3 等の複数の項目の平均を算出しグラフ化（図 2－47）した。

学部同様、肯定的な評価（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）の方が（例えば回答者の 80%）イメージしやすく、下図左側の平均値と肯定的評価に齟齬が生じた場合、どちらを採用するか合理的に判断出来ないため、コメントについては肯定的評価を用いて、平均値は参考値として扱っていきたい。

また、新規開設科目の年度比較は、比率の差の検定結果から、大学院は、学部ほど回答者数が多くないため（2020 年度：223 人、2019 年度：350 人、2018 年度：76 人）、本年度と昨年度の比較では概ね 6 ポイントの差で有意となったため、6 ポイント以上で差があることとした。

項目平均による全体的傾向をみると（図 2－47）、項目間では『授業の難易度・分量（B-1～B-4）』と『全体評価（B-16～B-20）』が 90%前後と高く、反対に『印刷教材（B-9～B-12）』が 85%と、低かった。

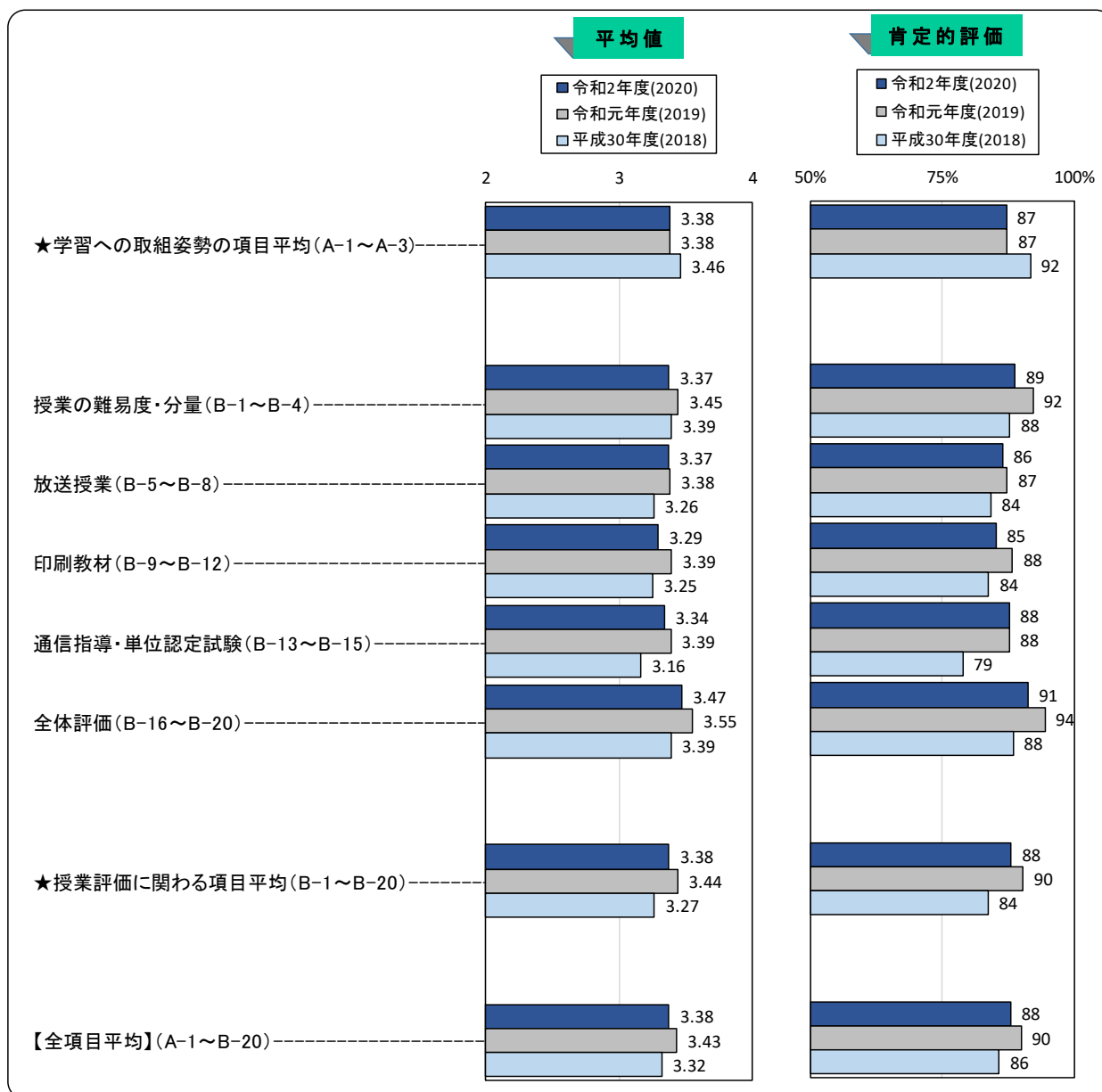
図 2－47 【大学院】項目平均による全体的傾向



項目平均を科目の開設年度で比較してみると(図2-48)、本年度は昨年度と比べ『学習への取組み姿勢(A-1~A-3)』と『通信指導・単位認定試験(B-13~B-15)』は昨年度と全く変わらなかったが、それを除く項目では、本年度は僅かに評価が下がっていた。

一昨年度との比較では『学習への取組み姿勢(A-1~A-3)』が5ポイントのマイナス、『通信指導・単位認定試験(B-13~B-15)』は9ポイントのプラスであった。

図2-48 【大学院】項目平均による全体的傾向(開設年度比較)

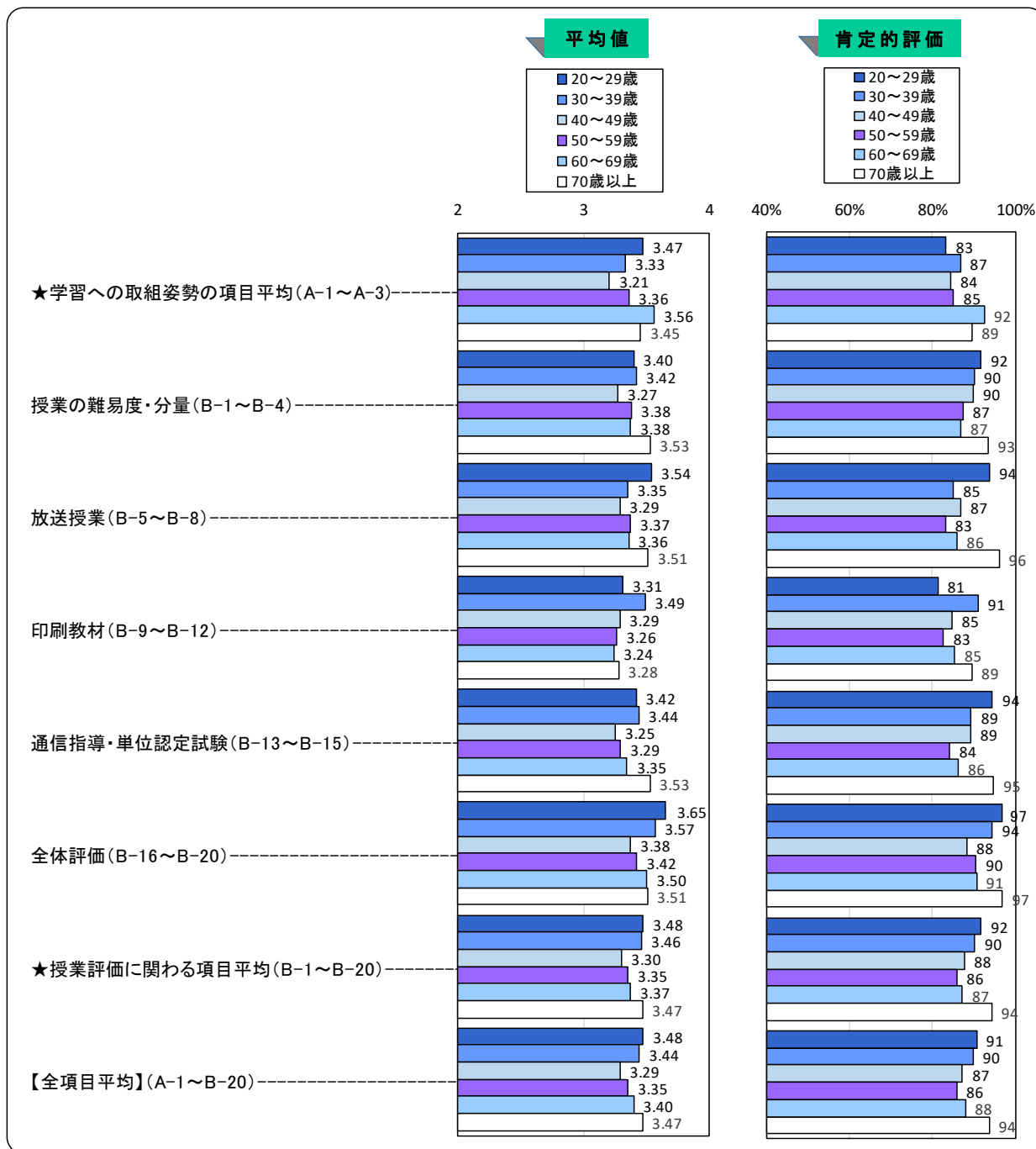


年齢階層別では（図 2 - 4 9）、『学習への取組み姿勢（A-1～A-3）』と『印刷教材（B-9～B-12）』を除く項目では、70 歳以上が 90% 越え、評価が高く、特に『全体評価（B-16～B-20）』では、97%と、項目間でも最も高い評価であった。

『学習への取組み姿勢（A-1～A-3）』では 60 歳代が最も高く 92%、『印刷教材（B-9～B-12）』では 30 歳代が 91%で最も高かった。

※「20～29 歳」は回答者数が 12 人と少人数である為、コメントを差し控えた。

図 2 - 4 9 【大学院】項目平均による年齢階層別全体的傾向



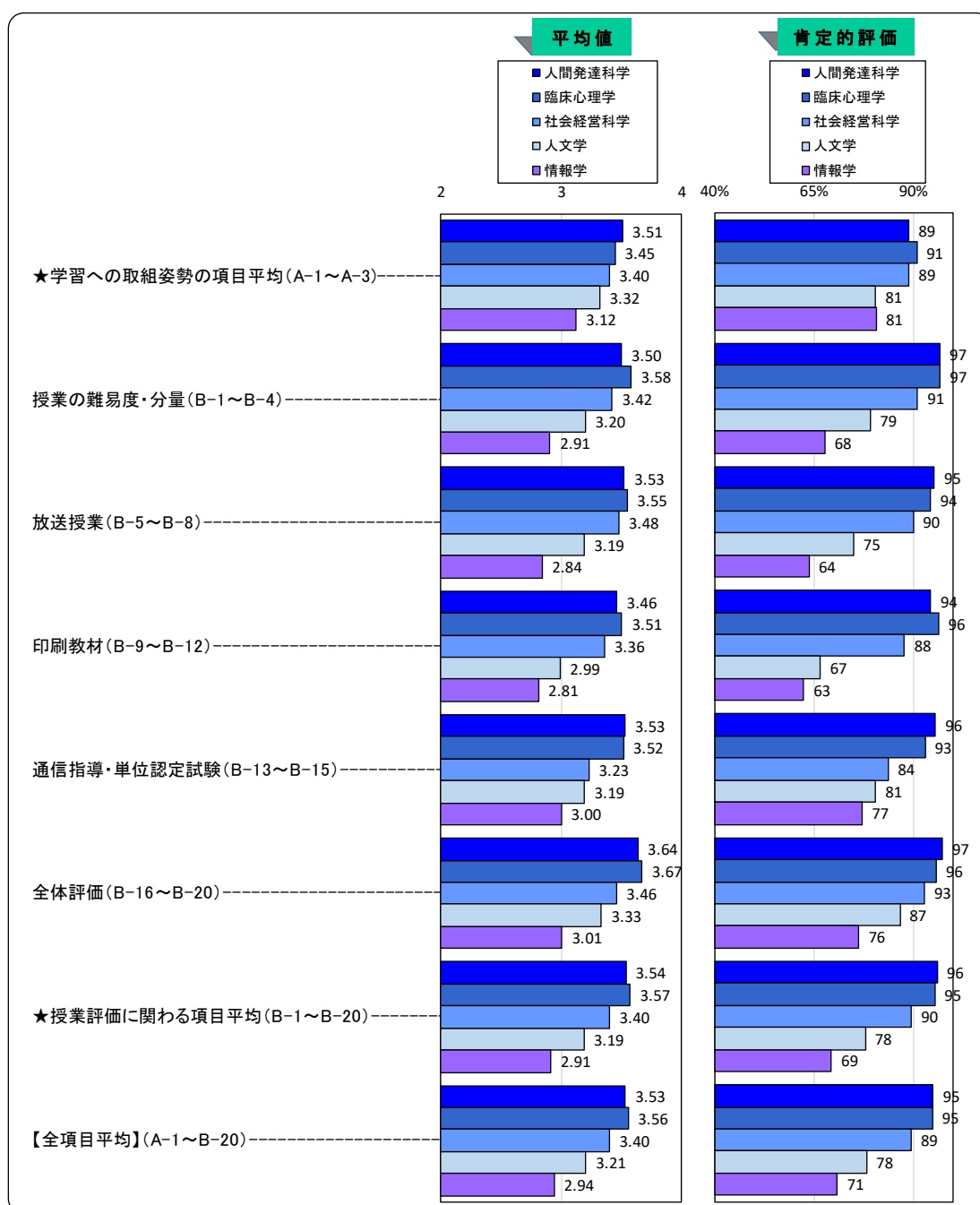
所属プログラム別に項目平均を見ると（図2-50）、全ての項目で「人間発達科学」と「臨床心理学」の評価が高く、特に『授業の難易度・分量（B-1～B-4）』と『全体評価（B-16～B-20）』で96～97%と高い評価で、「人間発達科学」「臨床心理学」に特徴的な傾向が見られた。

『学習への取組み姿勢（A-1～A-3）』では、「社会経営科学」も89%で上位グループ内であった。

反対に全ての項目で最も低い評価であったのは「情報学」で、特に『放送授業（B-5～B-8）』と『印刷教材（B-9～B-12）』で63～64%に留まっていた。

『学習への取組み姿勢（A-1～A-3）』は「人文学」も「情報学」と同率の81%で、他のプログラムと比べ最も評価が低かった。

図2-50 【大学院】項目平均による所属プログラム別全体的傾向

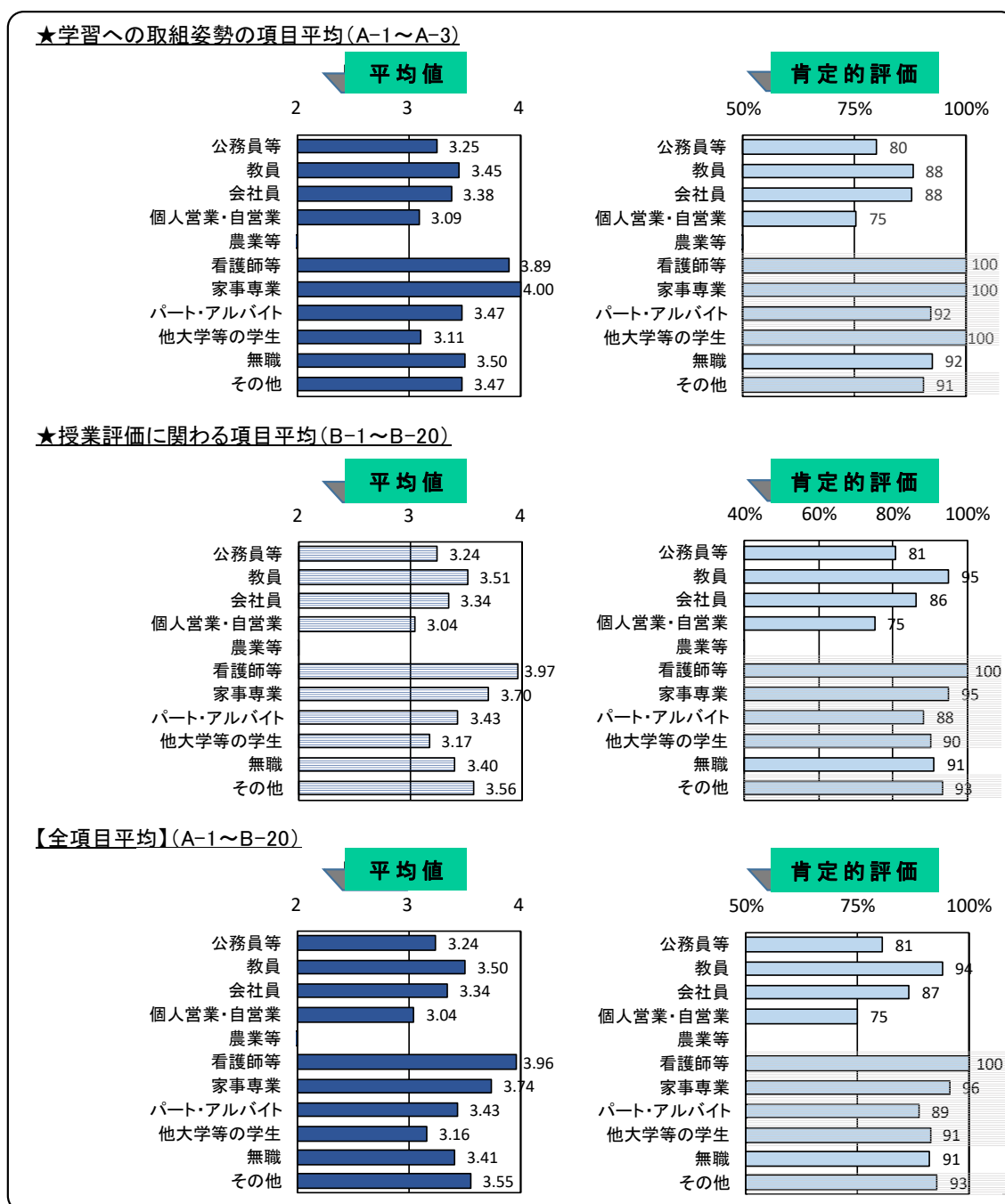


職業別では（図2-51）、「農業等」の従事者は一人もおらず、また、「看護師等」（3人）、「家事専業」（1人）、「パート・アルバイト」（17人）、「他大学等の学生」（3人）、「その他」（14人）は回答者数が少人数だった為、この頁を含めそれ以後も割愛する事とする。

『学習への取組み姿勢（A-1～A-3）』では、「無職」（92%）の評価が最も高く、反対に「個人営業・自営業」（75%）が極端に低く、評価に大きな開きが見られた。

『授業評価に関わる項目平均（B-1～B-20）』と【全項目平均（A-1～B-20）】については、共に「教員」の評価が、順に95%、94%で最も高く、反対に「個人営業・自営業」が両項目とも75%と、ここでも評価に大きな開きが見られた。

図2-51 【大学院】項目平均による職業別全体的傾向

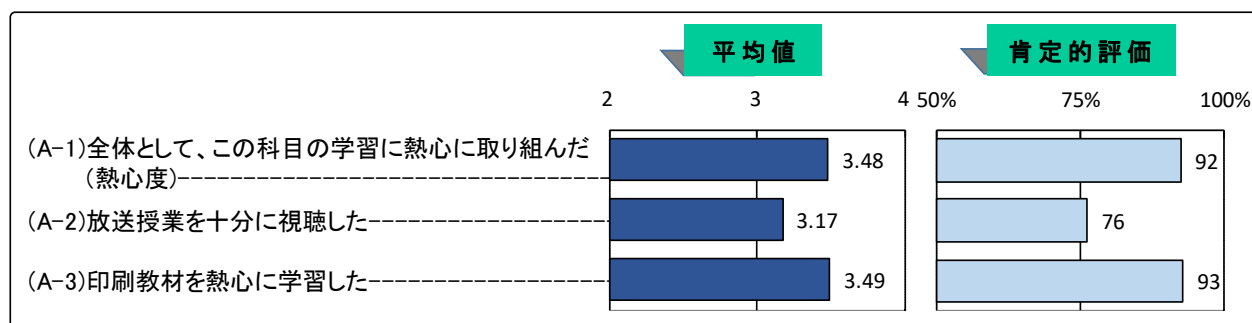


Ⅱ－2－2. 学習への取組み姿勢

ここからはそれぞれ評価項目ごとに調査結果を見ていく。

『学習への取組み姿勢』（図2-5-2）では、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は92～93%に達していたが、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は76%と、前述の2項目に比べ極端に取り組む姿勢が低かった。

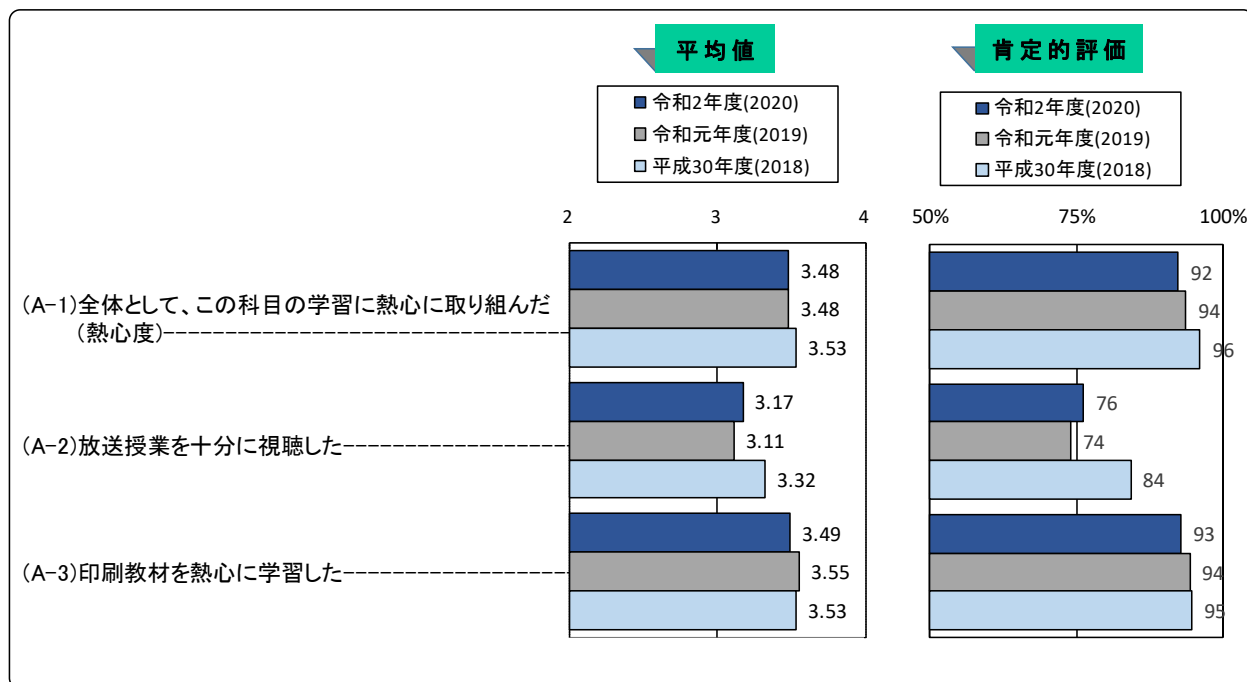
図2-5-2 【大学院】回答者全体の取組姿勢



『学習への取組み姿勢』を時系列で見ると（図2-53）、全ての項目で本年度の評価は昨年度と比べ、ほとんど変わりがなかった。

ただ、一昨年度と比べると、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」が8ポイントマイナスで、昨年度の落ち込みを回復する事ができていなかった。

図2-53 【大学院】回答者全体の取組姿勢（時系列）



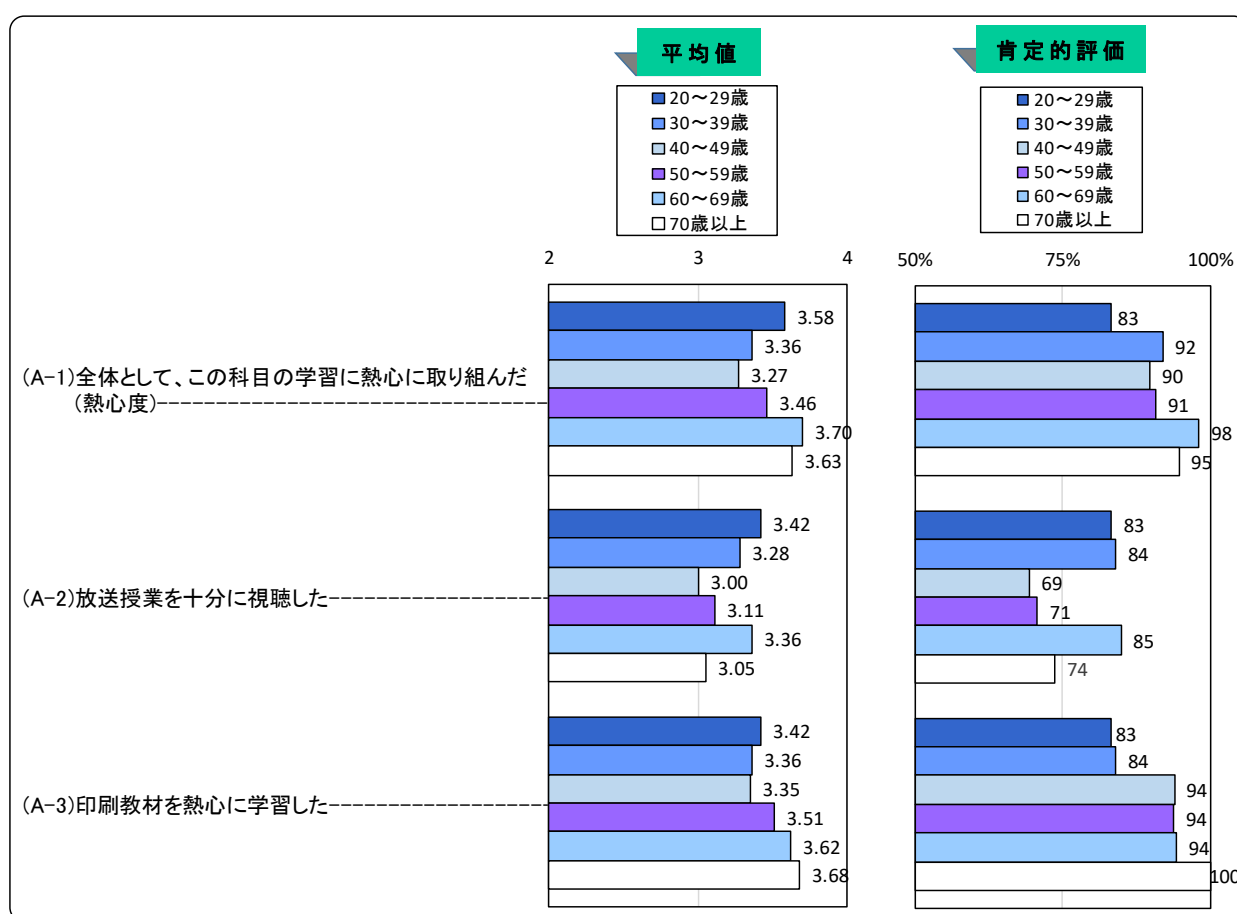
年齢階層別では（図 2 - 5 4）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」では、60 歳代が 98% で、非常に高い評価であった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は同様に、60 歳代が 85% と、最も高い評価で、40 歳代が最も低く、69% であった。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は、70 歳以上が 100% と、全員が肯定的評価で、反対に 30 歳代が 84% と、両者の評価に大きな開きが見られた。

※「20～29 歳」は回答者数が 12 人と少人数で極端な値を取る場合がある為、コメントを割愛した。また、これ以降のページも同様とする。

図 2 - 5 4 【大学院】年齢階層別の取組姿勢

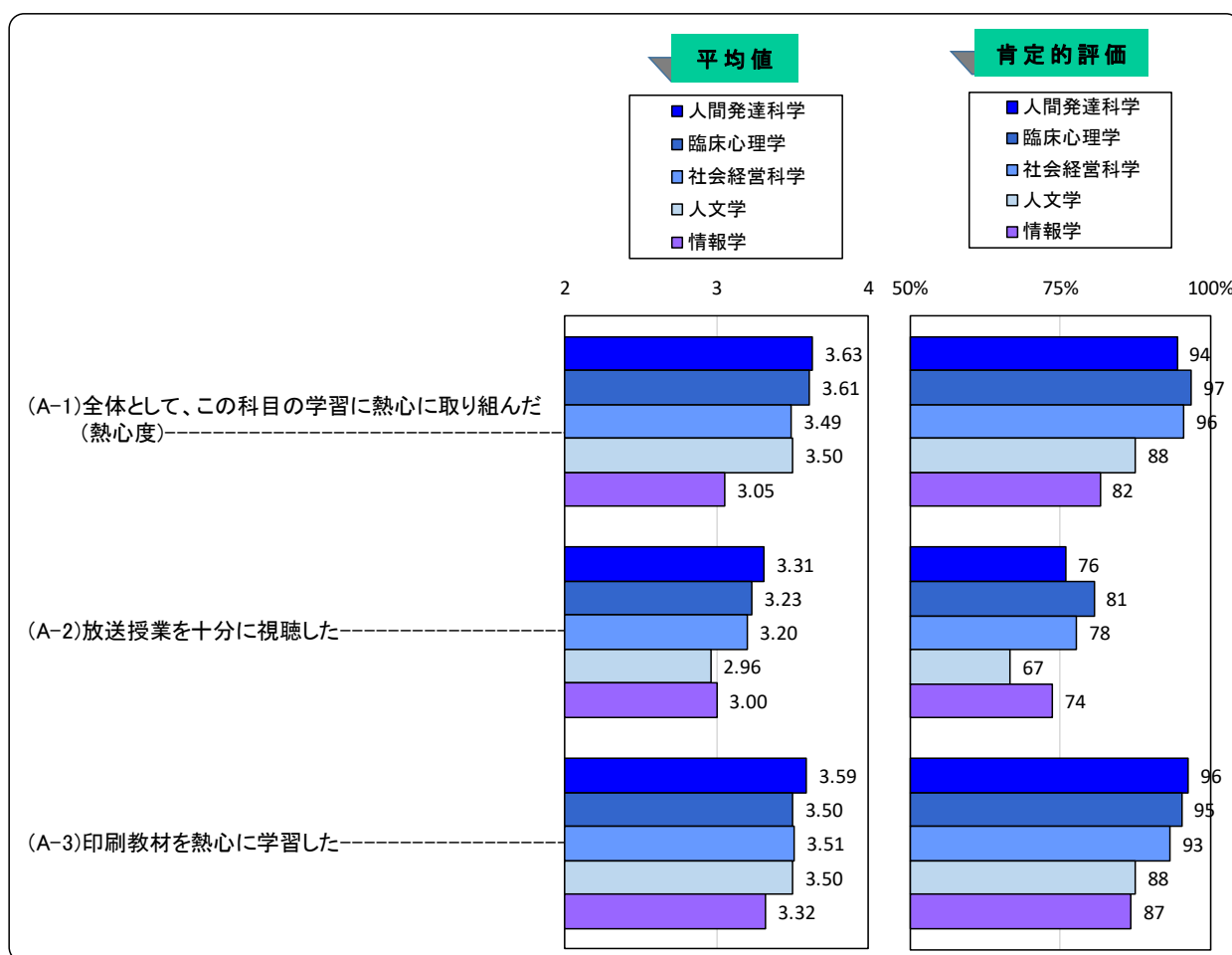


所属プログラム別では（図 2-55）、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」は、「臨床心理学」（97%）と「社会経営科学」（96%）の評価が高く、「情報学」（82%）が非常に低かった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」については、「臨床心理学」が 81%と、最も高く、「人文学」が 67%で、極端に低かった。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では、「人間発達科学」（96%）と「臨床心理学」（95%）の評価が高かった。

図 2-55 【大学院】所属プログラム別の取組姿勢



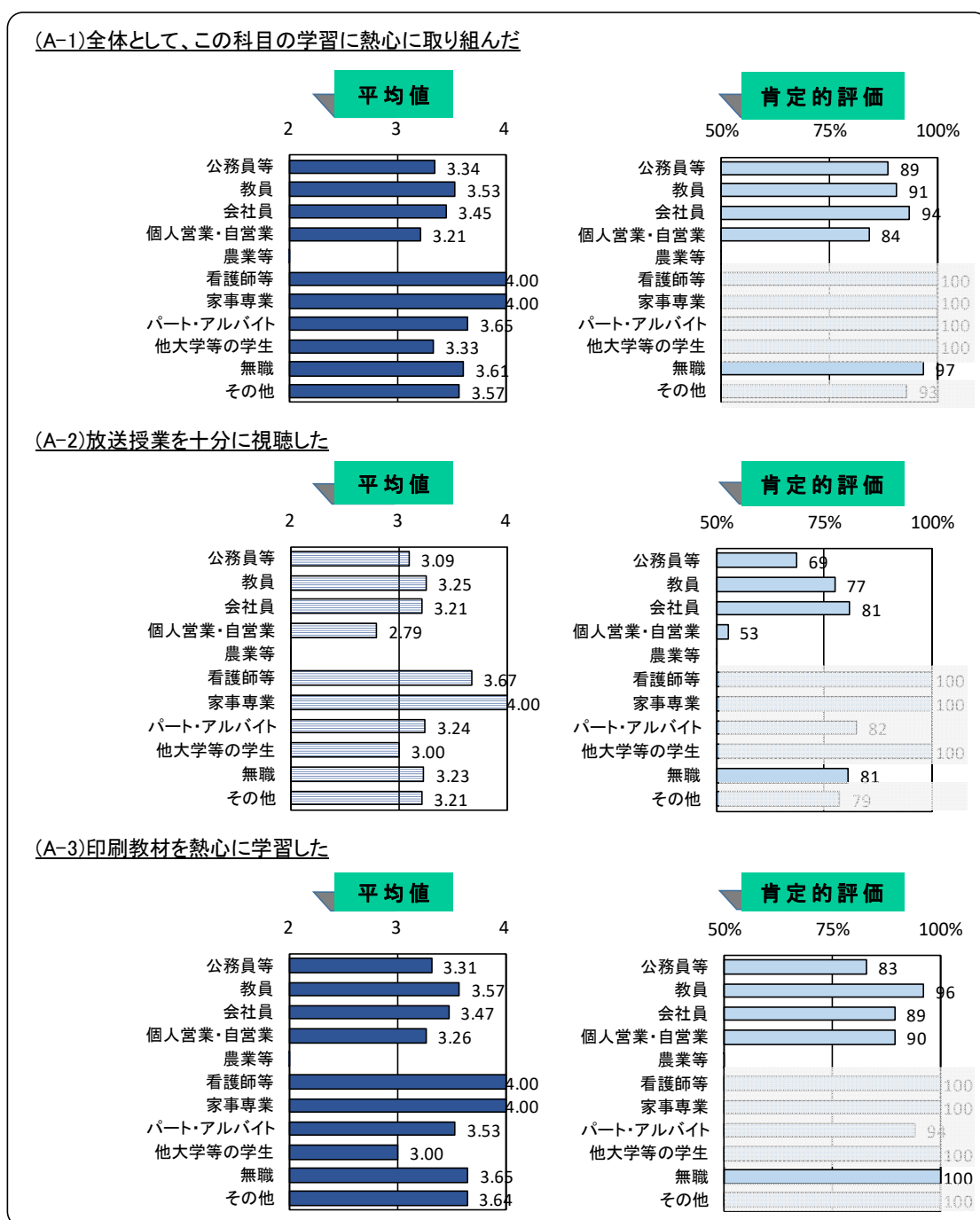
職業別では（図2-56）、「無職」の評価が全ての項目で最も高く、特に（A-3）「印刷教材を熱心に学習した」では100%で全員が肯定的評価であった。

（A-2）「放送授業を十分に視聴した」では、「会社員」（81%）も「無職」と同率で最も評価が高かった。

反対に評価が低かったのは、（A-1）「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と（A-2）「放送授業を十分に視聴した」では「個人営業・自営業」で、特に（A-2）「放送授業を十分に視聴した」では、その評価が53%と、かろうじて過半数を保っていた。

（A-3）「印刷教材を熱心に学習した」は、「公務員等」が83%と、低い評価であった。

図2-56【大学院】職業別の取組姿勢



単位認定のための学習方法（図2-57）では、属性別の各層内で回答者数が17人以下と少ない、「20～29歳」「農業等」「看護師等」「家事専業」「パート・アルバイト」「他大学等の学生」と「その他」の7属性については、下記のグラフから除外した。

全体は、比率の高い順に「放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ」が67%と、過半数を占め、「ほとんど印刷教材の学習だけで臨んだ」が28%で、「ほとんど放送教材の学習だけで臨んだ」は5%と、ごくわずかであった。

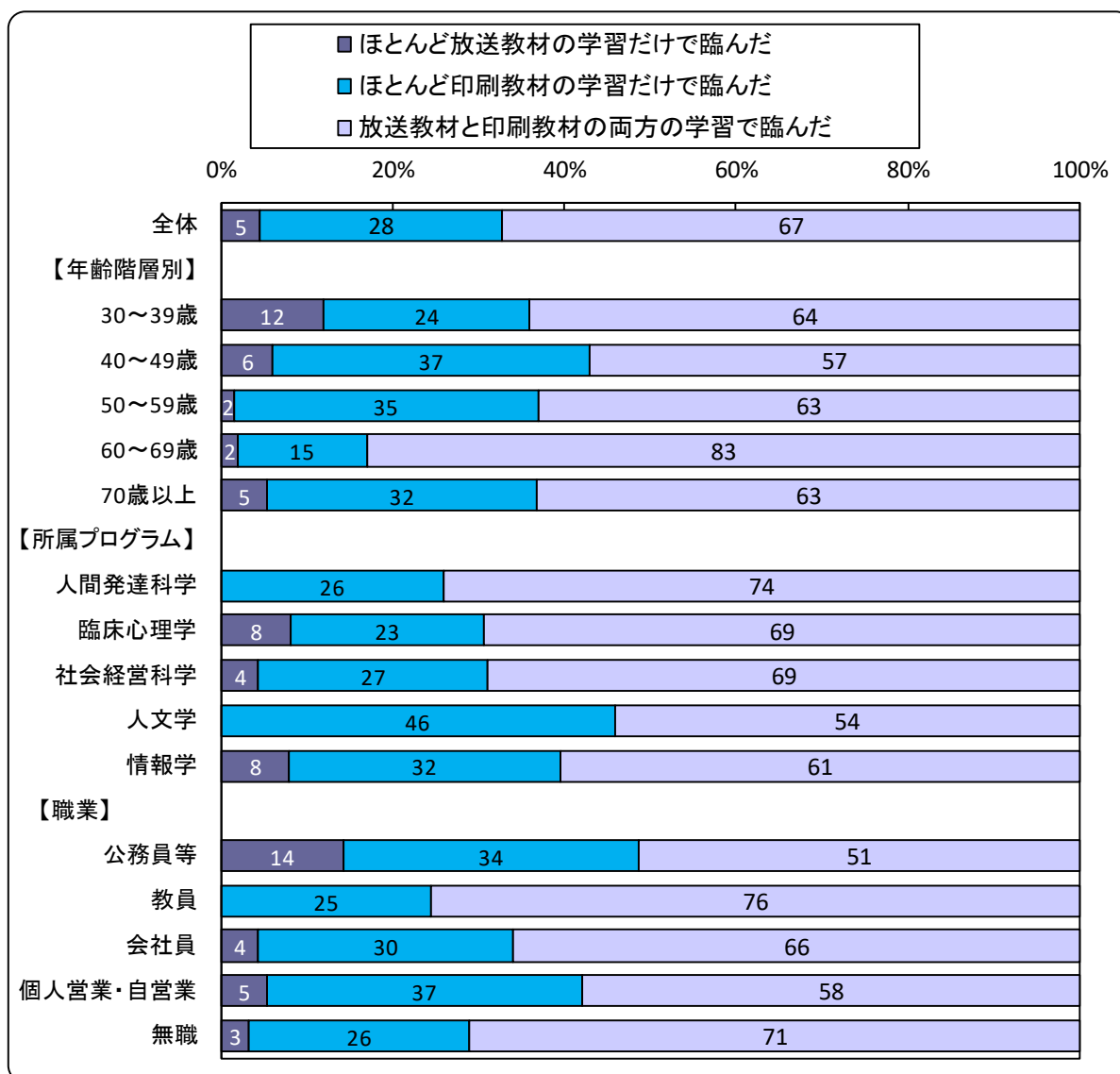
年齢階層別では、60歳代は、「放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ」が83%と、全体に比べ比率が高かった。

所属プログラム別では、「人文学」は「印刷教材の学習だけ」（46%）と「両方の学習で臨んだ」（54%）に大きな差はなく、ほぼ拮抗している。

「公務員等」は、「両方の学習で臨んだ」が51%と、他の職業と比べ最も低かった。

「個人営業・自営業」は、「印刷教材の学習だけ」が37%で、他の職業に比べ最も高かった。

図2-57 【大学院】単位認定のための学習方法



Ⅱ－２－３．大学院の授業評価

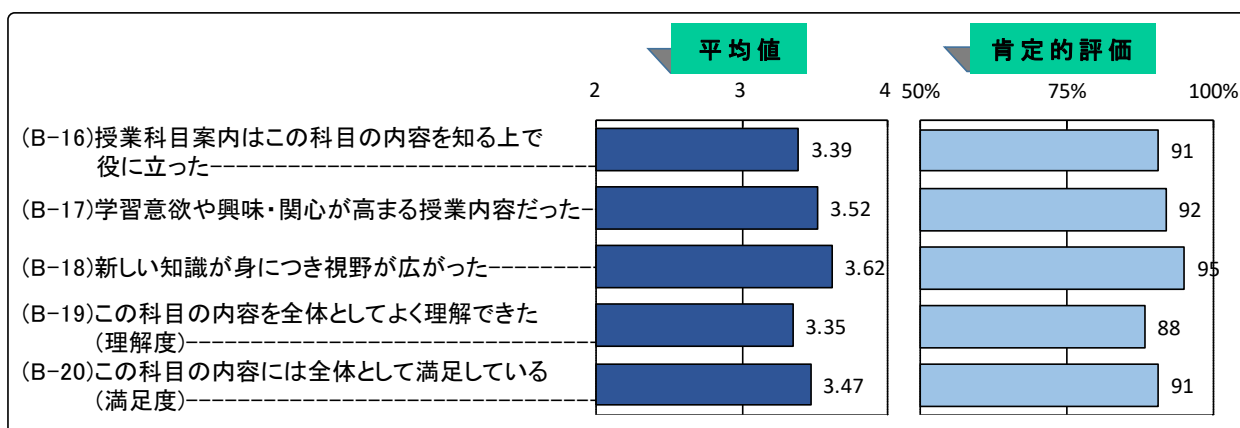
(1) 全体評価

ここからは大学院の授業評価について、評価項目ごとに見ていくことにする。

全体評価の項目では（図 2－58）、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」(95%) が最も高く評価されていた。

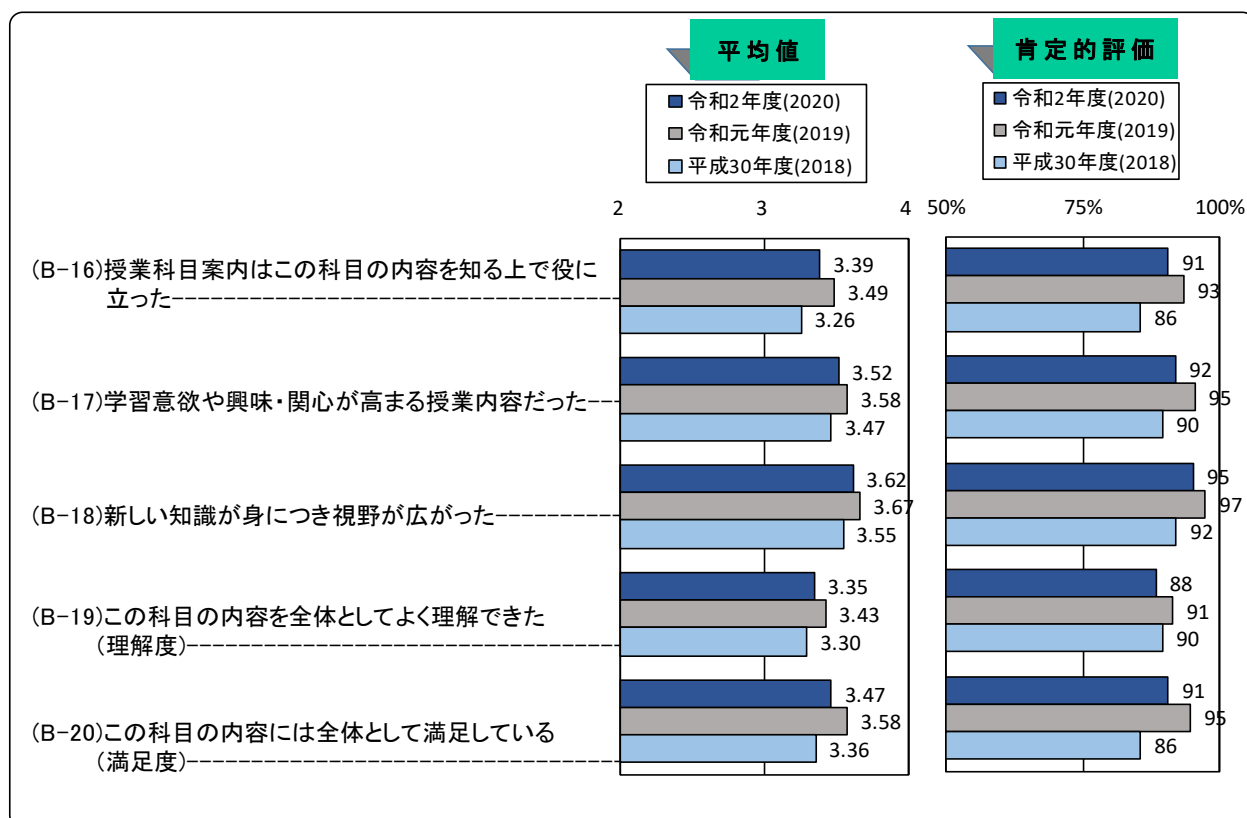
反対に (B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」は 88%と、最も低く、それ以外の項目については 91～92%であった。

図 2－58 【大学院】回答者全体の全体評価



全体評価を時系列で見ると（図2-59）、昨年度と比べ全ての項目で下降傾向が見られ、特に(B-20)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」の評価の落ち込みが大きかった。

図2-59 【大学院】回答者全体の全体評価（時系列）

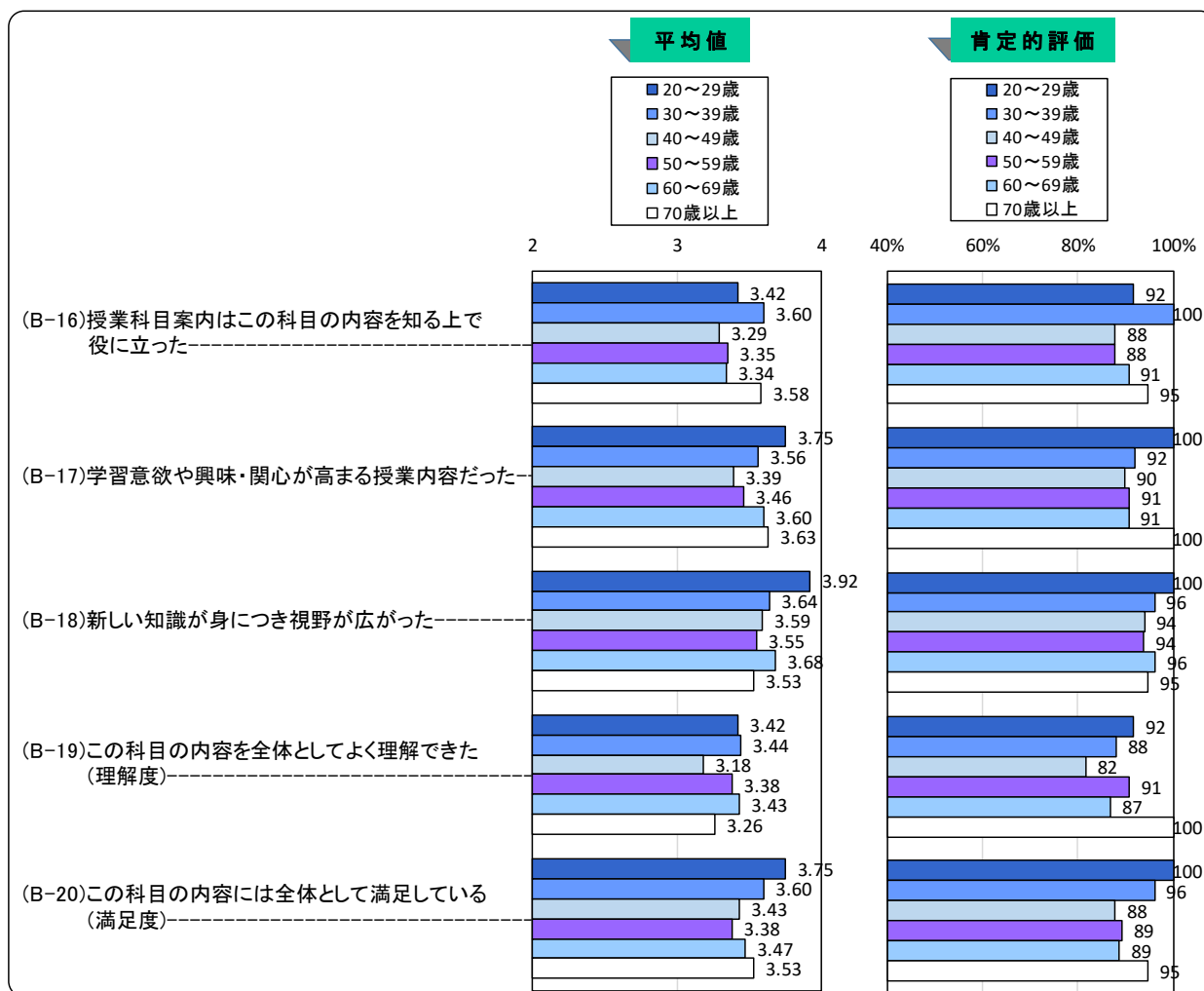


年齢階層別では（図2-60）、(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」については、30歳代が100%と、最も高く、(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」と(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」は、70歳以上が共に100%と、最も高かった。

(B-20)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」は30歳代と70歳以上が95%を超え、他の年代より高かった。

※「20～29歳」は回答者数が12人と少人数である為、コメントを差し控えた。

図2-60【大学院】年齢階層別の全体評価



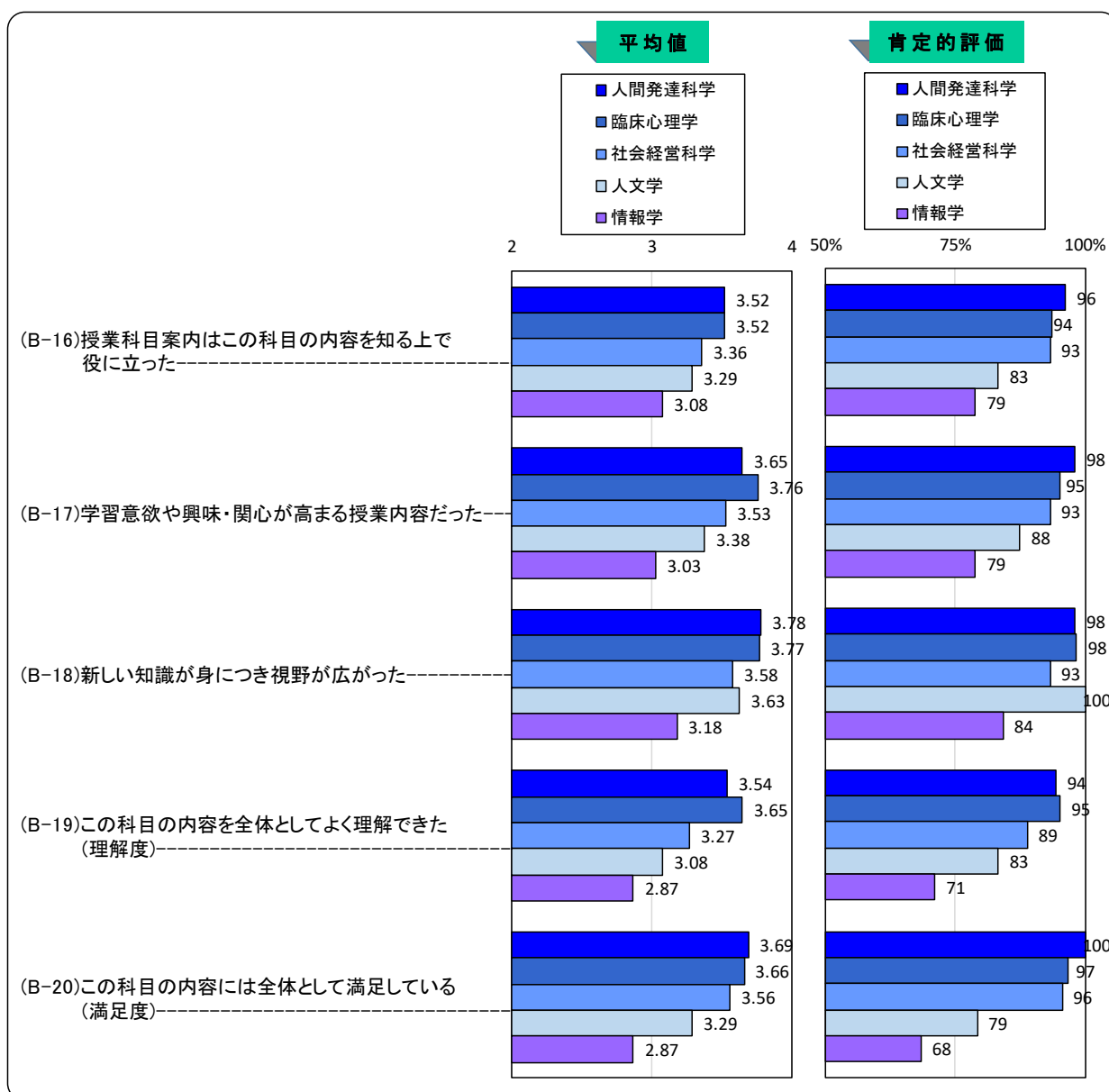
所属プログラム別に全体評価を見ると（図2-61）、(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」と(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」及び(B-20)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」では「人間発達科学」が最も評価が高く、特に(B-20)は100%と、非常に高かった。

(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」では、「人文学」が100%で、「人間発達科学」と「臨床心理学」も共に98%と、評価が高かった。

(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」では、「人間発達科学」と「臨床心理学」が他のプログラムに比べ高い評価であった。

反対に「情報学」は全ての項目で最も低い評価で、目立つ特徴が現れていた。

図2-61【大学院】所属プログラム別の全体評価

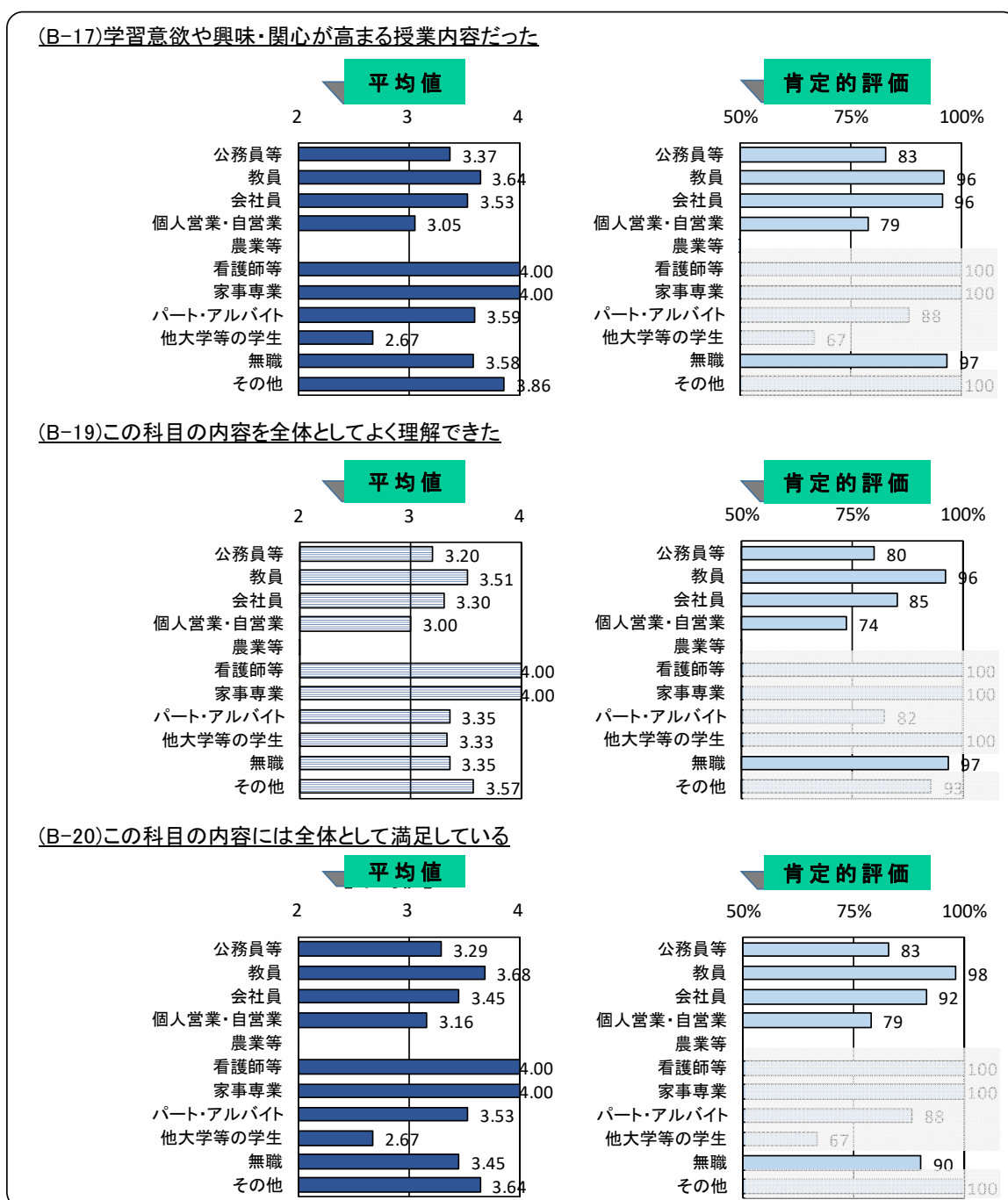


職業別（図2-62）では、(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」は、96%以上の「教員」「会社員」「無職」の評価の高いグループと、高くても83%以下の「公務員等」「個人営業・自営業」に二分されていた。

(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」では、「教員」(96%)と「無職」(97%)の評価が高く、「個人営業・自営業」は74%と、8割に達していなかった。

(B-20)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」では、「教員」の評価が非常に高く98%、「個人営業・自営業」が79%で、「満足度」の評価に大きな差が見られた。

図2-62【大学院】職業別の全体評価

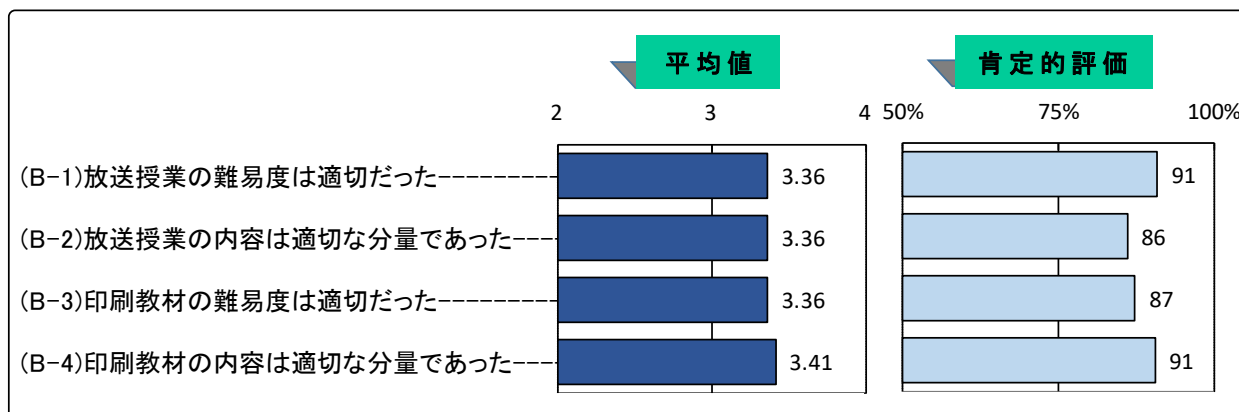


(2) 授業の難易度・分量

次に授業の難易度・分量について評価項目ごとに見ていく。

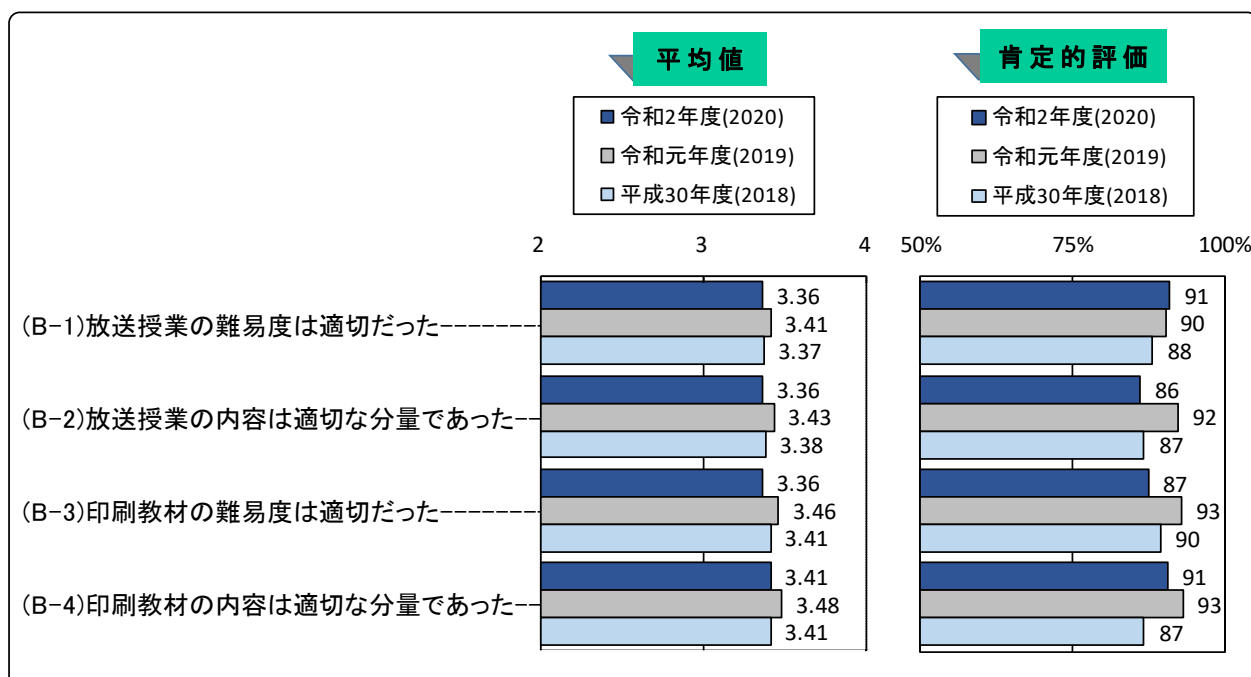
授業の難易度・分量の評価は(図2-63)は、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」と(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」が91%と、高い評価であった。

図2-63【大学院】回答者全体の授業難易度・分量の評価



開設年度別では(図2-64)、本年度と昨年度を比較すると、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」と(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」は、昨年度と同水準であったが、残る(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」と(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」は共に6ポイントの減少で下降幅は大きかった。

図2-64【大学院】回答者全体の授業難易度・分量の評価(開設年度比較)



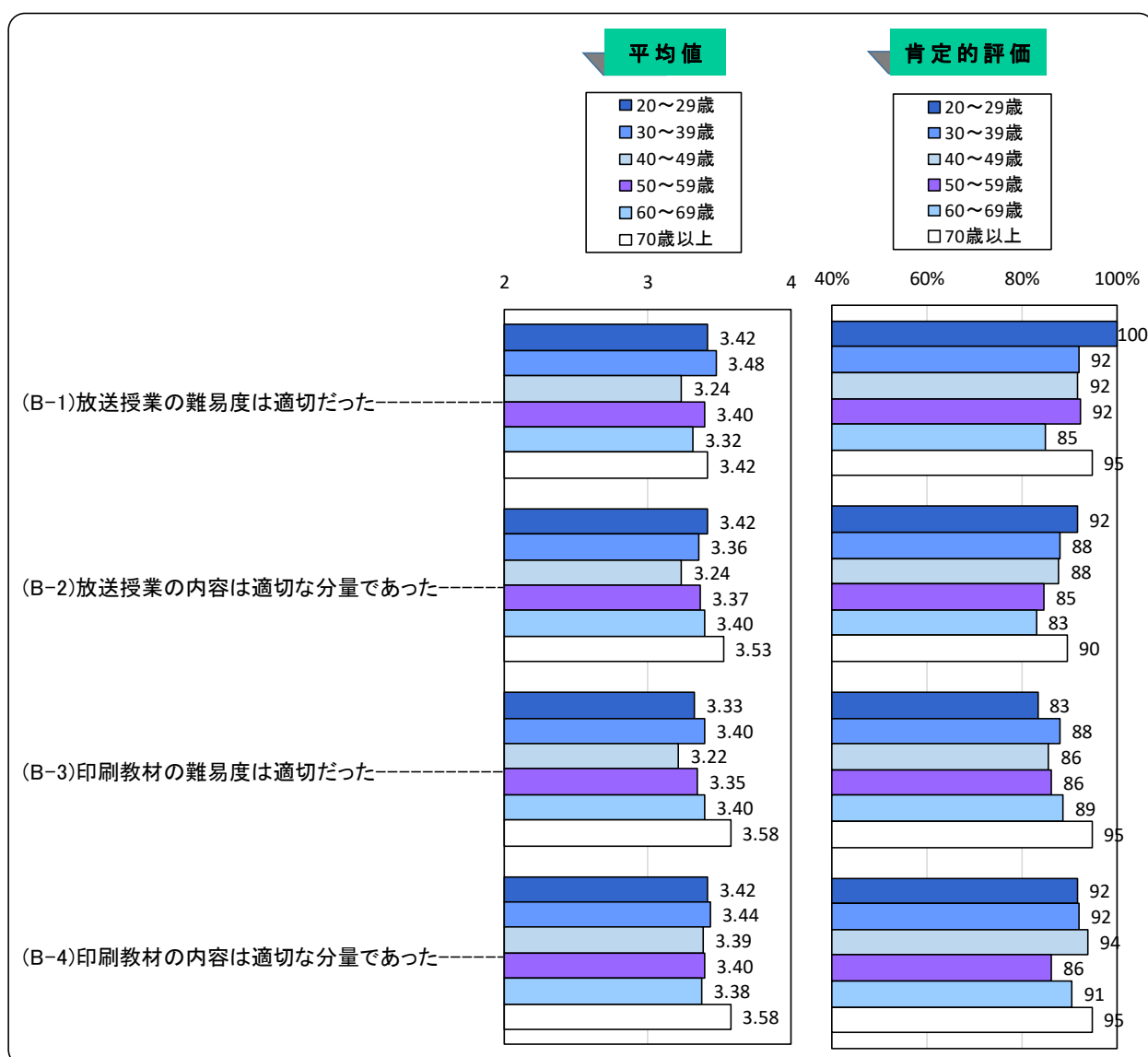
年齢階層別に授業の難易度・分量を見ると（図2-65）、下記4項目全てで70歳以上は評価が最も高く、いずれも90%以上であった。

反対に評価が低かったのは、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」と(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」では60歳代で、評価の最も高かった70歳以上と比べ7ポイント以上、下回っていた。

(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」では、50歳代の評価が低く、70歳以上と比べ9ポイント下回っていた。

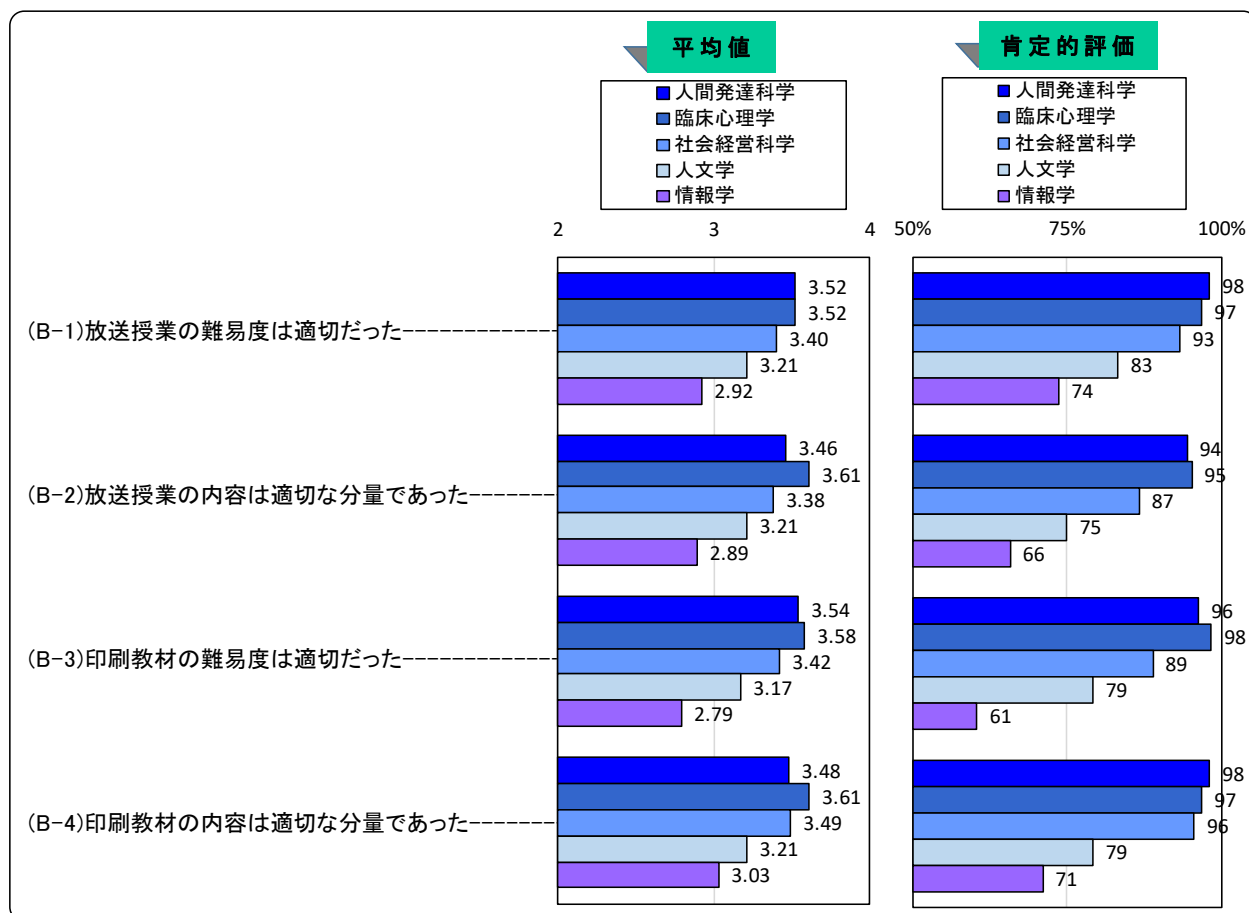
※「20～29歳」は回答者数が12人と少数である為、コメントを差し控えた。

図2-65 【大学院】年齢階層別の授業難易度・分量の評価



所属プログラム別に授業の難易度・分量を見ると（図2-66）、下記の4項目全てで同じ様な傾向が見られ、「人間発達科学」と「臨床心理学」は最も評価が高く94%～98%であったのに対し、「情報学」は高くても74%に留まり、特に(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」では、61%と極端な低評価であった。

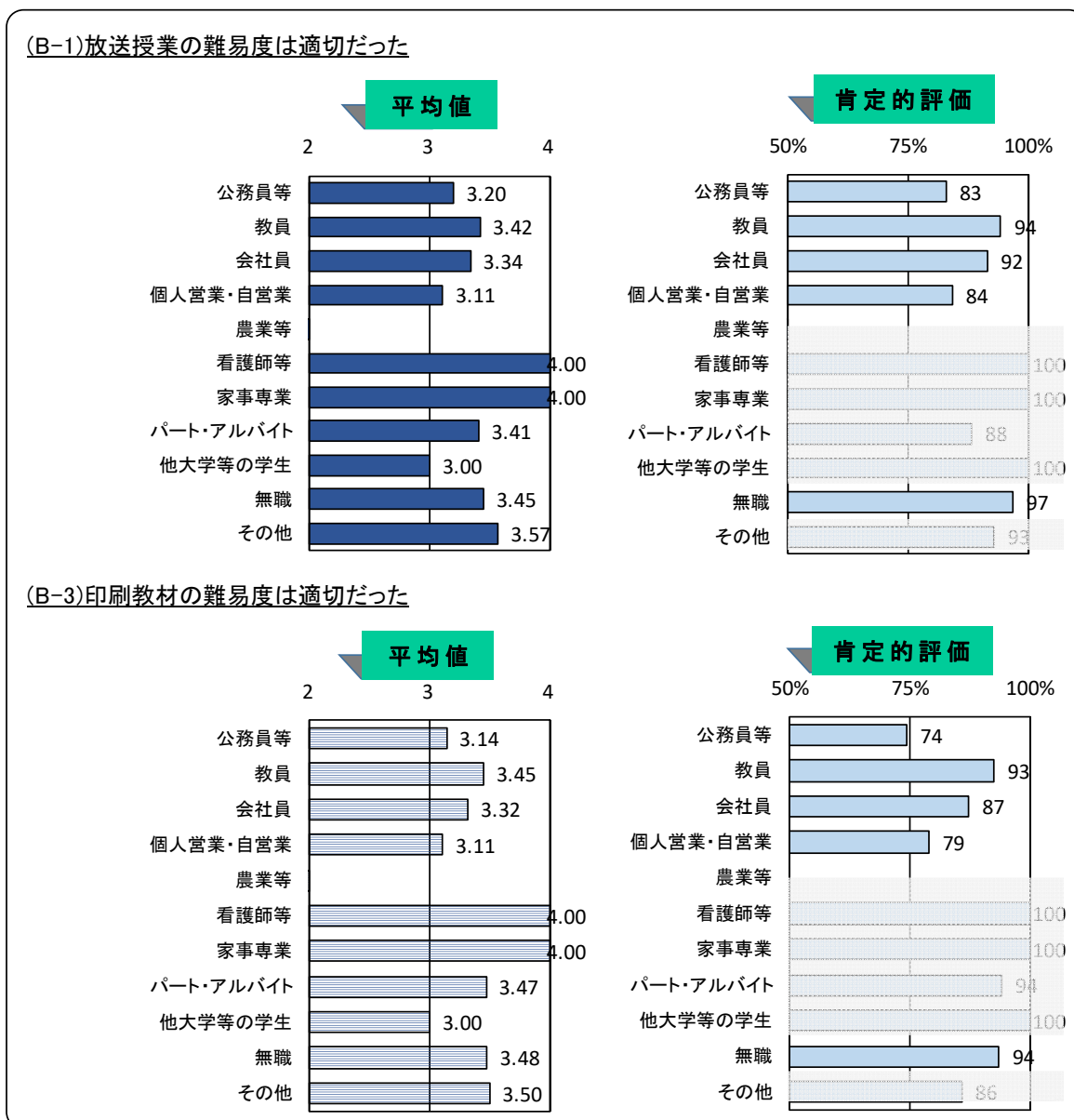
図2-66 【大学院】所属プログラム別の授業難易度・分量の評価



職業別に授業の難易度を見ると（図2-67）、下記の2項目で高い評価であったのは「教員」と「無職」で、93～97%に達していた。

反対に、下記2項目で最も評価が低かったのは「公務員等」で、(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」では、その評価が74%と非常に低かった。

図2-67【大学院】職業別の授業難易度の評価

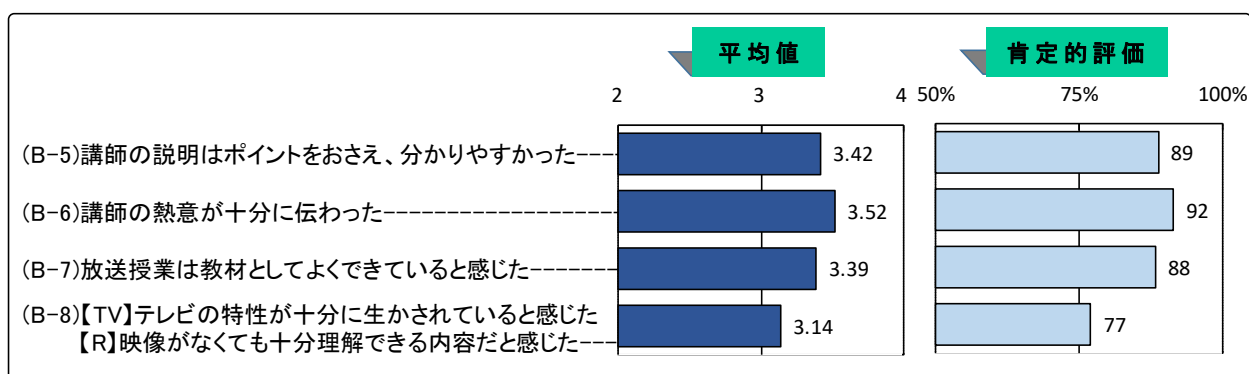


(3) 放送授業

ここからは放送授業について評価項目ごとに見ていく。

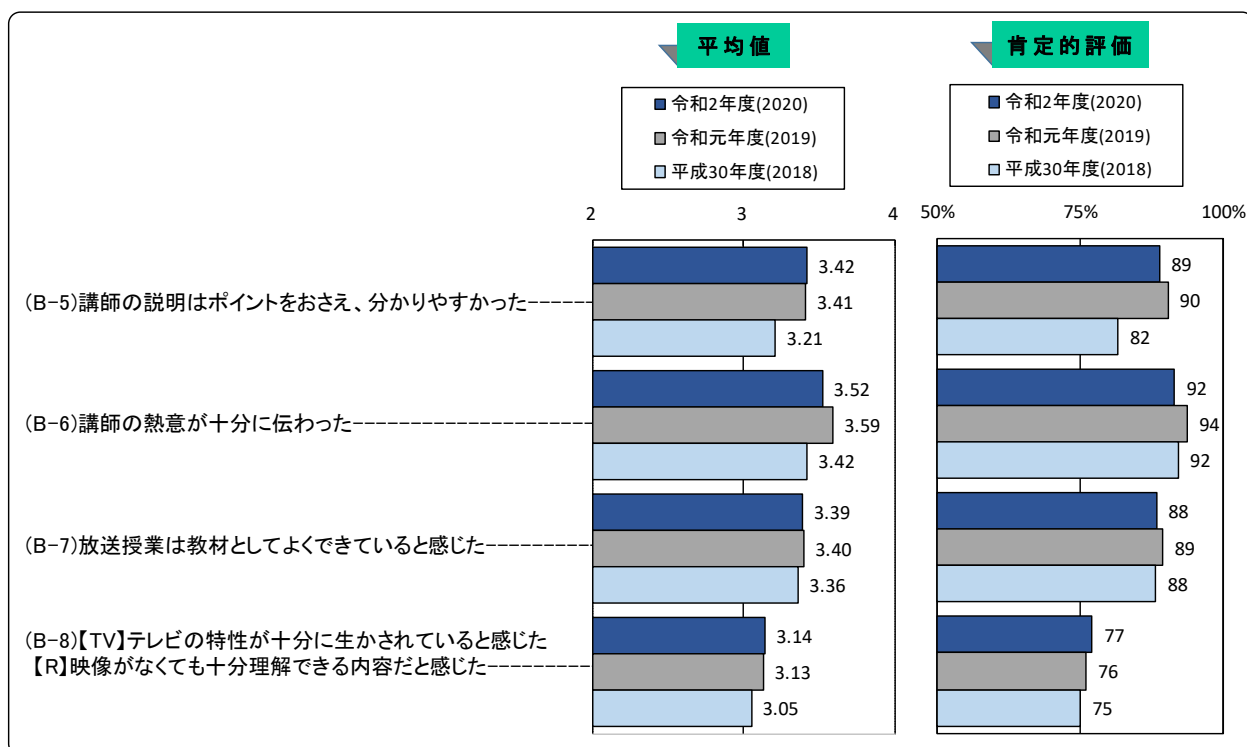
放送授業に関する評価項目を見ると(図2-68)、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」が92%と最も高く、(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は77%と、極めて評価が低かった。

図2-68 【大学院】回答者全体の放送授業の評価



放送授業の評価を時系列で見ると(図2-69)、下記4項目全てで、本年度と昨年度は同水準で、ほとんど変わりはない。

図2-69 【大学院】回答者全体の放送授業の評価(時系列)



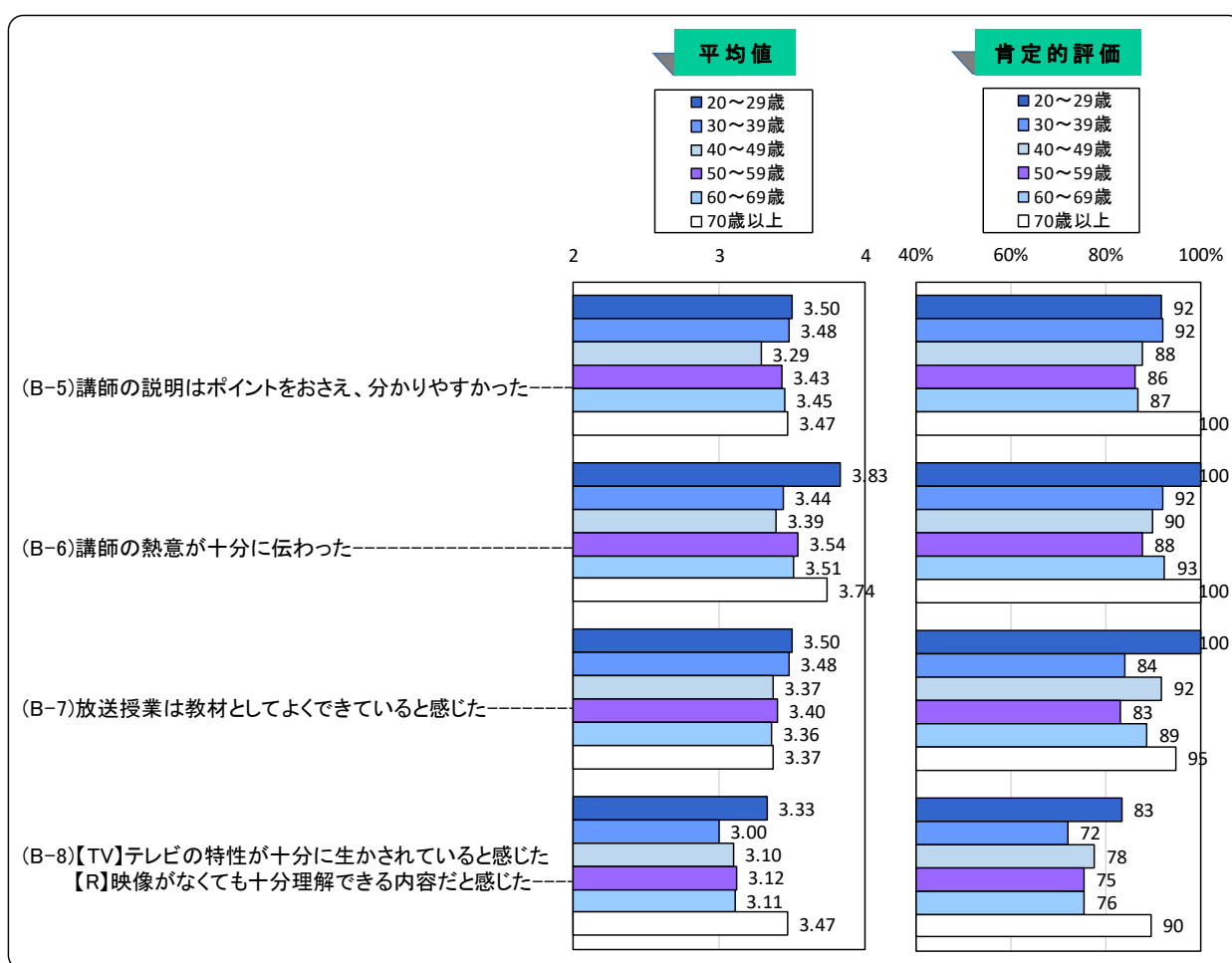
年齢階層別では（図2-70）、下記の全項目で70歳以上の評価が最も高く、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」では、100%に達していた。

反対に評価が低かったのは、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」と(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」では、50歳代で、最も評価の高い70歳以上からそれぞれ12ポイントのマイナスであった。

同様に(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に生かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」では、30歳代の評価が最も低く、70歳以上から18ポイントの大幅減であった。

※「70歳以上」は回答者数が19人と少人数であることを、留意されたい。

図2-70【大学院】年齢階層別の放送授業の評価



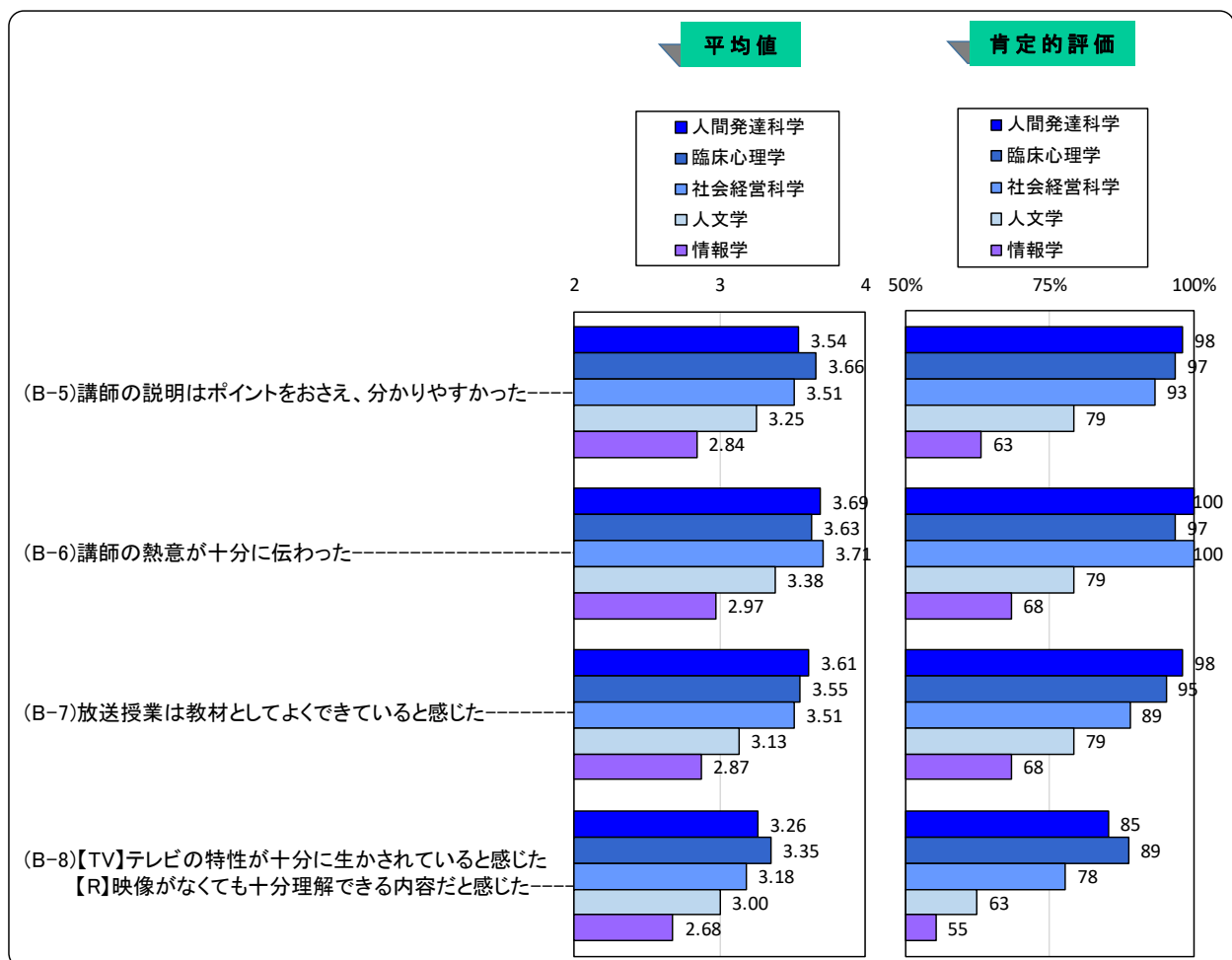
所属プログラム別では（図 2-71）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は、「人間発達科学」と「臨床心理学」の評価が高かった。

(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」では、「人間発達科学」と「社会経営科学」が高く、共に100%と、際立っていた。

(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は、「臨床心理学」が高く、89%に達していた。

反対に、「情報学」が全ての項目で評価が極端に低く、特に(B-8)では、55%の肯定的評価に留まり、「情報学」履修者の放送授業に対する評価に、特徴的な傾向が見られた。

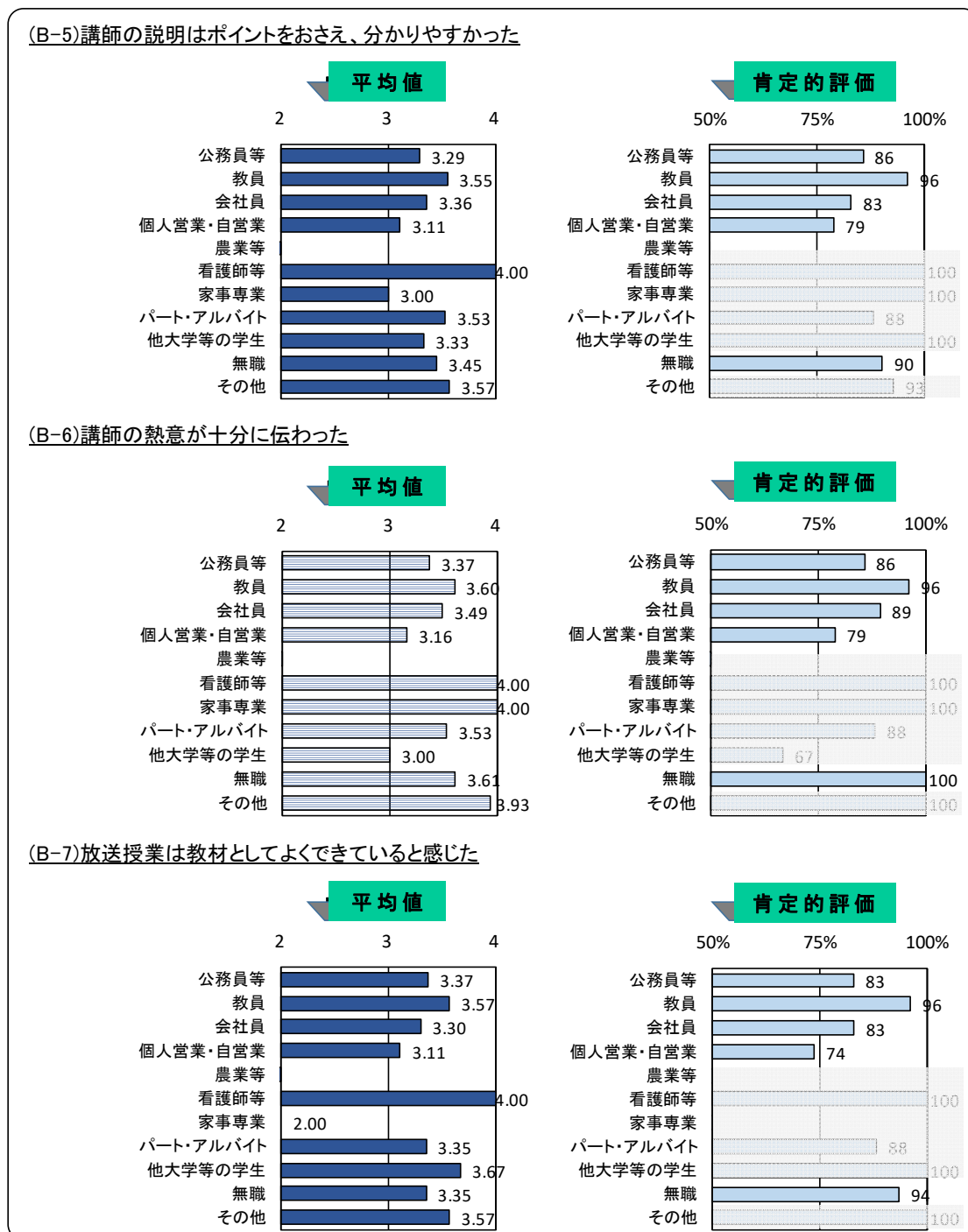
図 2-71 【大学院】所属プログラム別の放送授業の評価



職業別では（図2-72）、下記3項目で共通していたのは、「教員」と「無職」の評価が上位1、2位を占め、他の職業よりも際立っていた。

反対に「個人営業・自営業」は、他の職業と比べ評価が非常に低く、特徴的な傾向を示していた。

図2-72【大学院】職業別の放送授業の評価

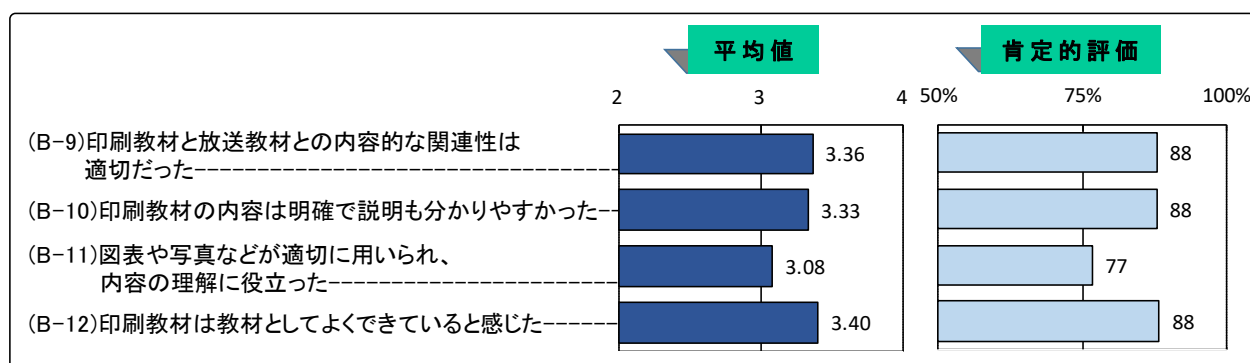


(4) 印刷教材

ここからは印刷教材について、評価項目ごとに見ていく。

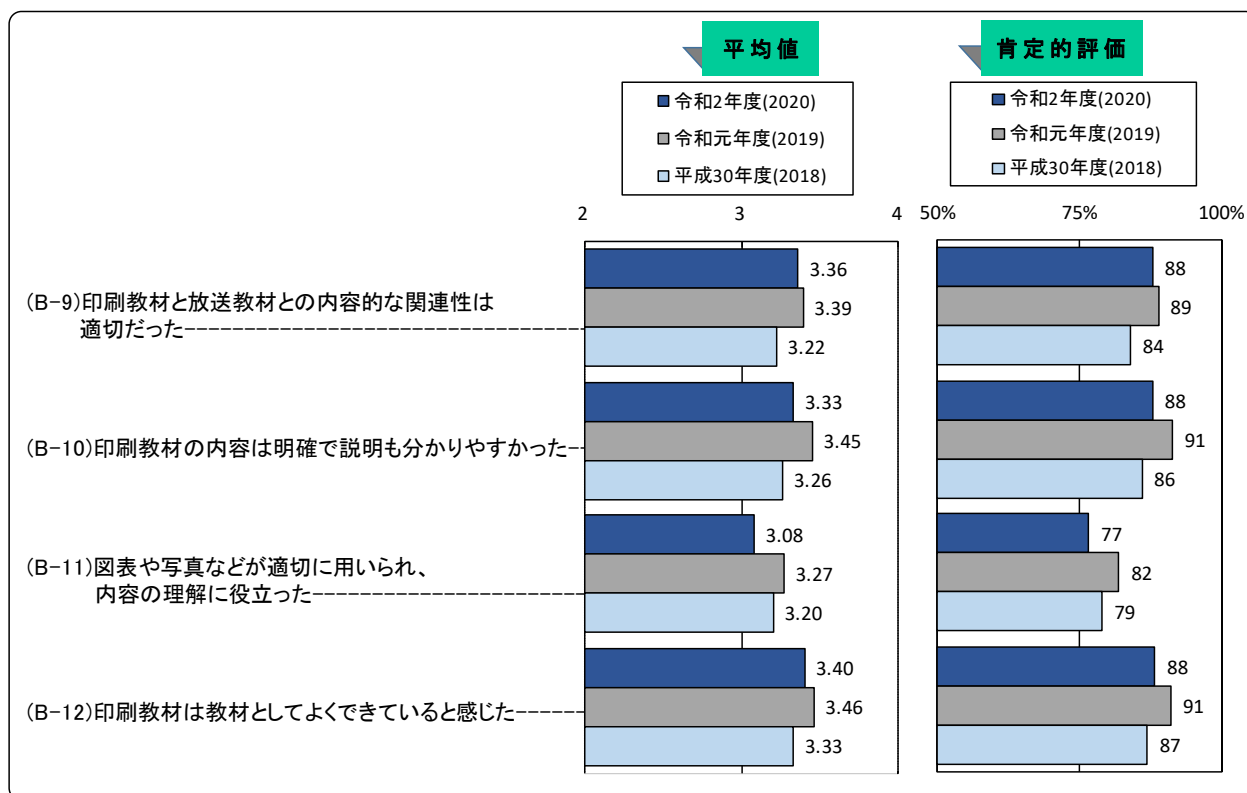
印刷教材の評価項目では（図2-73）、(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」を除く全ての項目で、88%と高い評価であったが、(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は、77%と目立って低かった。

図2-73 【大学院】回答者全体の印刷教材の評価



印刷教材の評価を時系列で見ると（図2-74）、以下の4項目では、本年度は昨年度と比べ(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」が5ポイントの減少で、他の項目と比べると減少幅が目立った。

図2-74 【大学院】回答者全体の印刷教材の評価（時系列）



年齢階層別の評価（図2-75）は、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」では、30歳代と70歳以上の評価が95%以上に達していたが、40歳代と50歳代の評価は、上位グループから10ポイント減と、低い評価であった。

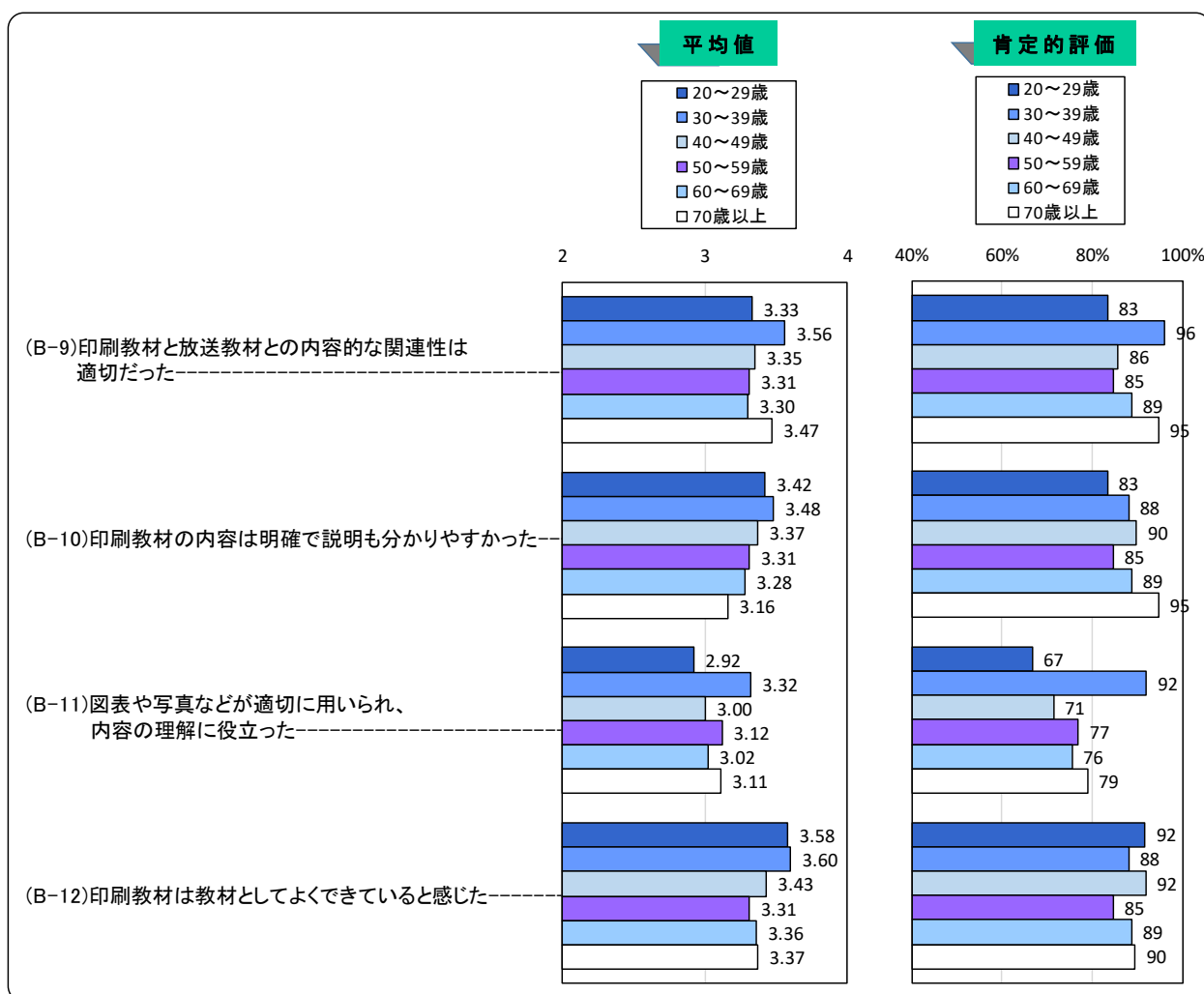
(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」では、70歳以上の評価が95%と、高かったのに対し、50歳代は、そこから10ポイントのマイナスと、評価が低かった。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は、30歳代が92%と、他の年代と比べ、突出していた。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は、40歳代が92%と最も高く、反対に50歳代が85%と最も低かった。

※「20～29歳」は回答者数が12人と少人数である為、コメントを差し控えた。

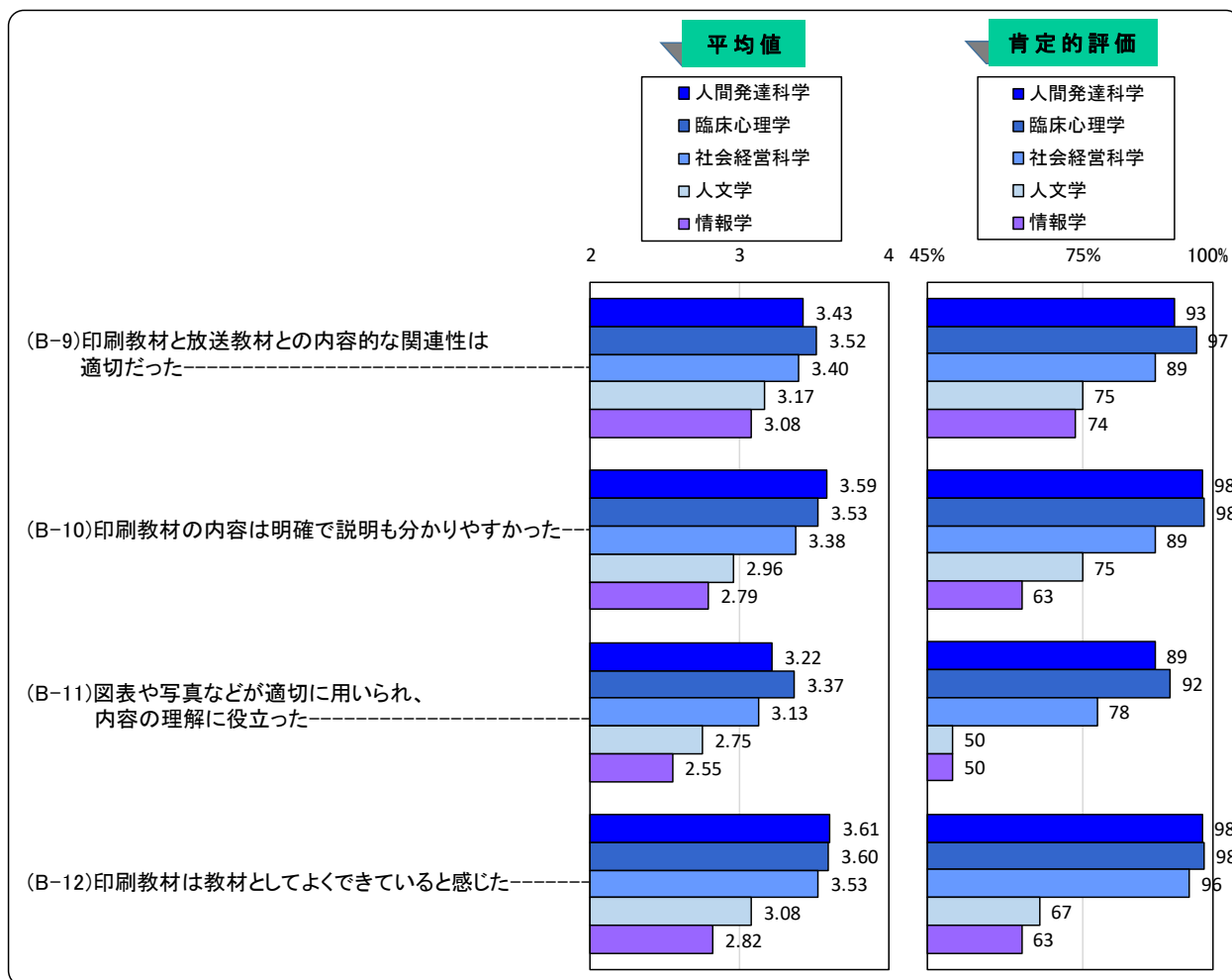
図2-75 【大学院】年齢階層別の印刷教材の評価



所属プログラム別の評価を見ると（図2-76）、「人間発達科学」と「臨床心理学」は下記の全ての項目で、上位1,2位を占め、高い評価をしていた。

反対に「人文学」と「情報学」は全項目で評価が低く、特に(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では、共に肯定的評価をしたのは50%に過ぎず、極めて低い評価であった。

図2-76 【大学院】所属プログラム別の印刷教材の評価

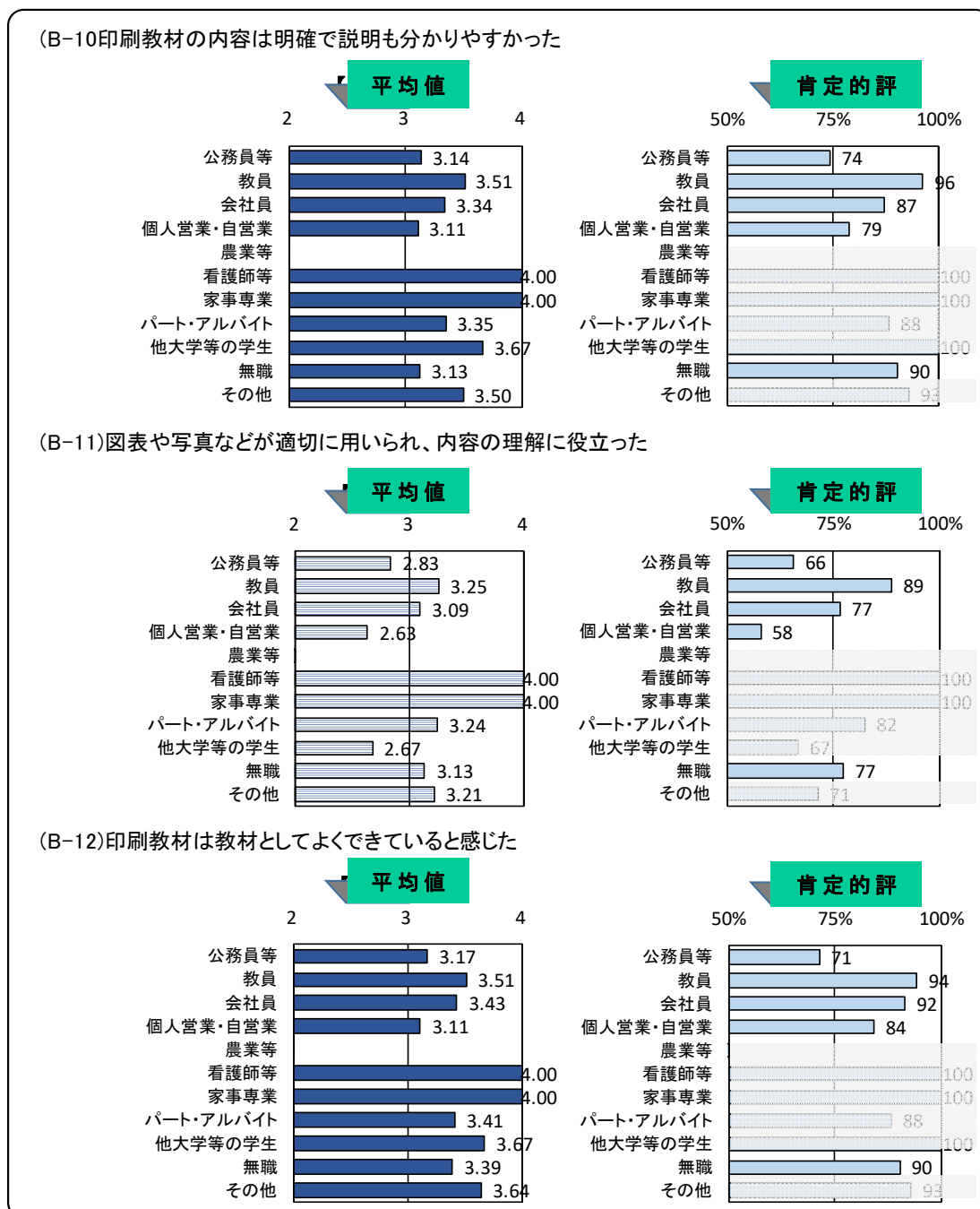


職業別では（図2-77）、下記の項目全てで「教員」の評価が最も高かった。

反対に評価が低かったのは、(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」と(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」では、「公務員等」であった。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では、「個人営業・自営業」で、その評価は58%と極めて低かった。

図2-77【大学院】職業別の印刷教材の評価

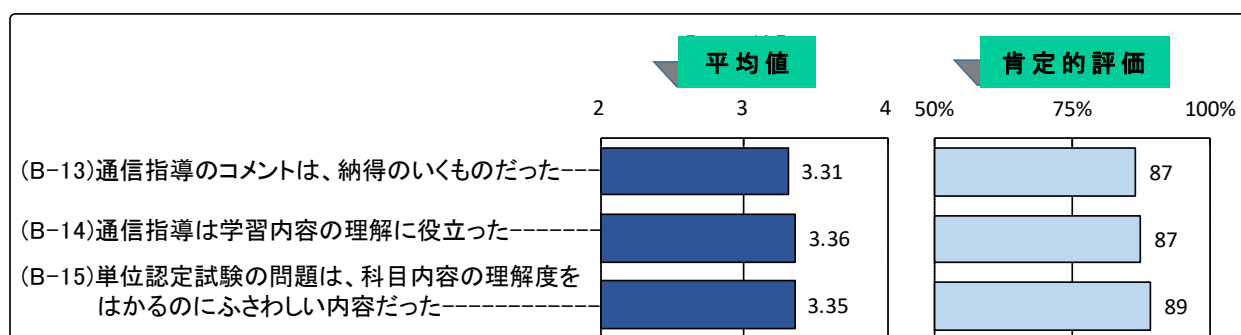


(5) 通信指導・単位認定試験

最後に通信指導・単位認定試験の評価について項目ごとに見ていくことにする。

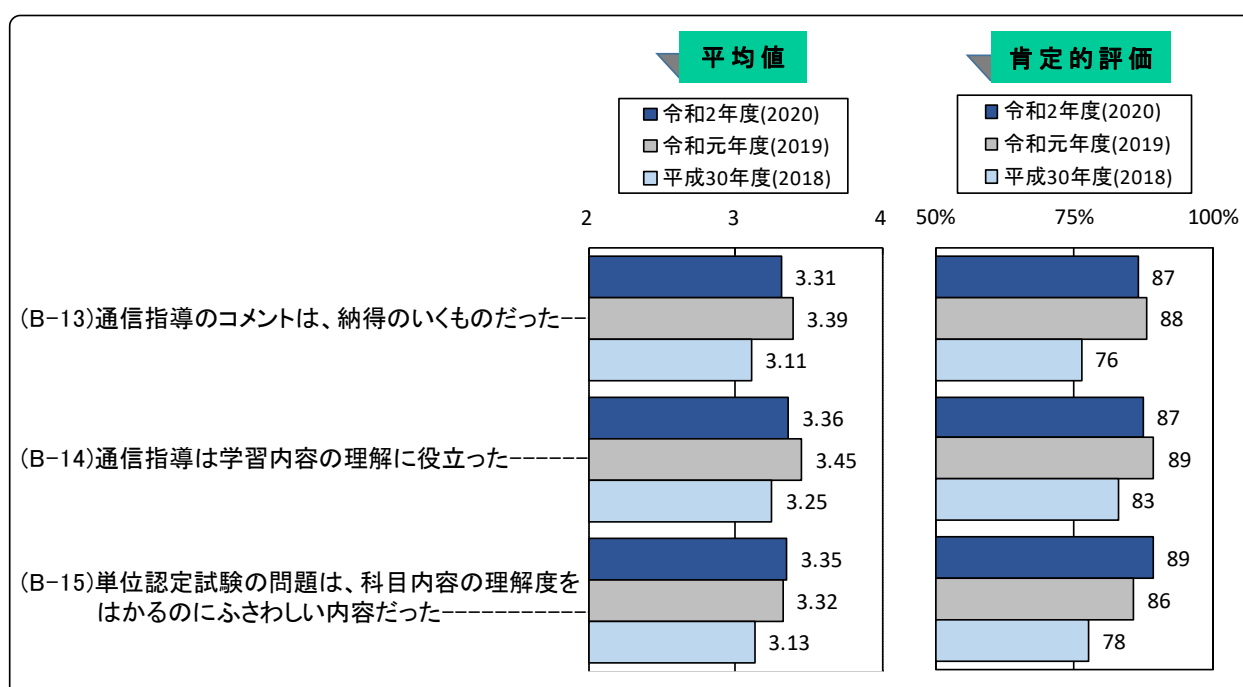
(図2-78)の通信指導については、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだったのでは」と(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」は共に87%、(B-15)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」は89%と、前項目より僅かに高かった。

図2-78 【大学院】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価



通信指導・単位認定試験の評価を時系列で見ると(図2-79)、昨年度と比べ、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」は1~2ポイントの減少であったが、(B-15)「単位認定試験の問題は科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」は+3ポイントと僅かに上昇していた。

図2-79 【大学院】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価(時系列)



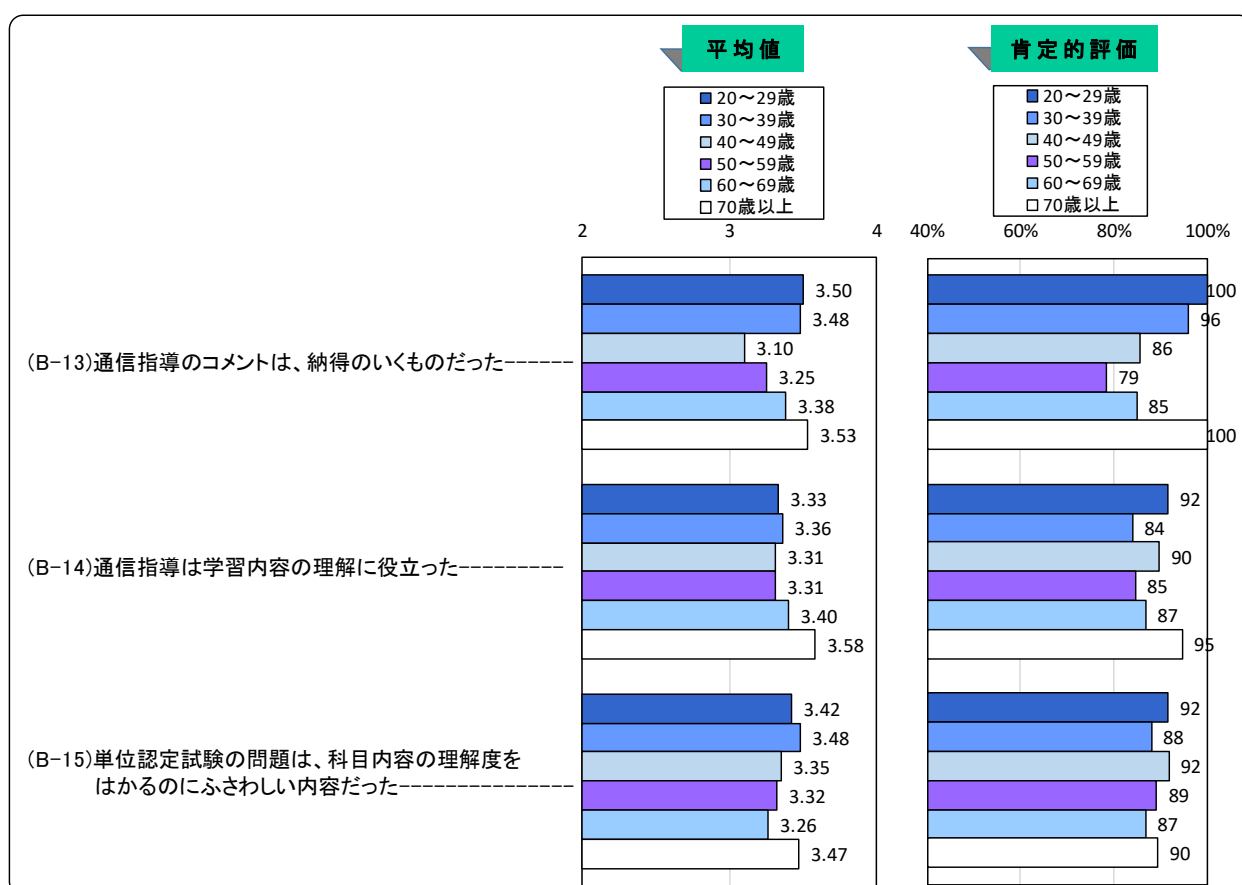
年齢階層別の評価（図2-80）では、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」は70歳以上が100%と、最高の評価であったのに対し、50歳代が79%と、目立って評価が低かった。

(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」では、やはり70歳以上の評価が95%と高く、反対に30歳代と50歳代が84~85%と、低い評価であった。

(B-15)「単位認定試験の問題は科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」は40歳代が92%と、高い評価であった。

※「20~29歳」は回答者数が12人と少人数である為、コメントを差し控えた。

図2-80【大学院】年齢階層別の通信指導・単位認定試験の評価



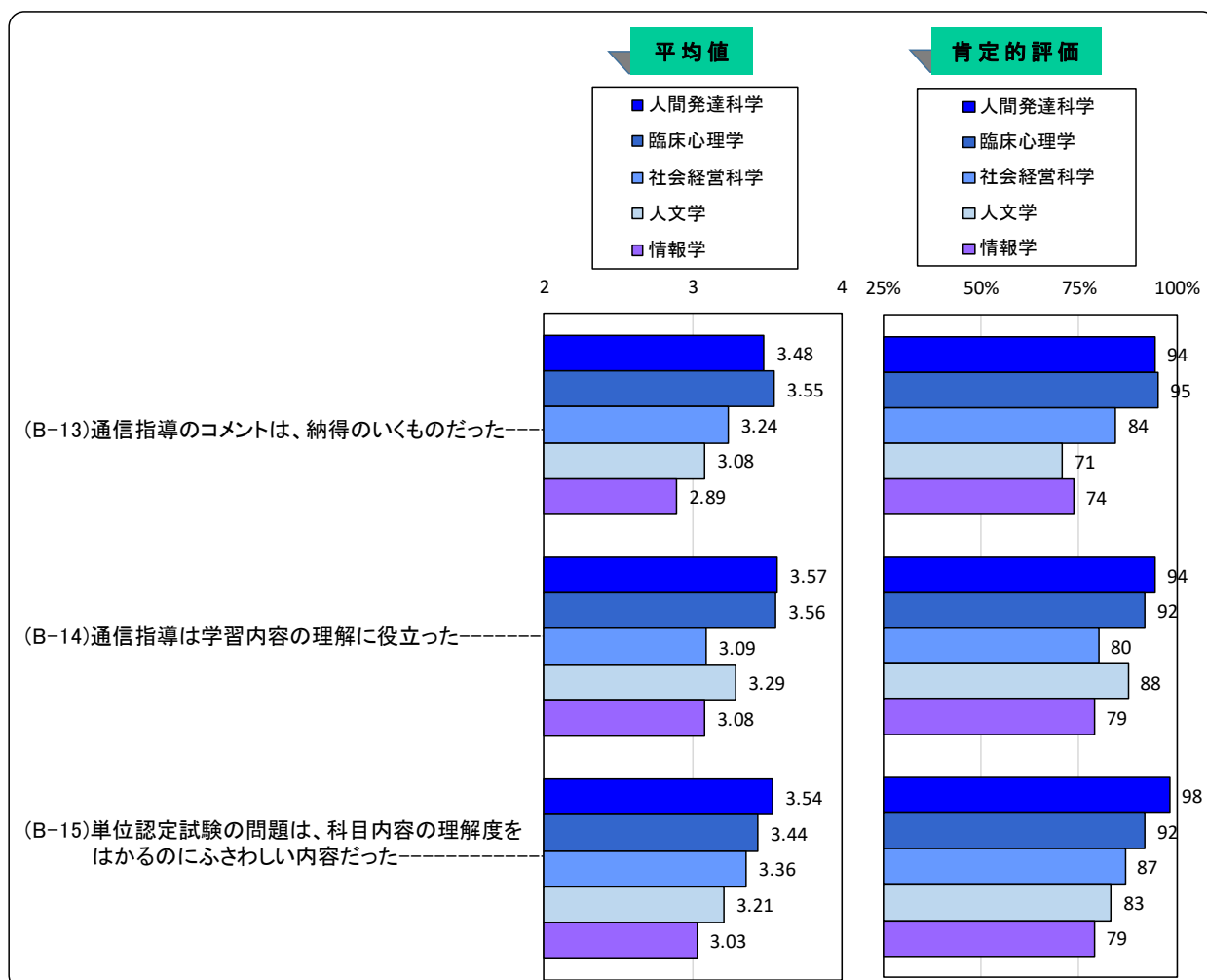
所属プログラム別では（図2-81）、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と (B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」は、「人間発達科学」と「臨床心理学」の評価が92～95%と高かった。

(B-15)「単位認定試験の問題は科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」は、「人間発達科学」が98%と、極めて高かった。

反対に評価が低かったのは、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」では、「人文学」(71%)と「情報学」(74%)、(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」では、「社会経営科学」(80%)と「情報学」(79%)であった。

また、(B-15)「単位認定試験の問題は科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」では、「情報学」が79%と、最も低い評価であった。

図2-81 【大学院】所属プログラム別の通信指導・単位認定試験の評価

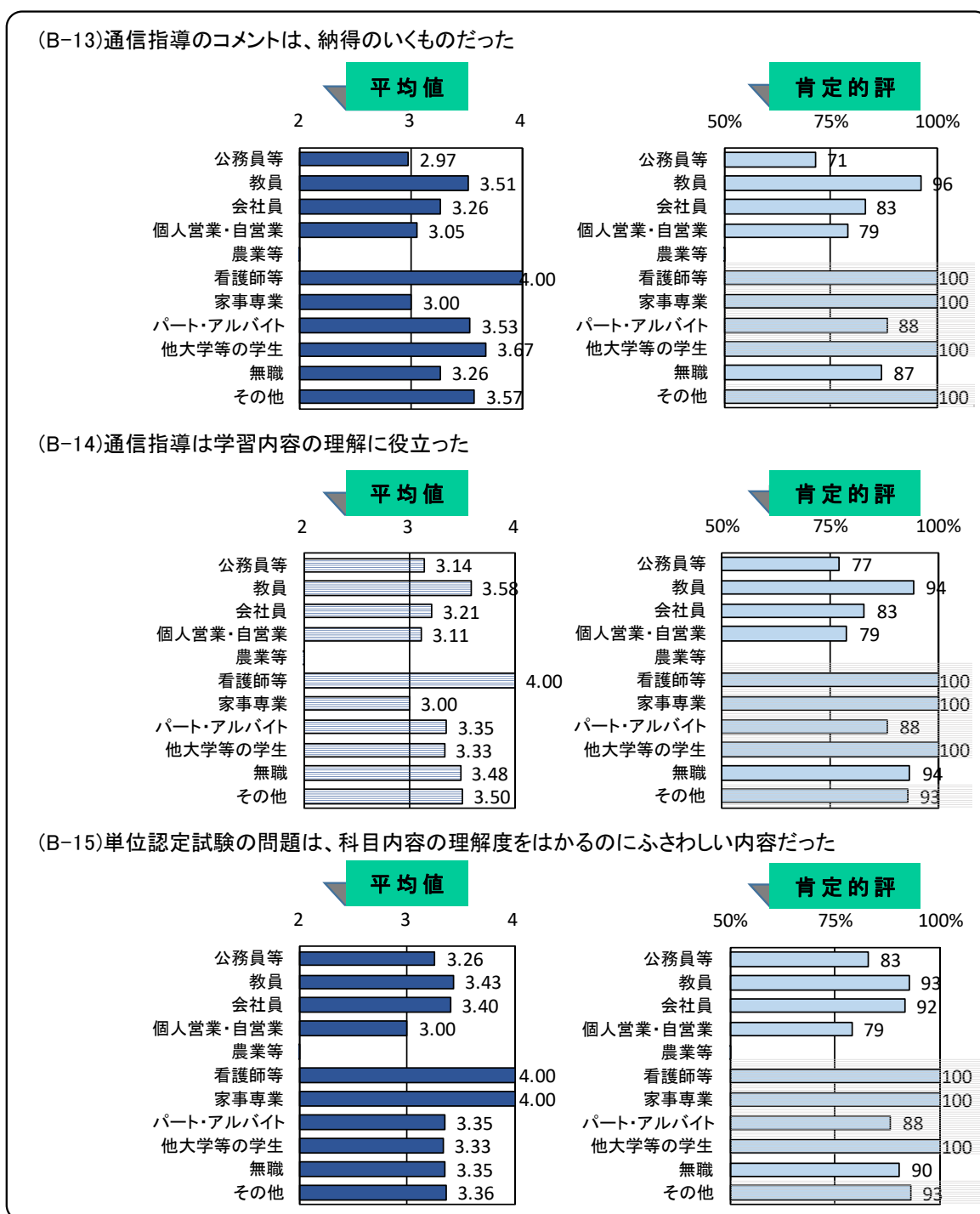


職業別では（図2-82）、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」は、「教員」の評価が95%前後で高く、「公務員等」が70%代で低かった。

(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」では、無職の評価も94%と、高かった。

(B-15)「単位認定試験の問題は科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」では、「教員」と「会社員」が90%を超え高く、反対に「個人営業・自営業」の評価が79%に過ぎなかった。

図2-82【大学院】職業別の通信指導・単位認定試験の評価



Ⅱ－２－４．大学院の重回帰分析

大学院でも学部同様、重回帰分析を試みた。

その重回帰分析とは、数量データである目的変数と説明変数の関係を調べ、重回帰式（モデル式）を導き出す解析手法である。

今回も、全体の満足度（B-20「この科目の内容には全体として満足している」）を目的変数とし、調査票 I.A「授業への取り組み姿勢」を除く B-1～B-19 の各項目を説明変数として分析を試みる。

本調査の選択肢はカテゴリーデータであるが、平均値の算出と同様『あてはまる→4』のように数値をポイント化する事で数量として扱い、重回帰分析を適用する。

最終的には「全体の満足度」に寄与する項目を明らかにすると共に、その影響力の強さを知る事を目的としている。

項目名	変数	対象
目的変数	y	全体の満足度 B-20
説明変数	x_1, x_2, \dots	各項目 B-1～B-19: 全 19 問(項目)
係数	a_1, a_2, \dots	重回帰分析によって得られる偏回帰係数

重回帰式 $y = a_0 + a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + a_{19}x_{19}$ (説明変数が 19 個の場合)

サンプルサイズが十分でない場合や説明変数が多すぎると、全体の満足度を表すのに適した重回帰式を得られない事が経験的に分かっているため、重回帰分析の中で、説明変数間で強い相関関係がある場合、その一方の項目を自動的に削除する「変数減少法」を用いて解析を行う事にする。

使用するデータは質問項目 I.B の全設問を全て回答した 223 人のローデータを使用する。(一昨年度からオンライン利用によるアンケート形式に替わり、今回も全員が全設問を回答していた。)

■分析精度

自由度修正済み決定係数とは、得られた重回帰式が目的変数に対してどれだけ説明力(寄与度)があるかを示す指標で、「1」に近いほど良い結果で、この分析では 0.841 であった。

ダーヴィンワトソン比とは、残差同士の系列相関(自己相関)を示す指標で、0～4 までの値を示し、1 以下や 3 以上だと残差(誤差)に規則性があり、解析自体、あるいはデータ自体に問題があり、「2」近辺の値ならよいとされ、その値は 1.803 となった。

以上の結果から、問題のない結果が得られた事が示されている。

◆分析精度

決定係数	0.841
自由度修正済み決定係数	0.837
ダーヴィンワトソン比	1.803
残差の標準偏差	0.304

今回の重回帰分析では下表の分散分析表が示すとおり、有意水準 0.01 の判定で、かなりの精度で式の当てはまりの良さが確認できた。

(有意水準とは危険率と同義で 0.01 の場合、判定を誤る確率が 1% である事を現している。)

◆分散分析表

変動	偏差平方和	自由度	不偏分散	分散比	p 値	判定
全体変動	125.561	222				
回帰による変動	105.638	6	17.606	190.884	0.000	[**]
回帰からの残差変動	19.923	216	0.092			

凡例	有意水準	凡例	有意水準
[**]	0.01	[*]	0.05

下表にある標準偏回帰係数とは説明変数の相互比較を可能にするためのもので、各説明変数の目的変数に対する影響力の度合いがこれで分かる。

標準偏回帰係数（全体の満足度に対する寄与度）が最も高かったのは、B-17「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」で 0.267、次いで B-12「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」(0.263)、他に B-18「新しい知識が身につく視野が広がった」(0.229)と続いていた。

説明変数の影響力の度合いを比較するために、表中の標準偏回帰係数の中で最も小さい B-6 (0.121) を基準に、他の項目がその何倍になるか算出してみた。(表中の右端の数値) その結果、高い順に B-17:2.2 倍、B-12:2.2 倍、B-18:1.9 倍となり、3 項目間に大きな違いは無かった。

今後の「全体の満足度」(肯定的評価 91%) を上げるためには、上位 3 項目(「B-17 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」・「B-12 印刷教材は教材としてよくできていると感じた」・「B-18 新しい知識が身につく視野が広がった」)の肯定的評価を上げる事に重点を置く施策が、効果的であると考えられる。

この 3 項目の肯定的評価について見てみると、B-17:92%、B-12:88%、B-18:95%で、それぞれの肯定的評価を上げる余地は残っていると思われる。

目的変数	標準偏回帰係数	説明変数	判定	B-6との対比
B-20.全体の満足度	0.267	B-17 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった	[**]	2.2
	0.263	B-12 印刷教材は教材としてよくできていると感じた	[**]	2.2
	0.229	B-18 新しい知識が身につく視野が広がった	[**]	1.9
	0.131	B-7 放送授業は教材としてよくできていると感じた	[**]	1.1
	0.121	B-6 講師の熱意が十分に伝わった	[**]	1.0
		定数項	[**]	

※説明変数の中で有意水準が0.05以下の項目だけを掲載した